東洋文化心理

精神分析

★第8卷・第1號★昭和15年・1月★

昭和十三年六月十日第三種郵便物認可・昭和十四年十二月廿五日印刷納本・昭和十五年一月一日發行・毎月一回發行

古趙邯鄲縣夢枕佛古蹟

アブフウブ欄・五十四頁參照

東京精神分析學研究所出版部

東洋文化心理號・內容目次

『精神分析』第八巻・第一號

精神分析　前號要目

日本の風俗　三巻一號

本號からは書店に配本いたしませんから、直接御申込下さいまし。

定價五十錢・半年三圓

東京市瀧野川區上中里町六拾二番地一の通

發行所　日本風俗研究所

振替　東京一六三四〇七番

『精神分析』第八巻第一號巻頭言

★世界新文化の心理的方向

東洋文化はエス的、女性的であると云ふことが出來るならば、西洋文化は自我的、男性的であると云ふことが出來る。それ故に現在東洋文化が西洋文化に克服せられたやうに見えてゐるのは、超現實的、無意識的な東洋文化と、現實的で意識的な西洋文化との關係に於いては、自然な運命であつた。併し人間の生活に於いては、自我とエスとは分立すべきものではなかつたのだ。それを分立させたことは、今までの東西兩洋文化の行きづまつた最大の原因であつた。人間生活に於いては、本當は自我よりもエスの方が上位にあらねばならないのだ。そのことを敎へたのは精神分析學であつた。それ故に、將來當然現るべき新文化は東西兩洋文化の交媾の間から、卽ち自我とエスとの鬪爭の止揚の間から、生れなければならない。さうしてそれへの發足は東洋に於ける西洋と云はれる日本の分析學徒の責任であるやうに感ぜられるが、それが果してどの程度にまで實現せられ得るかと云ふ問題については、我等は只今あまりにナルチスティッシュな豫想を下すことを控へておかなければならない。（巻頭論文要領、第十五頁のエスペラントの原文）

東洋新文化と日本分析學の使命

大槻憲二

一、東西兩洋文化內容の心理學的對照

東洋文化を心理學的に研究してその特徴を闡明し、その將來の意義と發展の方向とを示唆しようとするのが本論文の目的である。この目的の達成が可能であるためには、まづ東洋文化と云ふ概念の成立が先決條件でなければならない。更にそれよりも前に、東洋と云ふ概念の成立が問題でなければならない。東洋と云ふ概念は、地理的と民族的と二種の方向から規定せられる。地理上では、東西的にはバルカン以東日本に至るまで、北はシベリアから南はインドに至るまでがその內に包含せられると、普通に考へられてゐる。民族的にはインド人、支那人、日本人、その他蒙古南洋の諸民族を包含するものと普通に解せられ、バルカン地方から北方ロシアにかけての諸民族は半ば東西洋の中間に屬し、その民族性は多分に東洋的でありながら、その生活的傳統には西洋的なものが多いと云ふ風に常識的に考へられてゐる。

このやうな常識的見解は、これを人種學的に基礎づけることは必ずしも不可能ではないであらうが、併し人種學などゝ云ふものは現在の狀勢に基いて茫漠たる過去を推定する方法に依るのであるから、多分に傳說的想像を用ゐるやうになり、そのやうな方法に依つて與へられたる民族性は誠にあやふやなものであつて、これを否定しようとして反證的材料を拾ひ上げればいくらでも拾ひ上げることは出來るのである。要するに、民族性と云ふやうなものは、これが存在を豫想する方が或る種の事實の理解に便利な限りに於いて容認せられるものであつて、或る種の事實が存在しなくなつたのに民族性をばかり豫想することは無意味であり、これを否定することの方が遙に容易になつて來るのである。

所謂東洋と所謂西洋とを對比的に觀察する時、その風俗、習慣、言語、思想などに甚だしい相違の存在することは何人もこ

れを否定することは出來ない。それ等の相違は如何にして生じたか。それは西洋民族の生活環境の相違と先天的性質との差別とから說明せられるのが普通であるが、先天的性質などゝ云ふものが果して存在するか、後天的性質と先天的性質との區別如何、性質と環境との關係如何などゝ云ふ問題を提出せられると、何人も答辯はしどろもどろにならざるを得ない。

それ故に、我々心理科學の徒は、東洋と西洋との區別と云ふやうな、哲學的、超科學的な概念の上に立つて論議を進めるの不安と危惧とを知らないものでないと云ふことを、まづこゝに斷つておかなければならない。併しながら、それにも拘らず、私が東洋文化の心理的意義と運命とをこゝに問題にし、讀者諸君と共に論考の道を辿つて行かうとするのは、この區別が單なる民族的區別ではなく、人間生活の方法上に於ける心理的區別をも同時に意味することを信ずるからである。

私はかつて佛教とキリスト教とを對比することによつて、東西兩洋民族の心理生活上の區別を說いたことがあつた。* その中で私は、キリスト教を假りに生の宗教と名付けることが出來るならば、佛教は死の宗教と名付けることが出來るとして、その兩方の精神的特徵は寺院建築の樣相に於いて象徵せられてゐると論じた。佛教とキリスト教とを以て直ちに東洋文化と西洋文化とを代表させることは輕率であるが、佛教が東洋諸國に廣く榮え、キリスト教が西洋諸國に永く感化を與へて來たことが事實である以上は、佛教とキリスト教とが何らかの意味で東西兩洋の文化の特徵の一部分を代表してゐることは認めねばならない。

註 『精神分析讀本』の內、「精神分析學から見た宗教心理」參照。

勿論、西洋の文化史にはキリスト教の外にヘレニズム（ギリシヤ主義）があり、ルネサンス以後の人本主義があり、近代に入つてキリスト教と矛盾し背反する幾多の思想が勃興し、且つ東洋の佛教の思想も相當の程度に根探く侵入したことは人々の知るところであるし、他方東洋に於いても、佛教の他に儒教あり道教あり神道あり、その上近世に入つて西洋文化の侵入あつて、外見上兩洋の區別を立てることの不可能、無意味を思はせるが、不可能の面から見れば不可能の事も可能の面から見れば可能の事はあり得るものだ。不可能の面から見る方法にも一つある。それは各民族の現在の種々な樣相を人類の歷史的發展の段階別と見る見方だ。この見方によれば、各民族は結局同じ性質や樣相を示すべき定めにあるが、その過程は種々の段階をとることが必然であるから、發展の遲速によつて種々な樣相を時代斷層的に示してゐるに過ぎないのだと云ふことになる。マルクシズム的社會史觀の如きがそれに屬するが、この種の見方は社會史觀には可能であつても民族性觀察には無理なやうに思はれる。

このやうに、東西兩洋の區別觀も、民族性概念の確立もなかなか困難な問題を多く含んでゐるが、併し常識的に觀察して見て、大體に於いて西洋人がよい意味に於いても惡い意味に於いても積極的、能働的、加虐的、現實的、理論的であり、東洋人がこれまたよい意味に於いても惡い意味に於いても、消極的、受働的、被虐的、超現實的、直觀的であると云ふことは許されるやうに思ふ。このやうな區別の根據に就いてはなほ後章に詳しく論究するつもりであるが、もし右のやうな結論が許されるとすれば、東洋人生活は、これを精神分析學的に云へば、大體に於いてエスを基調とするものであり、西洋人のそれは大體に於いて自我を基調とするものであると云ふことが出來るであらう。

ところで、人間の生活はエスを基調とすべきものであるか、自我を基調とすべきものであるかと云ふことは、簡單に斷定することは出來ない。併しながら、自我を基調とする生活が現實生活上に適すると云ふことは疑ふまでもないことである。それは丁度、國民の全能力を擧げて軍備の充實にあてる國家生活が國際競爭場裡にあつて勝利者となるの可能性の多いのと同じである。併し國家國民の生活意義は軍備を充實し近隣國又は世界を征服することにのみあるのではない。國民をして適度の自由を享受せしむることにより文化の向上を期し人類の福祉を增進するにあらねばならぬ。それと同じやうに、個人の生活も、ひたすらエスを斷壓することにより自我の强大を期することにのみ存するのではない。折角强大になつた自我は現實の勝利者となつても、何のために勝利者となつたのか、その意味が分らぬと云ふやうなことになつては仕方がない。現下に於ける西洋文明の危殆は、丁度さう云ふ事情に該當するものであると私は考へるのだ。それ故に久しく西洋自我文明の壓迫を受けて來た東洋は、こゝに猛然たる反動を示してその抑壓の解除を要求せんとしつゝある。さうして文化はエスを基調とすることに於いてのみその存在の意義があると云ふことをみづから範を示さねばならぬ立場に至つたのだと思ふのである。この時、エス（無意識）の解放を要求し、抑壓の除去を主張する精神分析學が東西兩洋の中央に位する一民族出身の一學徒に依つて唱導せられるやうになつたことは偶然でないやうに私には思はれる。併しその民族は既に久しく西洋文化の傳統を受けて來た民族であつた。その學問の體系と方法とは自ら西洋的であつた。然るにわれ等日本人は、東洋に於いて最も西洋的な性質を有する民族として、換言すれば、エスを主調とする生活の中にあつて自我のやゝ强建なる民族として、當來の新文化建設の大任を負ふべきものであるかも知れないと云ふ自恃心を持ちたくなる誘惑を感ずるのである。併しそれが果して我等日本人の手によつて果してなされるかどうかは、我等未だ明確な豫言をなし得る程の材料と根據とを持合せてをらぬのである。たゞそれは我等の希望を單なる自惚に終らせず、實現するための努力を互に怠らぬやうにしたいと誓ふのみである。

二、東洋否定説批判

本論文の要旨は既に大體に於いて右に暗示せられたのであるが、なほ細々した諸點の確認や證明や疑問解決のために、種々の方面に亙つて、考究して行つて見よう。

近頃、比較的諸方面で讀まれてゐるものに、津田左右吉氏の『支那思想と日本』と題する小著がある。この書の要旨は、日本文化は獨自のものであつて、支那の影響を受けたとしても外的な影響に過ぎず、實質は日本の創造であり、日本文化は獨自の發展により今日の域に達したものであり、更に近世に入つて西洋文化の影響を受容れることに依つて世界性を帶び、西洋文化と同列に位するものであると云ふにある。氏自身の言葉を少しく引用して見ると次の如くになつてゐる。

「日本の文化は日本の民族生活の獨自なる獨史的展開によつて獨自に形づくられて來たものであり、隨つて支那の文化とは、全くちがつたものであるといふこと、日本と支那とは別々の歴史をもち別々の文化をもつてゐる別々の世界であつて、文化的にはこの二つを包むものとしての一つの東洋といふ世界はなりたつてゐず、一つの東洋文化といふものは無いといふこと、日本は過去に於いて文化財として支那の文化を多くとり入れたけれども、決して支那の文化の世界につゝみこまれたのではないといふこと、支那からとり入れた文物は日本の文化の發達に大なるはたらきをしたことは明かであるが、一面またそれを妨げそれをゆがめる力ともなつたといふこと、それにもかゝはらず日本人は日本人としての獨自の生活を發展させ獨自の文化を創造して來たといふこと、日本の過去の知識としては支那思想が重んぜられたけれども、それは日本人の實生活とははるかにかけはなれたものであり、直接には實生活の上に働いてゐないといふことである。日本と支那と、日本人の生活と支那人のそれとは、すべてにおいて全くちがつてゐる、といふのがわたくしの考である。」

つまり文化觀念として「東洋」の端的な否定であり、日本と西洋とのみの存在の主張である。これに對しては我等の十一月研究會に於いて私は多少の批評を試み、宮田戊子氏も別の見地から批評を與へられた。私の批評は、津田氏の云ふところは至極尤であるが、尤過ぎてあまりにも當然である。それは例へば、日本人の口で喋舌れば英語も日本語に外ならぬと云ふ如き強辯の類であると云ふのであつたが、宮田氏のは、あまりに日支の相違點のみを擧げむとするに急であつて共通點に強ひて目を掩はうとする傾きがあると云ふのであつた。私はこゝで、津田氏説をなほ細かく批評すべきであるが、その後、人に教へられてこの書の批評が『中央公論』十一月號に小野清一郎氏に依つて試みられてゐることを知つたので、就いて見るに、實に完膚

なきまでに批評し盡くされてあることを見て、今更これに殆んど附加すべきものがないやうに思へた。たゞ小野氏は何故に津田氏がこのやうに偏狹なる强辯を弄するやうになつたかの心理的動機に立至つての觀察を試みては居なかつたので（それは小野氏が法律學者として當然の差控へであると共に、一種の禮讓でもあるが）、私は禮讓の範圍を脫せざる限り、心理學徒としてそれをなすべき必要と責任とを感ずる。その分析解釋を下す前に、私は小野氏の批評の大要をこゝに紹介しておくことが順序であることを思ふ。小野氏は批評文の最後の條で左の如く結論してゐる。さうしてこの結論こそは氏の縷述を巧みに要約したものと認められる。

「津田博士の學說は民族の特殊性を認識せしむることに依つて民族的現實を無視した世界主義的或は帝國主義的空想を破する作用があるであらう。その點に於いて或る實際的意義を持つ。しかし、其は東洋的普遍に盲目であることによつて東洋に於ける文化的新秩序の發展を阻碍する虞れがある。しかも日本の文化を容易に西洋文化と同一視することによつて日本固有の文化を抛棄し、西洋文化を絕對視する點において、實は甚だしき非民族的思想を釀成するものと云ふべきである。」

小野氏が「或る實際的意義」と云はれるのは、政治的意義の事であつて、津田氏の論が今日に迎へられるのはさう云ふ或る種の政治的意義からであるが、併し一般人の間にこれが歡迎せられるのは、それが日本民族の劣等感を優越感に置換へるに成功するからである。東洋民族としては西洋民族に對して劣等感を持つ日本民族が、この劣等感を優越感に置換へて愉快な氣分になり得る唯一の方法は、同じ東洋民族としての支那民族と文化的に無緣を宣言し、文化的に西洋と同一視することが出來るならば、それに越した方法はないのである。かう云ふ傾向的意圖の下に、日本と支那との間に存する一切の共通點を默殺し、當然あるべき多くの相違點を數へ上げようとすれば、これは必ずしも出來ないことではないと共に、現に津田博士がその博識を傾けて成し遂げ得たところであつた。我等はその政治的意圖を壯とすると共に、その心理的意圖を憫笑するものである。何となれば、そのやうな事實の歪曲による病的な心理過程は、將來の日本文化を決して健全な方途に進ましめる所以でないことが明だからだ。

このやうにして、我等は小野氏との協力によつて東洋文化の存在を津田氏の抹殺から救ひ出し得たと信ずる。さうして文化現象は當然心理現象であるから、東洋文化の心理的特質を分析闡明することの可能性もまた津田氏の抹殺的筆鋒の下から救ひ出されたことになる。

なほ、この機會に、私は津田氏とは正反對の考へ方が、大正五年頃に、當時の評論家山路愛山に依つて唱導せられてゐたこ

とを紹介して、何故に支那事變最中の現下に於いて津田說の如き（他にもあるが）極端の說が流布するやうになつたかを研究するための他山の石としよう。

「日本の政治家として支那を眺めれば、日本と支那との間には勿論國境があらう。しかし日本人として支那を眺める時には日本と支那を眺める時には、日本と支那の心には國境はない。日本人と支那人とは他人ではない。日本人と支那人とは殆ど同じ血肉である。日本人の血には支那人の血が混つてゐる。我々は歷史から此事實を證據立てることが出來る。昔は日本人の中に支那人村があつて、支那の旅行者はそれを秦王國といつた。平安朝以後にも九州には唐人町があつた。中國の大内氏も、薩摩の島津家も其祖先は朝鮮半島を經て日本に移住した支那人であつた。薩摩の人と福建の人の相貌、音調などを比較して見れば、我々は今日でも其中に同種族の多い事を暗示されやう。そうして此支那人の血がいつか他の種族に混じて日本人の血になつてしまつた。日本人の血は或部分まで支那人の血だ。支那人と日本人とは一所になつて我々と云ひ得べき兄弟である。加之日本人の思想は殆ど全部漢學思想である。日本人の用ふる文字は漢字である。日本文學は漢文の直譯くづしである。日本に於いて國文學の祖と誇る源氏物語でも其思想も、其文章としての結構も、漢學、漢文から脫化したものだ。日本の法律制度は支那の法律制度を模倣したものだ。此同胞、此兄弟の利害休戚に對して我々はどうして冷淡でゐられる。支那人と日本人の心には闘も垣もない。同じ感情、同じ血液、同じ主義が流れてゐる。況んや交通機關の發達した今日に於いては、支那と日本とは眞に親しい隣家である。……婚姻も盛んに行はれてゐる。支那の上流社會の家庭にも我々は日本の敎育を受けた日本婦人を發見する。日本人と支那人とは生活に於て既に混同してゐる。支那人に冷淡なのは獨り政治家ばかりである。我々日本人民として云へば、支那人は決して他人ではない。我々と謂ふべき一人稱の中に包轄し得べき同胞である。支那と日本島とを併せた大きな區域は我々の活躍すべき場所、我々が同感の空氣を呼吸すべき場所、我々の祖國、我々の墳墓の地である。我々の祖先は日本の歷史を學ぶと同じ程度の親みを以て支那の歷史を學んだ。我々の祖先は日本の英雄豪傑を崇拜すると同じ程度の情熱を以て支那の英雄豪傑を崇拜した。情の痲痺したものは其れをすら愛することが出來ない。情の健かなものは世界をも我分内とする。支那は我々の分内である。」云々と。

勿論、私はこゝに書いてあることの全部を眞理として承認しようとするものではない。内にはまた愛山個人にのみ妥當する考へ方もあるやうである。併し津田氏說を是正し得る二三の見解の含まれてゐることは認めねばなるまい。我々としては、たゞ、何故に今日この支那事變下に於いて、日支無緣論と云ふが如き極端な說が流行し得るのか、その心理的動機を探究しなけ

ればならないと云ふのみである。それは日本人が支那人に對して抱く「小異獨尊觀念」(フロイドの語)に訴へて、日本人が支那人及び西洋人に對して抱く根深い無意識的劣等感を優越感に置きかへようとしたものであらうと云ふのだ。併しながら、そのやうな心理的トリックによつて得られた優越感からは健實な文化は成就しない。それ故に、私は津田氏說のやうな病的な見解を根柢的に打破することに全力を擧げなければならないと信ずるのである。

三、自我文化とエス文化との闘爭及び止揚

小野清一郎氏は右のやうに東洋文化の存在を容認してゐるけれども、その特質の何であるかに就いては、何ら言及してはゐない。それは氏の論文の目的外であるから、その言及のないことを私はこゝで批難しようとするものではないけれども、東洋文化の心理を研究するにはその特質がまづ明かにせられねばならない。併し文化の特質のみならず、一切の事物の性質は、その種々な顯現の間に共通する樣相を二三の觀念に要約抽象すると云ふ方法でなされるより外はない。例へば、インド、支那、日本の諸國の哲學、文學、美術、音樂、建築などに共通する樣相を二三の觀念に抽象し來ることである。卽ち、假りに冷靜、平穩、溫雅、雄渾、退嬰、悲痛、と云つたやうな形容詞によつて表現せられ得る如き諸觀念が抽象せられて來るとする。これ等は西洋文化の抽象觀念として或は要約せられ得べき、熱情、躍進、歡喜、精密、正確、と云つたやうなものと對蹠的關係に立つことにならう。以上は勿論假りの想定に過ぎないことを斷つておくが、これ等諸觀念に依つて代表せられる諸性質が如何なる心理的起源から生じてゐるかを考究する時、問題は始めて心理學の領域に入り込んで來る。

もし以上二種の觀念系列に依つて東西兩洋の文化が區別せられるならば、精神分析學的には東洋文化は死の本能の文化であり、西洋文化は生の本能の文化であると極めて大雜束ながら區別することも出來るであらうし、或は東洋文化はエスの文化であり、西洋文化は自我の文化であると云ふことも出來るであらうし、或は東洋文化は女性的マゾヒスムスの文化であり、西洋文化は男性的、サディズムの文化であると云ふことも出來る。けれどもこのやうな區別は科學的結論を哲學的な問題に援用する方法であるから、このやうな假定的命題から推論を進める場合には餘程用心深くあらねばならない。

併し東洋の文化はエスの文化であり、西洋の文化は自我の文化であると云ふことを證明するために好都合な多數の事實を擧げることは極めて容易である。それはその正反對の證明を擧げることの容易である以上に容易であると私は信ずる。殊に死の本能や退行願望の熾烈であることの證左は佛敎、道敎、その他に於いてあまりにも目立ちすぎるほどである。東洋の文化は女

性的であり、西洋の文化は男性的であると云ふ命題に就いても全く同じことが云へるであらう。それ故に私はこゝで實例の二三を擧げると云ふ方法を斷念しようと思ふ。たゞ西洋の文化が早く東洋に侵入し來つて、今日では完全に東洋を領略したと云ふ事實は何人もこれを否定することは出來ない。勿論、その間に東洋文化にして西洋文化に重大な影響を及ぼしたものが全然なかつたと云はうとしてゐるのではないけれども、大體論としては前者命題の方の可能を何人も認めないわけに行かない。もし果してさうならば、領略したものは男性的、自我的であり、領略せられたものは女性的、エス的であると云ふことは、精神分析學的な觀方として當然容認せられねばならないところだ。ところで併しながら、その故にとて、領略せられたものは、劣等であり、領略したものは優等であると云ふことは果して云へるかどうかとの問題になると、私は常識に反して甚だ遲疑的である。勿論領略したものは進取的であり、領略せられたものは退嬰的であると云ふことも大體に於いて云へる。併しそれでも進取と退嬰との二觀念によつて價値判斷の標準とすることは出來ない。何となれば、進取的なことが必ずしも幸福を意味せず、退嬰が必ずしも常に不幸を意味するとも限らないからである。この考へ方は甚だ常識に反するけれども、人間に生の本能と死の本能との兩本能あつて、その均衡に人間生活の意義を發見する精神分析學的な考へ方を受容れてゐる人々には、甚しい困難なく容認し得るところであらうと思ふ。人間の生活は如何なる形に於いても行き過ぎてはいけないのだ。一方に偏してはならないのだ。進歩病にとりつかれてはならないことは、退嬰の病にとりつかれてならないことゝその程度は同じである。東洋文化は常に中庸の道を說き、敎へて來た。それを西洋近代の狂熱的な進歩病と對比する時、我等は人間本來の生き方に就いて思ひ半ばに過ぐるものがあるのである。

日本は東洋に於ける西洋であると云はれてゐる。それは日本民族が東洋諸民族の內では最も完全に西洋文化を取入れ、西洋諸文明國の水準に達してゐると云ふ意味である。それは精神分析的に換言して見ると、日本が東洋の內では最も自我的であり男性的であると云ふ意味になる。女性的でありエス的である東洋諸民族の內にあつて、日本民族が最も自我的であり男性的であるとすると、日本民族は世界諸民族の中では最も中庸を得た健康な民族であると云ふことになりさうである。これは我々日本人としては甚だ自己阿附的な、愉快な結論であるが、我々はこの結論に得意になり有頂天になることが出來るにはなほ幾多の懷疑すべき問題を持つてゐる。日本人はエスに於いては支那人やロシヤ人のねばりと深さとには遠く及ばず、自我の强健と銳さとに於いては西洋人に甚だ劣るものではなからうかと云ふ如きことである。例へば、ロシヤ人に就いて見ると、ドストイエフスキーやトルストイは頭のいゝ人とは決して思へないし、自我の强健さも疑はれるが、エスの旺盛にして深刻なことに於

いては遺憾ながらわが國の文學中にその比等を見ないやうに思はれる。

東西兩洋文化の中庸をとり妥協を計ることは、どうも日本民族の使命であるやうに思はれるし、また思ひたいところだが、この大任を果すためには我々は餘程の努力と覺悟が必要であると思ふ。殊に、先に述べたやうに、日本人全般が無意識的に抱いてゐる民族的劣等感の解消がない以上、それは屢々病的な優越感に置きかへられてしまつて、健康な、堅實な優越性の建設とはならないであらうと云ふことを強調しておきたいのである。この種の劣等感の解消のためのみならず、自我よりもエスを重視する精神分析は、自我偏重に行きづまつた西洋文化のあとを襲ふて、我等が自我とエスとの鬪爭を止揚した新文化を建設するためにも、我々東洋の西洋たる日本民族の重大な關心を以て研究し實施すべきものでなければならないと私は信ずるのである。(完)

La Misio de Japana Psikoanalizo
en La Orienta Nova Kulturo

Resumo de la fronta traktato

Kenĵi Ocuki

Se oni permesas diri, ke la orienta kulturo estas esa, aŭ virina, tiam la okcidenta kulturo estas egoa, aŭ vira. Kaj tial nia opinio ke la orienta kulturo nun estus kvazaŭ subigita de l' okcidenta kulturo, estis natura fatalo en la rilato inter la superreala, senkonscia orienta kulturo kaj la reala, konscia okcidenta kulturo. Sed en homa vivo egoo kaj eso ne devas aparte stari. Dume apartigi tion estis la plej granda kaŭzo konduki al senelirejo ĝisnunan orientan kaj okcidentan kulturojn. En homa vivo verdire eso devas sidi ĉe pli supera rango ol egoo ; tion instruas ja psikoanalizo. Pro tio nova kulturo, kiu prave aperos en la estonteco, devas naskiĝi el interago de orienta kaj okcidenta kulturoj, nome el aŭfhebo de batalo inter egoo kaj eso. Kaj oni sentas, ke la ekiro al tio estas respondeco de analizaj disĉiploj en Japanujo, kiun oni nomas kiel la okcidenton en la oriento, tamen pri la demando, ĝis kia grado efektive tio povas realiĝi, ni nun devas deteni nin de tro narcisisma supozo.

(*Esperantigita de Jukio Onoda*)

東洋と西洋との無意識論理

土屋秋實

一、物質文化と精神文化

東洋と西洋とは從來しば〱地域以外の意味において對立的に考へられて來た。しかし、かやうに對立的に考へる事は正しい事であらうか、又かやうに對立的に考へる事を正當ならしむる樣な根本的差異が兩者の間に存在するのであらうか。かやうな問題、卽ち東洋と西洋との根本的樣相に關して思索する事は、現代の精神にとつて最も重要な問題の一つであると考へられる。吾々は無意識心理學的立場からこの問題に對して一般的な考察を試みたいと思ふ。

從來吾國においては、東洋は精神文化であり、西洋は物質文明であるとの說が常識、卽ち三木淸氏の所謂ドクサ的知性となつてをり、それにミュトス的感性が伴つてゐた。しかしかやうな主張は果して正しいであらうか。無論かやうな常識にも或程度の眞實性はないとは言へないかもしれないが、無意識心理學的見地から考察する時、それには何等かの無意識願望が症候を形成してゐる樣に思はれる。吾々が現實に對して一定の概念把握を試みようとする際に、吾々が少しでも注意を怠ると、吾々の無意識願望によつてリビドー的にその抽象が歪曲されて、その願望滿足に都合がよい樣に規定されるのである。そして、その抽象が高まればそれだけ無意識願望、卽ちエスによる現實歪曲、自我の合理化は超自我の監視を胡麻化し易くなるのであつて、古來幾多の觀念論哲學的饒舌はこの樣な自我合理化、現實歪曲に奉仕し、典型的な文化的症候形成を顯現してゐる。元來物質文明卽ち生活物資の生產技術體制と精神文化とは相互に親密な關聯を有するのであつて、後者は前者を反映し、又前者に影響を及ぼし、且つ制約するのである。從つて、吾々は東洋には東洋獨自の物質文明と精神文化とがあり、西洋には西洋獨自のそれがあると考へるのが正しいと思ふ。しかしその獨自性を固定的な永遠絕對のものと考へる事は出來ない。兩者の差異

は觀念的にではなしに現實的に求められなければならない。然るに東洋は精神文化であり、西洋は物質文明であるとするのは、丁度東洋人は頭だけがあり、西洋人は足だけがあるとするのと同じく滑稽な事である。しかし論者の主張するところは、西洋は物質文明において優れ、東洋は精神文化において優れてゐると言ふ意味であるかもしれないし、又恐らくさうであらう。觀念論哲學においては物質に對する精神の優位性が根本をなしてゐるのであるから、かゝる主張は西洋の物質文明を引下し、東洋の精神文化を誇つたつもりなのであるが、現實においては物質文明と精神文化とは相互に關聯し合つてゐるものであるから、從つて、かゝる主張は東洋に於ける物質文明の立遲れと同時に精神文化の立遲れをも正直に告白してゐる事を示すのである。この點に於いては津田左右吉氏の『支那思想と日本』の中に書いてある次の一節に、私の考へは全く一致する。

「文化に精神的と物質的と二つのものがあると考へるのが、そもそも無意味なのである。文化と云ふ以上、それは精神の働きによつて人の生活を高め深め豐かにしてゆくことに違ひないが、人の生活である以上、純粹に精神的のものでも物質的のものでもなく、さう云ふ風に分別して考へることのできないものであり、さうして精神のはたらきそのものがかゝる生活の現はれだからである。本來からいふことが宣傳せられるのは、現代の科學文化を物質的と呼び、さうでないものを精神的と稱するのと、儒敎や佛敎を精神的のものとし、さう云ふ道德の敎や宗敎は支那やインドにのみ發達したものと思ふのと、この二つに由來があるのであらう。さうしてそれは科學が人の精神活動の最も優れたものの一つであるといふことと、この二つの平凡にして明白なる事實を知らないからのことである。科學文化が發達しなかつたといふことは、決して精神のはたらきの秀れてゐることにならないのみならず、寧ろその反對である。」云々。(一九〇頁)

二、生産方法の革命とその精神的反應

明治時代において西洋文明が吾國に大量に輸入され、立憲君主制體の制定を見、一時は物質文明においても精神文化においても西洋崇拜熱が全國を風靡してしまつたのである。その裡においても皇室中心主義は吾國の國是として確固不動のものであつた事は勿論である。然るに、漸次西洋文明を吸收、消化し、獨自のものとなしつゝある過程において資本主義社會の世界的恐慌に卷込まれるや、その危機からの脫出の苦鬪において、或者は封建時代への精神的退行を來して、東洋は精神文化であるとし、物質を卑しみ貶し、精神を崇んで、資本主義文明の恩惠の下に資本主義文明を呪咀する傾向が生じたのである。吾國においても一時所謂マルクス主義者が資本主義を呪咀したのも意識面ではこれと正反對の樣であるが、無意識面では共通なので

ある。

扨て東洋を精神文化なりとし、西洋を物質文明なりとして、東洋的精神文化を以て西洋的物質文明を蔑視し去らうとする意圖の裡にはかゝる歴史的、社會的背景があるのであつて、それには現代資本主義に對する封建主義への退行的エディポス錯綜に基く反逆性やナルチスス的劣等感補償の優越慾が抱かれてゐるのである。

或る一派の社會學が主張する處によると、現代日本は半封建的資本主義であるさうだが、確かに現代にも封建制の殘存が相當濃厚なのは社會的にも亦イデオロギー的にも事實であるかもしれない。しかしそれによつて必ずしも日本が低く評價されるとのみは斷言出來ないかもしれない。何となれば、一家にしても祖父母も父母も健在な事がその家の價値を低める理由にならないのと同じであつて、問題は古きものと新しきものとの間に非能率的な摩擦がなく、エネルギーが非生產的、無意味に消費されない事に在る。今や日本資本主義は大陸建設を目指して上昇しつゝある際、かゝる觀念論は反時局的と言はなければならないであらう。吾々は資本主義を罪惡視したり、無意味に讃美したりする神經症的態度には、それが道德的にせよ科學的にせよ、與する事は出來ない。何となれば、資本主義も社會史の一過程であつて、丁度青年期が個人史の一道程であるのと同じだからである。

かくして吾々は東洋と西洋とに關して次の如き結論に達する。卽ち東洋も西洋も共に同一の社會發達道程を辿るのであるが、東洋と西洋との性質の差異は地域的體質的なものゝ外に社會的、心理的な過去の形態の殘存物の種類、性質の差異によつて決定されてゐるのである。それによつて、東洋の傳統的精神には生けるものゝ眞の姿が原始的な形態で把えられてゐるが、そのために却つて生產理論及び技術方面では西洋に立後れしてゐるのであり、それに反して西洋は生けるものゝ力に驅立てられて生產理論及技術方面では前進したのであるが、それには生けるものゝ力を驅使し自らをそれに託し切るものゝ安らかさが無い。かゝる意味において東洋は精神文化であり、西洋は物質文明であると言へない事もないが、それは兩者を絕對的に對立せしめる意味においてゞはなく、兩者を相互に浸徹せしめ統一せしめる意味においてゞある。東洋の精神文化も西洋の物質文明によつてその安らかな精神的睡眠から覺醒せしめられる事なしにはその生ける精神を自覺し止揚する事も出來ないし、又西洋の物質文明も東洋の精神文化を肯定しなくてはその不安定性を自覺し自らを止揚し完成する事は不可能であらう。兩者は同じ樣に成長しつゝある女性と男性とに譬へる事が出來る。東洋を女性とすれば、西洋は恐らく男性であらう。兩者は各々異性によつて自らを完成し、相互を止揚する事が出來る。かやうな考へ方は感性的な仕方であつて、知性的な考察ではない。知性

的な考察によれば、東西兩洋共に母系的氏族協同體、父家長的古代國家、中世封建社會、資本主義社會と言つた樣な一列の發展經路を辿つたものと見られる。しかしその樣な同一經路においても何等か異つた樣相を相互にもつてゐる。それこそ感性的なものと最も關係の深い樣相であり、又從つて知性的なものもそれによつて影響せられてゐるのである。

社會學において東洋の特徴を所謂アジア的生産樣式にありとしてゐるが、そのアジア的生産樣式なるものゝ本質に關しては諸家の間に種々の議論がある樣である。しかし私はそれを東洋における氏族的母系協同體の濃厚な殘存によつて極めてニュアンスの深い東洋的變形を來した父權的古代國家の生産樣式であると考へたい。東洋の古代國家においては西洋の古代國家即ちギリシヤやローマにおける樣な奴隷制が存在しなかつたと論ずる人もある樣だが、東洋においては氏族的協同體が濃厚に殘存したゝめに奴隷的勞働が協同社會への奉仕と言つた樣な形態を採つたのであり、そのために西洋の奴隷制度の如く目立たなかつたのである。そして西洋におけると同樣に東洋においても古代に貴族と奴隷及び平民との階級分裂が起り、中世における地主及び封建貴族と農奴との對立に移り、最後に資本家と勞働者との對立に變遷したのであるが、東洋における濃厚な原始氏族協同體の殘存は一切の勞働を協同體への奉仕とし、それによつて支配者と被支配者との對立は曚朧として目立たないのである。しかしそれだからと言つて、東洋には生産手段の私有と生産の社會性との矛盾が存在しないのではなくして、それが甚だ曚朧として目立たないだけである。再言すれば、アジア的生産樣式とは母系的氏族原始協同體の殘存によつて土地が國有とされ、その土地の母象徴性に基く一蓮托生的觀念によつて支配せられたところの奴隷的勞働を主とする古代的生産樣式である。

かやうな社會機構は必然的に心理にも影響を及ぼし、イデオロギーに反映されてゐる。即ち、神道、佛教、道教等の東洋思想には明らかにその表現を見る。これらの東洋思想及びそれらを形成するドクサ・ミュトス的常識において最も根本的な理念（イデー）とされるものは母性的なものである。これは母系的氏族社會の心理であつて、個人における乳兒期心理に相應する。この時期においては何等の權力的なものも認められず、專ら母性的なもの、乳房的なものがその無意識心理においてアルファとされオメガとされてゐる。これに反し、西洋においては母系氏族社會の殘存が稀薄であつて、父權的古代社會の心理が目立つてゐる。キリスト教においてそれは明瞭な表現を見出す。即ち、西洋において最も根本的な理念（イデー）とされるものは權力を伴つた父的な觀念である。母性的なもの、乳房的なもの、キリスト教においてマリア的なものは原罪として抑壓せられてゐる。キリスト教における天父とマリアこそ父母の觀念の投出であり、キリストは吾々自身の象徴なのである。これは個人における幼兒期の心理に相應してゐる。社會的超自我において東洋が女性的であり、西洋が男性的である事によつて、東

洋の女性はより母性的であり、西洋の女性は男性的である。そして西洋における男性の超自我には現實的權力があるが、東洋における男性の超自我は主に胎内空想的唯我獨尊觀念に基く劣等感の補償としての優越感によつて支持せられてゐるのであつて、現實的權威が少い。西洋の女性におけるアドラーの所謂男性的抗議は男性器嫉妬であると同時に男性に對する母性願望の反動構成であると思ふ。從つて女尊男卑は女性のかゝる抗議に對する男性の滿足せる讓歩である事を示す。これに反し、東洋の男尊女卑は女性の隱然たる無意識的權力慾に對し男性側から發する引下げ願望の惱ましいナルチスス的努力であり、女性側での滿足せる讓歩である事を示す。將來の新らしい社會的超自我はかゝる性的無意識象徴から解放されなければならないであらう。こゝで一寸お斷りして置きたい事は、以上は全般的に考へた場合における事柄であつて、個々については勿論これと反する要素があると言ふ事である。

三、精神症的東洋と神經症的西洋と

かやうに蓮の臺に極樂往生（胎内復歸）を空想する東洋人と「淫らな事を視ば汝の眼を刳り取れ」（去勢象徴）と言ふ樣な戒めによつて願望を抑壓して專ら天父の御許へ到る事を空想する西洋人とはよき對照をなす。見方によつては、超自我とエスとが結合してゐる東洋的心理はプシヒョーゼ（精神症）的であり、超自我と自我とが結合してエスを抑壓してゐる西洋的心理はノイローゼ（神經症）的であるとも考へられないでもないが、さう斷じ去る事は出來ない樣に思ふ。何となれば歷史はなか〳〵複雜であつて簡單に一口で片付けるわけには行かないからである。卽ち、東洋は惱み（病症）が西洋よりも深いだけ悟りも亦深いのである

東洋文明が所謂アジア的停滯をなして、物質文明において西洋に立後れしたと言ふ事實は東洋人の胎内空想と關係が深い樣に思はれる。東洋思想の「無我」は自己を自然或は社會の裡に滅却し去つた「大我」空想の狀態であつて、それは愛卽死を伴つた巨母空想である。卽ち吾々の心臟に取込まれ太陽に投出されたところの母性的觀念が轉位され、哲學的に抽象化されたものが「無我」の觀念である。そして「無我」の作用は二つに分けて考へられる。その一つは西方極樂淨土（東方卽ち胎内生活が西方卽ち死、墓穴と錯綜的に投出された複合觀念）の阿彌陀如來（胎兒の象徴）に歸命して他力本願的に巨母空想を滿足せしむるものであり、他の一つは卽身成佛或は卽心卽佛と觀念して巨母空想を自力本願的に成ぜんとするものである。阿彌陀如來は太陽神であると思はれる。太陽神である阿彌陀如來が人生行路の終局と複合された西方極樂淨土において大慈悲の手を差

し延べてゐると言ふのは、人生の端初において既に卽心卽佛、卽身成佛との觀念に應じ切れない人に對する救濟であると思はれる。佛教においては一方にナルチスムスを防ぎ轉嫁を可能ならしむるためのかゝる空想を含むと共に、他方に無佛無衆生、衆生本來佛、煩惱卽菩提を唱へ、一切の敎へは畢竟藥病相治のための方便智であるとしてゐるのであるから、佛教を吾々は東洋人の無意識願望の單なる表現と見たり、巨母空想の一種と斷じ去るわけには行かない樣であつて、寧ろ佛教を吾々は東洋人の無意識願望の處置法、解脫法と解釋すべきではないかと思はれる。

西洋人の無意識願望はキリスト敎においてその美事なる表現を見てゐるが如く、衆人の象徴であるキリストはマリアの子であるが、天父とは何等關係なく（實際はマリアと天父とを兩親として生れた子がキリストなのだがこの關係は全々抑壓されてゐる）マリアによつてのみ生れた子であるとしてある（こゝに母定着やエディポス的父憎惡が抑壓され排除されてゐる）。そして、エディポス的父憎惡やマリアへの母定着が意識下に抑壓された反動として、太陽神なる天父への憧憬が生じるのである。かゝる心理機制においては一切の生活努力は原罪（無意識的願望滿足）に對する贖罪とコムプレクスされて、そのため西洋人は恐ろしく努力的、積極的であるが、その積極的努力の裏に永遠に許されない卽ち滿足を放棄しない原罪エスが赤い舌を出して嘲笑してゐるのであつて、キリスト敎が僞善的になるのはこのためである。卽ち、自我が天父なる超自我に阿諛追從して現實を歪曲し却つてエス卽ち原罪の保留滿足に務めるから、一切の自我言動が僞善的になるのである。かやうな心理機制に基く積極的努力は、僞善的であるとは言へ、それが西洋の物質文明を促した原因であらうと思はれる。しかし西洋の物質文明には何かしら不安定なものが潛んでゐる。それは抑壓されたエスの爆發と超自我なる天父の權威の喪失との危機である。これに反し、東洋の物質文明は東洋人の胎內空想に基く消極的努力によつて所謂アジア的停滯をなしてしまつたのであるが、それには西洋の樣な不安定さが無く、アジア的な原始的安定が含まれてゐる

かゝる東西物質文明に相應してその精神文化も相異なる樣相を呈してゐる。卽ち東洋の文化は感性的直觀力による象徴が特徴であり、西洋のそれは知性的論理力による概念が主である。換言すれば、前者は胎內空想に基くマゾヒズムが心理的原動力をなし、後者はエディポス的サディズムが心理的原動力となつてゐる。その事實に基いて、東洋は感性的、エス的、女性的、求心的、綜合的であり、西洋は知性的、超自我的、男性的、遠心的、分析的であると言つた樣な規定が行はれるのであると思ふ。東洋の「寂」或は「さび」等はアカデミックな心理學の立場から種々論議されてゐるにも拘はらずその本質を解明し得ないが、無意識心理學の觀點からすれば、その本質は何等の罪障感を伴はずに極めて自然に昇華せられたところの胎內復歸及び

死の願望である。それは消極的ではあるが、確かに窮極的な美である。菅公の「罪無くして配所の月を見ばや」との願望もマゾヒズム的な東洋的「さび」の美である。

これら東西の無意識論理が次第に解明せられるにつれて、東洋と西洋とは精神文化的にも亦物質文明的にも接近し統一されてゆくのではないかと思ふ。そして、それは生産手段の私有と生産の社會性との矛盾の止揚の過程において創造的活動の偶然性を通じて完成せられゆく必然性があるのであらうか。

四、餘　言

吾國で日本精神を讃美し、東洋精神を提唱する人々は、その實證として常に美しい家族制度、樂しい家庭を擧げる。しかし發展する産業、比類なき産業をその實證として擧げる人は少いと言ふより殆んどない樣である。若し西洋人が東洋に對して西洋の優れた處を擧げるとすれば、美しい家族制度などを持ち出すであらうか、恐らく持ち出すまい。彼等が誇るのは偉大なる産業であらう。吾國で西洋に日本文化を紹介する場合に從來瑞穗の國の産業（農業とか養蠶とか水力發電とか）や神社、佛閣等を出したであらうか。それ等も出なかつたとは云はぬが、却つてより多く浮世繪、藝者（唐人お吉）、女性象徴的風景等の方が持出されたのではないか。これが事實とすれば、それは西洋が男性的であり、東洋が女性的である事を立證する一例である。筆者は東西兩文化の特徴を考へてみて、前者が母定着にあり、後者が父定着にあると思つてゐるが、事實として西洋の産業とか醫學、哲學、學藝等の一切の文化は對象に對する父愛憎アムビヴレンツで貫かれてゐる、卽ち一方ではエディポス陰性轉嫁による父克服の男性的銳さがあると同時に、他方エディポス陽性轉嫁による昇華された雄大な父同一化があつて、その無意識心理的動力によつて一切の文化が形成せられるのであるが、東洋文化には何と母親と乳兒が親しむ樣な和氣があり、鈍角な女性的線が感ぜられることか。一般に西洋人は自然を克服し、東洋人は自然を愛すると言はれるのも意味あることである。從つて、この事實から、東洋文化は直觀綜合的ではあるが女性的、死本能的であり、西洋文化はこれに反し概念分析的であり男性的、生本能的であることが推理され理解せられる。將來において東西兩文化の無意識的特徵が止揚されるとすれば、それは西洋文化の概念分析によるリアリズム的知性と東洋文化の直觀綜合によるヒューマニズム的感性とが保存され、西洋の父定着と東洋の母定着とが廢棄されることによつてなされるであらうと思はれる。（完）

『西遊記』の分析解釋

山口　滋

一、序　言

『西遊記』は、支那文學中我が國でも古くから『水滸傳』と相並んで讀まれ、我々にも馴染の深い小說である。作者は元時代の邱長春と傳へられて居るが、斷定は出來ない。此の小說の典據は、唐の太宗皇帝の勅命を帶びて玄奘三藏と云ふ坊さんがはる〲西域（印度地方）へ經を求めに行つた事蹟を骨子と爲し、當時に知られた西域諸國の地理人情風俗等を織込み、長安の鄕から天竺（印度）大雷音寺迄十萬八千里と號する長い道中を、あらゆる困苦障碍と鬪ひ乍ら前後十七年を費して遂に其の目的を達して再び長安に歸つて來る迄の記錄である。玄奘の傳は舊唐書方伎傳中に「僧玄奘は名は陳氏、洛洲偃師の人、大業の末出家す。博く經論に涉り嘗て謂ふ、翻譯には多くの訛謬あり、故に西域に就いて廣く異本を求め以つて之を參驗せんと、貞觀の始め、商人に隨つて往いて西域に遊ぶ。玄奘既に辨博郡を出づ、所在必ず講釋論難を爲し蕃人遠近咸な之に尊服す。西域に在る事十七年、百餘國を經て悉く其の國の語を解す。仍て其の山川謠俗土地有る所を宋りて西域記十二卷を撰ぶ。貞觀十九年歸りて京師に至る。太宗之を見て談論して大いに悅ぶ。是に於て詔して梵文六百五十七部を將て宏福寺に於いて翻譯せしむ云々」と。唐の太宗の貞觀三年に經を求むる目的を以つて西域に向ひ、同十九年に歸唐した。太宗は深く玄奘が此の十七年間の艱難辛苦を汲んで手づから「聖敎」の序を書いて其の苦勞を稿つたと傳へられる程で、其の當時の未開な西域旅行の困難さは一般世人の驚歎と渴仰の的となつて、其の旅行中の出來事に關しては樣々の傳說が傳へられ、後には遂に支那の四大小說の中で最も怪妙なる小說『西遊記』と迄發展した。

二、本　論

「葱嶺を越ゆれば毒風肌を切り飛沙路を塞ぐ。溪澗の懸絕するに過へば繩を以つて梁となし空に梯して進む。雪山に登れば壁立千仭、人毎に四棧を持し、手足交る／＼崖孔中に着け猿臂して進む。沙河に至りて諸惡鬼に逢ふ。奇狀異樣人の前後を繞り、觀音を念ずと雖も走らしむるに能はず。舌を彈じて心經を誦ずれば皆散ず。」或は「行いて罽賓國に至れば道險にして虎豹ありて過ぐるべからず弉（玄弉）計を爲すを知らず。卽ち房門を鏁して坐す。夕に至りて門を開けば一異僧を覩る。頭面に瘡疾あり、身體に膿血ありて牀上に獨座す。來由を知る莫し。奘乃ち禮拜、勤求すれば僧口づから多心經一卷を授け、弉をして之を誦せしむ。遂に山川平易道路開闢、虎豹形を藏め魔氣、跡を潛め佛國に至り經六百餘部を取りて歸るを得たり、云々」と云つた類の奇怪なる文句が唐代の書物にも散見する。小說『西遊記』は玄弉自身の書き遺した『西域記』の記事や、是等俗門の傳說を根據とし、それに佛典中の說話や或ひは神仙譚などを加味し、作者の自由奔放な空想を以つて畫き出された寓意譚である。分析學的に觀ても西遊記は面白く、此の物語り中の主要人物の孫悟空や、猪八戒、沙悟淨、龍馬、等の象徵的な人物が多數に登場するが、それ等にはそれ／＼の意味があつて興味が深い。西遊記は大體人間の一生（物質慾、愛慾卽ち煩惱、或ひは死の恐怖）の無意識心理の移行課程を象徵的に畫いたもので、結極一個人間（三藏）が煩惱（快樂本能）を解脫して大悟（涅槃）の域に達した境地を比喩した物語であらう。三藏（玄弉）は「凡身」、孫悟空（孫とは猿の意義あり）は「心猿」、猪八戒は「肉慾」、龍馬は「意馬」など、是が今迄の大體諸家の一致した觀察であると云ふ。本篇の主人公は三藏にあらで實は孫悟空である事は、誰の目にも分ると思ふ。此の物語りを分析的に見れば、孫悟空や猪八戒、沙悟淨等はいづれも獨立した個々の人物でなく　實は三藏の別我（分身）である事が分る。分析學的な名前を付けて見るならば、求道を志す三藏を理想我（超自我）、孫悟空を「自我」、猪八戒を「エス」、沙悟淨を「死の本能」、等に振り當てることが出來ると思ふのである。勿論、それ等の內には多少づゝ相互入りまぢつたものもあるが、話を進める都合上ハツキリと區別を付けて仕舞つたが、了解を乞ふ。

孫悟空はお猿さんである。猿と云へば、「心猿意馬」の語がある如く、智慧の象徵になつて居る樣で、現實的な人間で例をあげると大衆間に人氣のある英雄で智慧者と呼ばれた豐臣秀吉を聯想する。猪八戒は猪の化物であるが、八戒とは如何にもうまく名前を付けたもので、あまり愛慾的方面に猛烈なので佛敎五戒の上に尙三戒を加へられて八戒と名付けられたものらしく、繪畫の猪八戒の人相？をよく御覽なさい。何んといやらしく眼じりの下つて居る所を。朝鮮傳說の烏啄將軍を聯想させるが、

一體支那や朝鮮では肉慾を「猪」だとか豚の樣な者で象徴させてゐる樣で、同じ事でも日本あたりでは猿神退治などにもある樣に「狒々」(猿)を以つて象徴させてゐるのは民族性や習慣、環境の相違によるものであらうか。次は沙悟淨であるが、別名「沙和尙」とも云ふ。頸に九つの髑髏を掛けて顏色は靑黑く不氣味な感じのする怪物だが、手に三ヶ月形の槍の如き武器を持つて居る所などを見ると、恐らくは「死の本能」を象徴するものと斷じて間違ひない。最後に龍馬だが、是に就いてはギリシャ傳說のペガサスを想起する。孫悟空は伸縮自在の「如意金箍棒」なる武器を持つて居るが、是は健全なる自我の伸縮性を象徴してでもあらう。猪八戒の武器は柄ばかり大きい熊手の樣な物だが、是はエス(本能)の多慾性の象徴らしい。

さて是で三藏一行の役割と各人物の性質を大體說明したから、次ぎに西國へ行く道中の彼等の受難を順序良く話し度い。其の前に、三藏師弟のお互に相會して共に西國へ行く迄のイキサツがあるが、話が長くなるから特に本篇の主役たる悟空の素性だけを簡單に述べて見たい。三藏の一番最初に弟子になつたのは悟空だが、悟空の生立は、東勝神州傲來國花果山々上の一怪石より生れた石猿であつて、生長するや忽ちにして附近の群猿の頭となり、美猴王と號して花果山福地水簾洞に住居す。後に菩提祖師に付いて天地間のあらゆる神術魔法を學んで、再び己が住家に歸來した。たま〳〵己の留守中に手下の群猿を迫害してゐた附近の妖魔を退治した事から、己が力を無限に評價する樣になり、遂には地上の者の所詮窺うふべからざる所の天上界を思ふ存分に荒しまはり、或ひは蟠桃園の仙桃を稔み、果は上帝に迫つて其の位を奪はうとして、遂に眞君の爲に、流石に傲岸不敵の彼も捕へられ其の罪を問れて釋迦如來の爲に五行山の下へ壓へられて饑ゆる時には鐵丸を與へられ、渴する時銅汁を飮まされて五百年の苦患を受けた。後に西國に經を求めにたま〳〵其處へ通り掛つた三藏に助けられて其の弟子となる。そして三藏の西國への旅路の良き保護者となるが、初めから絕對に三藏に從順であつた譯ではなく、旅の途中で六人の山賊を殺した事から三藏に叱責されて腹を立てゝ其の儘三藏を置いてき堀りにして己が元の住家に歸つて仕舞ふ。三藏は悟空に去られて是から長い道中を考へて途方に暮れてゐると、觀音菩薩が現れて、「三藏、決して心配するな、私が再び悟空を歸らせる樣に取はからつてやらう。此の先幾萬里の長い道中に、悟空を連れなくてはとても汝の目的は達せられまい。併し悟空を又汝の許へ歸してはやるが、彼は一通りの我儘者ではないから、今後も此の樣な事があると困るであらうから、幸ひ是に綿布直裰と花帽があるから、悟空が歸つて來たら是を着せるが良い」と敎へて吳れた。さてこちらは三藏に別れた悟空、觔斗雲に乘つて一路水簾洞に歸る道すがら、兼ねて知り合ひの東海龍王に出會つて色々とイキサツを話すると、龍王につく〳〵なだめられる。悟空も一時の怒りに三藏と別れたものゝ五行山の下より助けられた恩義も考へて見ると淺くない。此のまゝ恩知らずの如く世

間の者共に思はれても殘念に思つたので、再び三藏の許へ歸る氣になつた。再び歸つて來た悟空をだまして綿布直裰と美しい花帽を着せる。そして菩薩に敎しへられた緊箍呪を念じ始めると悟空は急に「疼い〳〵頭が疼い」と苦しみ出した。そして其の邊に頭をかゝへて轉げ廻る。苦しまぎれに直裰や帽子を切れ〳〵に引き破つたが、一條の金箍だけが頭に食ひ込んでどうしても取れない。悟空は又も憤慨して三藏に打つて掛つたが三藏が緊箍呪をなほも念ずると一層苦しみがまして遂には刄向ふ事が出來なくなつた。其の爲に結局、悟空は完全に三藏に服從を誓はざるを得なくなつた。後にあらゆる受難や奇禍が三藏一行に降り掛るが、三藏は常に必要以上の暴力を悟空に振ふ事を絕對に許さないのである。玆において、あらゆる妖魔怪物をも恐れぬ流石の悟空も、今や外界に對しては赤子同然の三藏にだけは全く無力な存在とはなつた。こゝの處は「自我」と「超自我」の關係をそつくり、其の儘持つて來たと同樣で、外界に向つては始ど無力なる「超自我」も內界（自我）に對しては絕對的な威力を有し、或ひは觔斗雲に乘り如意棒を自由自在に振り廻し、數多の妖怪魔王を相手に獅子奮迅三頭六臂の働きをする彼も、しかして性對象（女）さへ見ればデレ〳〵となる、大甘男の猪八戒を引締めたり、誠に悟空の骨折りは忙がしくも亦一方ならぬ。此處で我々はフロイドの「他の見地より見る時此の同一の自我が三人の主人に仕へ爲に三個の危險にさらされると云ふ哀むべき動物」（『自我とエス』第五章六十二頁參照）なる一節を想起する。所で悟空の頭にかむせられた「金箍」は何んであらうか？　常識的に云へば「良心の呵責」、分析學的に云へば「超自我が自我に對して壓迫を加へ、爲に緊張せる狀態」であらう。

尙、悟空に付いてはギリシヤ傳說の、プロメトイスを想起することは前に云つたが、プロメトイスは人間に火を造る事を敎へた罪でカウカサス山上の巖に繫がれ、日每に一羽の兀鷹に肝臟を啄まれて三萬年の苦痛を受ける。後に英雄ヘラクレスに解放されて人類の保護者となるが、こゝの所が三藏によつて救はれる立場と極めて類似して興味が深い。東西繫縛傳說の合致した一例であらう。

さて三藏一行が西國へ進む途次に女菩薩に誘惑されて其の禪機を試されるが、元來女に甘い八戒は散々に飜弄されて、よい耻をかく。是はエスの盲目性を暴露したものであらう。更に西に進むと此處に萬壽山福地五莊觀洞天なる樓閣があつて、鎭元大仙なる仙人が住んでゐるが、其の邸の庭には世にも珍らしい人參果の樹があつて、其の果を食らへば四萬七千年の壽命を得ると傳へられ、そして然かも九千年每に只一度果が成熟すると云ふ希代の珍果を三藏師弟がそこに宿泊してゐる間に悟空と八戒の二人が共謀して偷んだ事から大騷ぎとなり、鎭元大仙に三藏一行が非道い目に會ふ事件が起きる。此處で象徵的なものを

あげると、人參果に付いては古代支那の食人風習、殊に胎兒に對する特別の嗜好、不老長生の靈藥として祕かに嗜食して居たと云ふ話を想起する。それが果物とコムプレクスされて人參果なる植物が空想されたのかも知れない。また、朝鮮人蔘を想ひ出す。朝鮮人蔘も人の形をした靈藥だから白髮三千丈式の支那だけあつて九千年に只一回成る果物だの、そして其の實を食へば四萬七千年の壽命を得られるだのと、話が馬鹿に誇張されて居るが、美味い物を食べて無限に生き延びたいと願望する怠け者の支那民族の空想心理の一端が見えて面白い。

又一行は白虎領なる山麓で妖怪の危難に會ふが、此の時三藏は空腹になつてゐるので悟空に食物を探して來る樣に命ずる。悟空はかしこまつてはるか南山の山の麓にある山桃を取りに行く。其の留守に妖怪は美女に化けて美味なる食物を待ち空腹なる三藏を誘惑するが、危機一髮の所で悟空に退治られて仕舞ふ。この場面、食の空腹は其の儘性の空腹を象徴してゐる。古代から食と性とが人類の無意識心理の內にコムプレクスされてゐる事は仲々深い興味を覺えしめる。又、悟空が別に求めて來た山桃とは多分性慾の昇化した形であらうと思はれる。

一行は尙も旅路を急いで西に向ふと、此處に碗子山破月洞と云ふ所で、金角、銀角大王なる怪物に出會つて難儀をする。金角、銀角とは人生に於ける誘惑の最も大なる金銀財寶の象徴であらう。この大王は人を吸ひ込む葫蘆を持つて居るが、葫蘆の形から見て女性器を想像させる。是は金銀の持つ魔力（吸引力）と解したい。女性器も金銀や人（男）を吸ひ付ける事に掛けては絕大の力を有するものであるから。此の化物には流石の悟空も大分手古ずる。或る時には、悟空が葫蘆の中に吸ひ込まれて危ふく身を溶かされ相になる。又、此の化物は葫蘆の外に七星劍幌金繩などの武器を持つてゐて悟空を惱ます。幌金繩は文字通りに金の繩であらう。現在社會のあらゆる方面においてこの金の繩にまき付かれ苦められてゐる者は數知れぬ。

此の魔物をやう／＼の思ひで征服して一行は、更に西に向ふ。途中に一人の子供を助けたが、是が亦怪物で、しかも牛魔王と羅刹女の間に出來た子で、名を紅孩兒と云ふ。親父の牛魔王には羅刹女と云ふ正妻があり乍ら玉面公子なる妾に溺れ切つて居るので、女房は羅刹になつて仕舞ふし、子は不良少年になつて仕舞ふのだ。この不良少年の爲に三藏は又もや難儀をするが、悟空の力で紅孩兒をこらしめ感化させる事が出來て、紅孩兒を感化院にも送らずにすんだ。

なほも師弟は道中西へと急ぐと、やがて黑水河を渡つて車遲國に入つた。此處で虎力、鹿力、羊力の三仙人と雨乞ひの法術競べをする事になつた。元來此の國は僧侶が勢力を持ち國王の信望を集めてゐたが、たま／＼此の國に大旱があつて僧侶の念佛位では降らぬ雨を虎力、鹿力、羊力の三仙人は通力を持つて降らしたので、今や國王の信賴は虎力等三仙人の人にあつま

り、爲に大勢の憎侶等は昨日とは打つて變つて奴隷の境地に呻吟する身となつた。事情を聞いた三藏師弟は僧侶等に深く同情して虎力等三仙人に勝負をいどみ、彼等の奸計を見破り物の見事に是を負かした。雨乞ひ傳説は、遠く支那のみならず日本の昔にも散見する。日蓮の雨乞ひなど、是は氣象學の發達した今日では他愛もない願望充足で、古代人（無意識心理人）の如何に念慮の全能惑の强かつたかを證明するに過ぎぬ。

一行は車遲國を離れて通天河に差し掛り、年毎に人身御供を要求する靈感大王なる妖魔を退治して里人の難儀を救ふ。人身御供傳説はあらゆる種類に渉つて存在するが、こゝでは多言しない。通天河を過ぎて金嶼山迄來ると獨角大王なる怪物が一行の前途をさまたげるが、これまた悟空八戒等によつてなんなく退治される。

金嶼山を越へた師弟は西梁女國なる女人國に入り來た。此の國では男が居ず國中の女は二十歳を越すと子母河と云ふ此の國の東境にある一條の小河の水を飲む。腹がいたんで來るとそれが姙娠した徴候で、照胎泉と云ふ所で赤子を生む。こゝでも男女の性交に對する觀念が現れて興味深い。卽ち、男女の交りは人生最大快樂の一つではあるが、反面には同時に最も不淨、醜惡なものとせられてゐるからだ。現實的には其の醜惡な事をせねば子が得られないから、當代の神經症者（殊に女）は性交せずに子を得たい願望を抱く樣になつた結果この樣な空想になるのだらうか。また女人國なども人類（男）の願望の代表的なるもので、兎角幼兒的な甘い幻想を持ちたがる民衆の代表的な夢の一つであらう。さて三藏はうつかりそれとは知らずに其の水を飲み、一時は坊主の身で姙娠すると云ふ悲喜劇を演ずる。やがて此の國の女王が東土よりはる〴〵唐僧が來たと云ふので、是非共自分の夫となつて國王の位を嗣いで貰らひ度いと三藏に請ふ。三藏は弱り切つたが遂には斷り切れず承諾する。其の日になつていよ〳〵女王と婚姻の式をあげると云ふ際に、急に怪しき女怪の爲に三藏はさらはれる。悟空、八戒、沙悟淨、等は驚いて直ちに女怪の後を追ふ。此の女怪は蠍子の精であつて、悟空等は惡戰苦鬪の結果女怪を退治して三藏を救ひ出す。

一行は更に一路西へ旅路を急ぐ内に、はからずも前述の紅孩兒の母親の羅刹女の爲に惱まされ、更に牛魔王のために悟空は此の旅行中の最大の惡戰苦鬪を演ずる事となつた。羅刹女は美人ではないが貞女であるのに、亭主の牛魔王は玉面公子なる妾に現をぬかして羅刹女の許へは寄付かぬ。そこで羅刹女は自暴自棄になり、本名は鐵扇公主と云ふが人々仇名して羅刹女と云ふ。

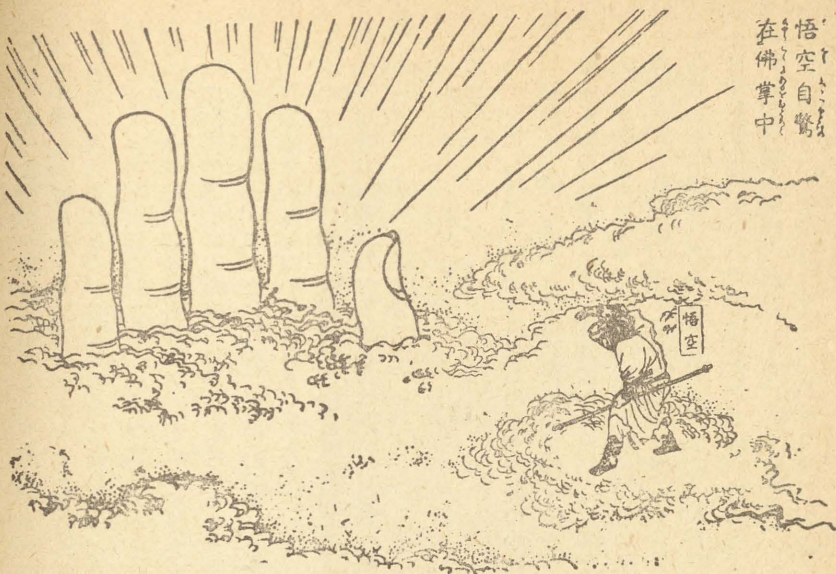
さて一行の前途には八百里の間草も木も生えぬ火焰山と云ふ山があつて、どうしても其の山を越へなければ目的の地へ行かれないので、三藏等は弱つて仕舞ふ。羅刹女が火焰山の焰を消す芭蕉扇を持つて居るのだが、悟空とは紅孩兒の事で面白から

ぬ因緣もあるので仲々素直には貸して吳れぬ。そこで亭主の牛魔王に化けて羅刹女をだまし、首尾よく芭蕉扇を手に入れる。それを牛魔王が後から女房に聞いて激怒して悟空の後を追ひ、此處にはからずも兩雄渾身の勇を振ひ必死の奮戰すると云ふ物凄い場面が展開される。牛魔王は牛の化物で、牛は强力なるエスの象徵であらう。流石健全なる自我の代表たる悟空も馬鹿力のある牛（エス）に眞正面よりぶつかつては、小手先であつかつても居られない。その身の全力を擧げ、又、諸々の偉い佛の力を借りてやつとの事で征服した。そして牛魔王夫妻は結局佛門に歸依する。玉面公子なる妾は殺して見ると一匹の白狐であつた。狐は日本でも篠田の森の傳說などにあるやうに魔性の女の象徵となつてゐる場合も少くないやうで、白色は神聖又は死の象徵であるから、こゝでは死神（誘惑的女性）の意味かと思ふ。

牛魔王夫妻を征服して一行はいよ／＼大天竺に入り、其の諸國を通行して其の間樣々の受難に會ふ。萬聖龍王だの、蕾眉大王や、七匹の蜘蛛の精、蜈蚣の精、或ひは月宮の兎までも登場するが、話が長くなるので一切省略する。で、結局目出度く大雷音寺に到着して宿願の經を受け、三藏は栴檀功德佛、悟空は鬪戰勝佛、八戒は淨壇使者、沙悟淨は金身羅漢、龍馬は八部天龍とそれ／＼有難い法名を貰つた。

三、結　論

このやうにして此の物語りは終るのだが、此の小說の眞諦は序言にも書いた通り、人間一生を三藏玄奘の西域記に便乘せしめて、比喩と寓意と教訓とを借したものと解するのが正しいやうに思はれる。吾々は生れると同時に直ちに死（西）に向つて絕えず步んでゐる者である。こればかりは身分の高下、富の貧富を問はず、嫌應なしに背負つてゐる運命である。そこでどうせ死ぬると云ふ事は分り切つた事ではあるが、それ迄の道は決して平坦ではない。死の恐怖もあれば色慾（愛慾）、物質慾、權勢慾、更にそれ等を永遠に享樂して置き度い爲の長生慾などもある。

この物語りは佛教思想が根本であるだけに、人間の煩惱（主として愛慾）の解脫を究極の目的としてゐる。エスの意識化した今日、果して其の事の觀念內容がどの程度に健康妥當かは、分析學を學んだ吾々としては多くを語るに及ばないであらう。愛慾を一切の惡の根源と見なす思想は必ずしも東洋にのみ固有なのではない。愛慾は合理化すれば良い。昇華せらるべきものであつて殺さるべきものではない。吾々の悟空はどの程度に健全であるか、或ひは八戒はどの程度に正常か、檢討の必要があるだらう。悟空を人生の主役とし乍らも時には八戒の充分なる活躍も大目に見る必要もあらう。

尚、物語り中の怪物妖魔の内で悟空に征服されて佛門に歸依する條りも幾多あるがそれは多分去勢の意味であらう。最後に此の小說の題名は西遊記とあるが、西は死の國西方淨土の意味だから、人間の一生を象徵したものであらう。なほ或る西洋の批評家はこの書を佛教徒の『天路歷程』と呼び、バニヤン作るところのキリスト教徒のこの求道譚と對比せしめたのは妥當な見方であると私も思ふ。

（十四年十二月一日）

附記――上段の挿圖は悟空佛掌中飛行の有樣、大原東野筆、詳しくはアプフウブ欄五五頁參照。

佛教思想に潛む「父殺し」の契機

――佛典の淨土思想に就いて――

奥本島田

佛教には大乘佛教と小乘佛教とがある。これは佛教經典の思想的分類によるものである。小乘の思想は個人救濟が目標になつてゐるが、大乘の思想は自他救濟が目標となつてゐる。これが一般的な說明であるが、この二者の具體化は釋迦の修業と阿彌陀の修業とであると私は考へたい。

釋迦は厭世觀から解脫へと志し、山林へ入つて苦業し終に悟りを開いたといふことになつてゐるが、阿彌陀は衆生濟度を志し、その修業の結果は極樂淨土建設となつて終つてゐる。この二者の修業を無意識心理學的に觀るならば、釋迦の方は人間の再生又は死に至る願望を象徵的に充足してゐるに對し、阿彌陀の人間救濟のための極樂淨土建設は大衆の父母にならうとすることを象徵してゐる。

佛教經典の思想が如上の二者となつてゐる。これは生死兩本能の並存（釋迦）と同一化（阿彌陀）とである。佛教經典の思想的根柢、生死兩本能はいづれも人間の内側からの刺戟である。この内側からの防禦し難き願望を投出したものは、原始的に「父を殺す」といふことである。

×

淨土三部經に展開されてゐるところの極樂淨土の莊嚴は何ぞや？　阿彌陀は何故に極樂にゐるか、といふことを考へてみたい。そのことに就いて次のことから何等かの解釋が得られさうである。

「兄弟群が原父を亡きものにした過程は、人類史の上に抹殺し難き痕跡を留めた。而してこの記憶が薄らげば薄らぐほど、

益々多數の代償物が出現した。シェークスピアの『嵐』の中のエリエルは歌ふ。

五尋深き水底に汝の父は臥せり
御骨は珊瑚となり
眞珠は御眼なりき。
御體のいづこも朽つることなく
一切は寶となりぬ、海に入りて――。」(『フロイド全集』第七卷より)

×

浄土三部經の大無量壽經に於いては、釋迦の傳記と阿彌陀佛の傳記とが宗教的に展開されてゐる。次に極樂淨土の莊嚴を展開してゐる。同じく觀無量壽經に於いては阿闍世太子がその父王を殺すといふ因緣によつて極樂淨土が展開される。次に同じく阿彌陀經に於いては、是より西方十萬億佛土の彼方に極樂淨土があつて、その淨土には阿彌陀佛が住して今尙說法してゐるといふことを述べて、次に極樂淨土を展開してゐる。

以上三部經の極樂莊嚴を展開する前提は無意識心理學的に見るならば「父殺し」といふことになつてゐるやうである。「父殺し」は生物の性生活に同一化される――卽ち、原生動物から高等動物に至るまで、生物から生物が生れるといふ繁殖の仕方である。これを換言すれば、生物はその元の生れ出たる外界の事情を自己自身の內側で行はうとする強い衝動(これは生物が發生した當時の外界再現で其當時の自然に歸依する強い願望とも言へる)があると同時に、それに反抗して生物的生存を續けやうとする强い願望が生ずる、この二つの相反衝動が一如となつて生物が繁殖する。

自己を生ぜしめたる元の自然現象へとリビドー的に復歸せんとする衝動は、阿彌陀が衆生の爲めに極樂淨土を建設せんとした願望に相當し、生物的存在を再生せんとする衝動は釋迦の苦業から成道に至れる傾向に相當する。勿論、無意識に於いてではあるが。

人間が元の生れたるところへ無意識的に再生せんとする如上の傾向(願望)は胎內復歸である。かやうに性慾は原始社會に行はれたといふ父殺しに、或は文化的な宗敎に、又は胎內復歸に、等々展開されてゐるのである。――父殺し=宗敎=胎內復歸=性交。

佛敎は最初は小乘敎であつたといはれてゐるが、それが大乘思想になつてから一般民衆の間に、或は大きく東洋的に發展し

てゐる。このことはキリスト教の聖書が舊約と新約とあつて、新約時代、卽ちキリスト死刑後に至り西洋諸國に發展するに至つたことと軌を同じくせるものがある。佛教が小乘思想から大乘思想に發展した。又さうなつてから大衆的に發展したことは、人類の過去に於ける「父殺し」といふ普遍的な原罪感が、その惱みが人々の無意識に深く潜んでゐるが、それが強い反響を呼び起すことが心的な原因である。

人間は生れながらにしてその無意識裡に「父殺し」といふ原罪をもつてゐるのである。極樂淨土願望はエディポス・コムプレクス（父殺し）を終熄せしむることとなつてゐる。

×

人間の本性は父殺しといふ極惡ではあるが、否さういふ極惡者でも南無阿彌陀佛の念佛を呼稱すれば救はれて極樂に往生出來ると說く淨土教に於いては、少しの善根功德では極樂往生は出來ない――念佛往生以外はだめだ――といふことになつてゐる（阿彌陀經の思想）。ここで人間は善行するよりは南無阿彌陀佛を呼稱する方がよいといふことになつて、常識的には不合理な結果が生じてくる。この問題については諸宗で色々と說明してゐるが、何れも意識的なこぢつけの理論のやうである。

本來宗教は人間の無意識に根據を置くものであつて、特に念佛、極樂淨土などいふものは意識心理學では解明し得らるるものではない。若し、意識的に現代の自然科學の如きもので說明せんとするならば、極樂淨土などいふものはその存在を失はねばならないし、念佛の功德は絕對にないことになる。極樂淨土や念佛による功德なるものは無意識心理の世界にのみ存在し得るものである。で、この極樂への往生は少善根では駄目であつて念佛によるの外は無効であるといふ意味を、無意識心理學的に考究してみたい。

×

同じ安樂界へ行くにしても極樂淨土と浦島の行つたといはれてゐる龍宮とでは、その行くに至れる因緣が異つてゐる。で、ここで極樂と龍宮とを對比してみやう。

（極樂淨土）	（龍　宮）
西方十萬億土にある	遙かなる海底にある
その主、阿彌陀	その主、乙姫（女性）
美しい安樂境	美しい安樂境

念佛による往生	救助願望による
阿彌陀が迎ひに來る	龜が迎ひに來る
人々と同一處の存在	乙姫との生活
説法を聞く	饗宴、觀樂（愛慾）
年齡は無量、現實へ再生せず	再び現實に歸へる、老いて死す

右の對照によつて明らかなることは、極樂の生活は性慾の昇華がなければ出來ないが、龍宮の生活は性慾（愛慾）を昇華させては絶對にだめである。この二つの異つたやうに展開される世界に於いて生存に耐へ得る善根を爲すもののところに、その世界からの使者が來て案內するであらう。性慾の全部の昇華は極樂淨土の生活に耐へ得る修業ではある。だが、それは死に等しいのだ！　ここに至つて吾人は極樂往生は死であるといふ俗言と一致して來た。

×

以上から結論して次のやうに云はう。人々は罪障感（所謂道德心）によつて死にたがるものだ。又、人生の短かいことを永遠の價値（永遠の生命）に換へたがるものである。この無意識心理に於いて、各人の深部心理に潛む「父殺し」といふ人類的原罪感が如何なる程度の役割をはたしてゐるものであらうか。吾人共に猛省すべきであるまいか。

フロイド博士を悼む

私がこの原稿を書き終らうとしてゐた頃、精神分析學の始祖フロイド博士の訃が新聞紙上で報ぜられて來た。フロイド博士はその創始にかゝる學説を以て人類の神經症を救ふために八十四歳の老齡に至るまで、亡命の苦境にあつて屈することなく、その努力を續けてゐた。博士は最近「モーゼと一神敎」の著述を完成したことを吾々は聞いた。これ恐らく彼の最後の論著であつただらう。

今や精神分析は世界各國に實施されてゐる。人々はフロイド博士の精神分析によつて人類的な神經症が著々と醫せらるるやうになつた。それに相反して彼の肉體は漸次に破壞されて行つたのである。今後の文明社會から彼の名は忘れられることはないであらう。

以上、本論に併せてフロイド博士への弔詞とせなければならなくなつた。（昭和十四年九月二十六日）

オールダス・ハックスリ（アンドレ・モオロア）

岩倉具榮譯

序――ハックスリは現代英國の心理派の小説家であり、モオロアは現代フランス文壇の錚々たる人で、特に英國通として知られ、目下わが國では彼の著作は『英國史』その他を始め盛んに譯出紹介せられつゝある。この取合せは我々に深甚の興味を惹起させる。

（一）生活と作品

オールダス・ハックスリの遺傳をフランス風の續き合ひに直して見るのは面白いことである。フランス人に次の様な青年を想像させて御覧なさい。その青年の父方の祖父はマルセラン・ベルセローで、その父はアルフレッド・クロワッセ、母方の曾祖父はギゾーで、母方の大伯父はサント・ブーブかジュー・ベール、その伯母はスタール夫人であると云つた風である。さうすればそのフランス人はオールダス・ハックスリの系統樹に似かよつたフランスに於ける同等のものを見るであらう。事實、彼はイギリスの產出した最も偉大なる科學者にして且つ最も剛毅なる心を持つた人物の一人トマス・ハックスリの孫である。トマス・ハックスリの息子、リオナルドはチャーターー・ハウスで、後にはセント・アンドリュー大學で、ギリシヤ語を敎へた。彼はトマス・アーノルド博士の孫娘と結婚した。博士はラグビーの有名な校長で、そこの少年達をキリスト敎徒風の紳士に育て上げようと努力した。

リオナルド・ハックスリとジュリア・アーノルドは二人の息子を持つた。卽ち生物學者で並々ならぬ才能の著作家であるジュリアンと、吾々が直接關心を持ちつゝあるオールダス・ハックスリとである。從つて、オールダス・ハックスリは幼い時から立派な、又驚く程色々の敎養を持つた人々の間に生ひ立つた。多くの場合に、人間の凡ゆる姿を遺傳的の性格によつて說明し

ようと試みることは餘りに器用すぎるであらう。併しハックスリの場合は、彼の才能の獨創性は詩的性情と科學的教養との結合に存するといふことが銘記されねばならない。彼は實驗の實行より以上にさへ、科學の術語を鑑賞する。(フランスに於てポール・ヴァレリのなす如く)。彼の祖父ハックスリ教授の様に、彼は廣汎なフランス風の教養を持つてゐる。六十年前にハックスリ教授對ルナンの占めた地位は、現在彼に對するアナトール・フランス、アンドレ・ヂイド、及びヴァレリによつて占められてゐる。

ハックスリはかつてアメリカ人の會見者に答へて云ふには、白分自身に關しては、只沈默を守るだけだと。それ故、吾々は此處にウェルズの自敍傳や、ロレンスの告白の様なものを持つてはゐない。吾々が彼の生活について知つてゐることは一通りのものである。彼はイートンとバリオルで教育された。そしてイタリーやフランスや、彼が結婚した土地ベルギー等の諸々方々を旅行して、その研究を豐富にした。十七歳の時に彼は母を失つた、そしてこの死別の後に、アノールド家の方の叔母で、有名な自由主義の小說家ハンフリ・ワード夫人により息子として認められた。彼は靑年時代から執筆し、多くの若者の様に、詩から始めて、極く最初から驚くべき天賦の才を示した。

彼の最初の小說はフランスの讀者に親しまれるタイプのものであつた。イギリスの田舍家を背景として、學者や好色家や愉快な滑稽な人物等が、若者によつて巧みに操られ、ジェローム・コアニャールやベルジェレーに相當する會話を交換する――併しそのベルジェレーは言語學者といふよりもむしろ物理學者で、文學よりもむしろ科學を信仰してゐる。たとへ深味はなくても、想像と技巧と優美に於て『クローム・イエロー』と『地獄』(物語集)とは極めて驚くべき門出となつた。次の小說『アンティック・ヘイ』と『わくらば』(殊に後者の始めの部分)はフランス風の會話の傳統によつて占められてゐる所がずつと少かつた。併しオルダス・ハックスリがもつと高い世界に入つたのは『戀愛双曲線』に於てゞあつた。

『戀愛双曲線』は今迄通りの小說の形をなしてはゐない――一人或ひは數人の生活についての連續的な物語である。それはむしろ現代の知識階級の横斷面とも云へる。作家、科學者、畫家、流行を追ふ男女、その部門に含まれる凡ゆる要素が描寫され、彼等を通じて一九二六年頃の或るイギリス・インテリゲンチャの信念と、感情的の反動と、滑稽な外貌が現されてゐる。外國人の讀者は自分に全く知られてゐないイギリスの示現を見出すであらう、卽ち皮肉な、放肆な、輝かしい英國である。それは只小さいグループだけであつた、そして既にそれは散々(チリヂリ)になつて了つた。併し一八九〇年代の唯美主義者は、同様に、ほんの小さなグループに過ぎなかつたが、彼等の影響は相當なものであつた。

この小説以後に、ハックスリは旅行記、殊に『冗談を云ふピラト』を書いた。その他數卷の隨筆『夜の音樂』及び『欲することを行へ』等で、之はパスカルに關する極めて面白い評論を含み、その問題に向つてヴァレリーの酷烈さに近づいてゐる。それから幾つかの短篇物語『二三の合の手』と未來の卓越した小說『美事な新世界』を書いた。如何なる國に於ても、靑年から之以上廣く讀まれ鑑賞される作家は少い。勿論、彼自身若く、一八九四年に生れたのである。そして現代の批評が今も尙求められてゐる程澤山の書物を產み出すだらうと豫想されてゐる。何故ならオールダス・ハックスリは、フランスに於てもイギリスに於ても、彼の時代の一部分である所の人生に對する態度を、他の如何なる作家よりも代表してゐるからである。

（二）百科の學に涉る人

知識的に、彼は賞讃に値する程用意周到である。アナトール・フランスは完全な古典的敎養を持つてゐたかも知れないが、彼の若い頃にルナンやベルテローや、多分クロード・ベルナールによつて一般化されたもの以上には當代の科學的理論に就て何にも知らなかつた。然るにどんな問題を扱つても、ハックスリは專門家として語つてゐる。若しも彼がフランスの詩を分析するとすれば、彼はポール・ヴァレリがする樣にやる。若しも彼がタヂマハールとセントポールの大伽藍を比較するとすれば、彼の見解は建築家のそれである。若しも彼が、『戀愛双曲線』に於るが如く、おたまぢやくしの脚となるべき所にその尾を接いでゐた年取つた貴族の實驗を記述すれば、彼は熟練した生物學者の樣にやる。「尾は脚となる」と彼は冥想的に云つた。「その機制は何であるか。近接の化學的特異性であらうか……それは明らかに血ではあり得ない。それともそれは何か電壓と關係があると想像するか。勿論、それは肉體の異る部分で相違がある。一體吾々は癌の樣にぼんやりと增生するものぢやないにしても……そのことに考へ及ぼすと、きまつた形で成長するといふことは全くありさうもない。非常に神祕的でそして……」

若しも彼が偶然一論文に於てオックスフォードのインド紙出版物のことを云はねばならないとすれば、この種の紙はそれを不可溶解にする所の鑛物性要素を含んでゐる事を彼はす早く吾々に告げる。そして之以上二三行續ければ、大英百科全書が自分の愛讀書だと彼が告白するのを見出しても驚かないのである。そしてアルファベット順に集められた種々樣々の事實の巨大な集積に充された頁をめくつて行く事は、彼の精神上の惡習である。

精神上の惡習だ！ 吾々は屢々ハックスリを讀みつゝ、彼の自己批評に一致すべく誘惑される。何故なら、彼の小說に於ては、百科全書的の知識が時々正當ならざる場面を氾濫させるからである。『戀愛双曲線』に於て、姙娠してからその戀人を失

はうとしてゐる女性人物の一人によつて吾々が感動させられると感じ始めるや否や、急に讀むのに當惑する、卽ち次の如くである。「今から六ケ月經つと彼女の赤ん坊が生れるだらう。單なる細胞、細胞の集まり、纖維の小さい嚢、一種の虫、鰓のある魚とも云ふべきものであつた何ものかゞ、彼女の子宮の中で動き、そして何時かは男となるだらう――悩み喜び、愛し憎み、考へ、記憶し、想像する大人となるであらう。そして彼女の體內で膠質物の水滴であつたものが神を發明して崇拜するであらう……」と。

それ等の小說が映し出してゐる此の様な思想と事實は眞に面白く、そしてその章句は一種ボードレール風の美を持つものとして眺められる。併しハックスリはわざと吾々の感情を止めて、違ふ問題に吾々を連れて行くのだといふことを吾々はよく知つてゐる。彼がさうするのは正しかつたであらうか。ツルゲエネフやチェホフはさうしたであらうか。吾々が讀みつゝあるその瞬間に學び度いと望むのはさういふ生理學上の細目ではなかつた、それはマージョリの感情であつて、彼女の體內の經過ではなかつた。そして若しもマージョリがその瞬間に子供のことを考へたら、彼女は確かにかういふ術語で考へはしなかつたらう。ハックスリは次の文章で自分自身について多くを語つてゐる。かういふ風に一つの面から他の面に移つて行くこと、かういふ調子の變化は、人の心を亂して失望させる、それ等は開卷第一に既に吾々の心に起つた感情を痲痺させるのである。

音響學ではフェードルを朗讀するベルマの聲によつて聽衆席の空氣中に起される振動を研究するのは立派な問題であり得るだらう。併しその有名な場面のこの光景をプルーストが記述しようとしないのを吾々は感謝する。ハックスリは、彼の役目として、音樂會に關聯して物理學と生理學についての一寸した講義を吾々に與へるといふ誘惑に抗することが出來ないのである、「震動する空氣がエドワード卿の鼓膜を打つた、中耳骨は卵形の窓の薄い膜を刺激して蝸牛殼の液體に無限小の嵐を起さうとして動き始めた。聽神經の毛深い末尾は荒い海の草の様に震へた、數知れぬぼんやりした奇蹟が腦の中で成し遂げられ、そしてエドワード卿は有頂天になつて『バッハ』とさゝやいた。」と。

技巧は明瞭で、比較的たやすく見える。ハックスリは小說家フィリップ・クォールズを描く時に自分でその危險を見てゐる。その人物は彼の書物の一つで料理人のことを云はねばならなくて次の文章で始める、『「シェイクスピヤが少年だつた時から今迄、十代の料理人が燒串に刺した鴨の類蛋白質分子を破壞する爲に赤い放熱を使つて來た……。」一つの文章で私は既に歷史、藝術及び凡ゆる科學を含ませてゐる。宇宙の全部の物語はその如何なる部分にも含蓄されてゐる。冥想的の眼は如何なる單獨の眼を通しても、窓を通して見る様に、全宇宙を見ることが出來る。」と。

之は眞實である。併し藝術は撰擇に存することは同様に眞實である。それ故ハックスリの様な心を持つた人にとつては小說といふ問題は次の言葉に近いものとなるであらう。「私が最もつまらない現象について觀照する時に、私を壓倒する此の宇宙的交響樂といふ感じを私の物語にしみ込ますことが出來るであらうか。而もそれを衒學的でもなく、無限中から摘み出したやうでもなく出來るだらうか。」と。

(三) 科學と詩

ハックスリは屢々皮肉な痛ましい純粹の詩を仕上げ乍ら、宇宙的な題材と人間的な題材を交互に用ひることによつて、人が一番滿足する樣に此の問題に答へてゐる。『戀愛双曲線』の中には、彼が自分の中に偉大な詩人の要素を持つてゐて、現代の『自然の書』を立派に書くことも出來るだらうと吾々に思はせる章句がある。プルーストを除いて、何人もかくも明瞭に宇宙を全體として考へたものはない。その中で動と反動が永久にお互ひに交叉し接續し、そこでは人生が調和と調節を保つて、單一の宇宙的な豫定の音樂となり、その中で人は違ふオクターヴと違ふ調子で、動物も歌ふ所の愛と憎しみの歌を歌ひ始めるのである。

「私の小說家は素人の動物學者でなければならないと私は本當に決心した。或ひは、尙上手に云へば、暇の時に小說を書く專門の動物學者だ。彼の進路は嚴重に生物學上のものであらう。彼は絕えず白蟻の巢から應接間と工場へ移つて、又歸つて來るであらう。彼等の巢に侵入するあぶらむしによつて流出される醉はせる樣な液體の爲に幼虫を無視する蟻の惡習によつて彼は人間の惡習を說明するであらう。彼の主人公と女主人公は彼等の蜜月を湖水のほとりで過し、そこでもぐり鳥と鴨が求愛と結婚の凡ゆる現象を說明するであらう。」

オールダス・ハックスリの中に、フィリップ・クォルズに於ける如く、吾々は科學と詩との平凡ならざる本當に新しい混合を見ることが出來る。

そしてハックスリに於ては、この結合は意識的で且つ意圖的なものであることを、吾々は知つてゐる。作家がその科學的知識から如何なる技巧上の利益を引出すことが出來るかといふ審問に一つの評論全部を彼は捧げたのである。同じ人間の事件の二つの局面を、一方は科學的の、他方は感情的の言葉で記述して並置することは、新しくて又多分美しい不協和音を作り出すであらうと彼は信ずる。「例へば、生理學と神祕主義とを並置して御覽なさい(ギヨン夫人の恍惚は姙娠第四ケ月で一番はげ

しく一番精神的に重要であつた）……化學と魂を並置して御覽なさい（内分泌腺は、殊の外、吾々の心持、吾々の希望、吾々の人生哲學を分泌する。）」

ハックスリの小説には、空間の交響樂と共に、時間の交響樂が混合されてゐる。彼は宇宙的調和の詩に對すると同様に歴史的調和の詩に對して感じ易いのである。そして明らかに全く關係のない單純な事實の間に、奇妙な、精巧な連結を發見する。安樂に關する隨筆で彼は如何に中央部の熱が封建主義と兩立し難きものであつたかを示す。その封建主義は大領主が、長さ百呎高さ三十呎の部屋に於て、巨人的權力者として生活することによつてその力を宣言する必要があつたのである、そして近代の肘掛椅子は、王様だけが安樂に腰掛け得るのだと主張した絶體君主制と兩立し難いものであることを彼は示してゐる。

ハックスリが旅行する時には、彼は絶えず比較研究して、如何なる現象も直ちに彼をして一つの體系を作り上げさせることが出來る。インドの祭典に列し、そして東洋人にとつては、象徴された事物が象徴よりも遙かに重大であるが爲、儀式がのろ〳〵と行はれたことを觀察して、彼は卽座に西洋と物質主義の辯護を引出す。その理論は疑はしいものであるが、ハッキリした術語と辯證的な精確さを以て尤らしく上手に論ぜられて居て、ハックスリの作品は、たとへ屢々矛盾してゐても、凡て同等の才能を以て說明されてゐる他の理論の反駁を含んでゐるが爲に、益々それ等の言葉が驚くべきものとなつてゐる。

之等凡ての著作の一部分の極く僅かでさへも、多分、十八世紀風な名聲とも云ふべき評判を作つたであらう。アーノルド・ベネットは彼の日記にハックスリの愛用語は「信じられない」、「想像されない」、又は「空想的」等であるらしいと記したが、彼の訪問者の學識も信じられず、想像されず、空想的であると附加へた。一人の人間の心に對してかくも生々と活潑に圖星を指し得たことは稀である。カンバスの大きさによつて、時々吾々がその油繪全體を本當と思ふことを妨げられないかどうかが唯一の疑問である。

（四）ユーモアと藝術

ハックスリの初期の書物に於て、彼の思想に對する情熱はユーモアによつて調和され、或ひは逃げ道が作られてゐる。『クローム・イエロー』に於て用ひられた手法はアナトール・フランスの手法である、卽ち滑稽な題材が學者風の調子となつて展開されたのである。フランスは殆どいつでも二つの反對の題材について會話を作り上げた。つまり一方は眞面目で他方はくだらないとか、一方は亂暴で他方は敏感であるとかいふ風である。若し「滑稽な話」に於て、トゥルブレー博士がプラトーの神話の

一つを委しく話すとすれば、女優ナントイユは衣裝係の忠告を以て妨げる。若しも『怒りの日』が教會の中で柩臺の前で轟々と鳴り響いてゐるならば、その歌詞は粗野な馬鹿らしい會話で妨げられる。同様に、『アンティック・ヘイ』の冒頭では、ゴンボールドの幻想は讃美歌を臺無しにして教會の椅子の固いことゝ空氣入りのズボンが必要なことを想ひつゝ説教する。

間もなくハックスリはアナトール・フランスの影響から解放されて、もつと力強い滑稽の感じを示した。それは、彼の最良の肖像として、ディッケンズを思ひ出させる、『二三の合の手』にはそのいゝ例があつて、うるさい奴の、ヒューベルトを描いた中に、優れた皮肉を用意してゐる。もつと殘酷な、いさゝか痛ましい、もう一つの例は、『戀愛双曲線』中のバーラップのそれである。

何處かでハックスリはチェスタートンの言葉の技巧をほめてゐる。彼もその同じ讃辭を受ける價値がある。彼の最も首尾一貫せる心的傾向の一つである所の科學的正確さに對する渇望は、彼をしてはつきりしない言葉を嫌はせる。宗教の「眞の精髄」について語らんとして彼はホワイトヘッド教授とイング副監督に健全な打擊を與へる。彼は上手に書くばかりではなく、その著書を上手に構成する、それはフローベル式の小説といふ意味ではなくて（若しも彼がさう望んだらそんな風な書物を書き上げることも彼は本當に出來たであらう）音樂的の意味に於てゞある。『戀愛双曲線』に於て彼が企てたことは幾つかの題材を管絃樂に作曲することであつた。卽ち、小説の音樂化である。象徴的の方法ではなく、觀念を音調に從はせる事によつて……併し構成の上では、大規模に、ベートーヴェンについて冥想して御覧なさい。音階の變化、不意の轉調。（例へば、B半音、長調、四部合奏の最初の音律に於て、莊嚴に冗談を取り交す）。只一音から他音へといふばかりではなく、音階から音階へと、もつと面白く變調を和げよ。一つの題材が語られ、それから展開し、形から押出され、認め難い程變形し、尚認識上同じではあるが、遂にそれは全く違つて來るのである……之を小説に入れよ。如何にするか。不意の轉調はいとたやすい。諸君の必要とする凡ては性格と平行的對位點の十分なことである。ジョーンズが妻を殺してゐる間に、スミスは公園で乳母車を押してゐる。諸君は題材を交叉する。面白ければ面白い程、變調と變化も亦益々六づかしい。小説家は狀勢と性格を二重にして變調させる。彼は數人が戀に捕はれたり、死んだり、違つた風に祈つたりするのを示し――同じ問題を異様に解くのである。」

最後に、小説といふものは優秀に構成されて書上げられてゐるのだが、吾々の時代にとつては大して面白くない。併しハックスリは、D・H・ロレンスの様に、幸運にも、又巧みに、吾々同時代人中最も知識あるものを面白がらせる問題を取扱つて、彼等の欲する正確な調子を用ひた。卽ちロマンチック又は感傷的な多辯を用ひず、生物學者の精確な單純な言葉を以てし、思

想の前には懐することなく、宗教に對する十七世紀の興味を思ひ出させる様な性的問題に對する興味を持ち、ワイルドの警句が一八九〇年代のものであつた様に劃然と一九二〇年代のものである靜かな皮肉を用ひた。

この近代性について、ハックスリは十分に知つてゐる。作中人物の一人、ルシー・タンタマウントは年寄りを攻撃して云ふ、『「あなたはまるで彼等がカフィル族かエスキモーであつたかの様に老人について話しをします。」「よろしい、彼等の正體は果してそんなものではないでせうか。……そして驚く程賢いのです——彼等のやり方及び考へられる凡ての事に於て。併し彼等は吾々の文明に屬するものではありません。彼等は外國人です。私はテュニスで或るアラビヤの貴婦人達とお茶を飲みに行つた時をいつでも思ひ出します。彼等は大變親切で、大變愛想がよかつたのです。併し彼等は私に食べられない様な菓子を食べさせ、又彼等はフランス語を大變下手に話し、そして彼等に云ふべきことは何にもなく、又彼等は私の短いスカートと子供のないことに大層びつくりしました。老人はいつも私にアラビヤ人の茶會を思ひ出させます。吾々が年取つたらアラビヤ人の茶會の人の様になるだらうとあなたは想像しますか。」』と。そしてもう一つの場合に、同じルシー・タンタマウントは、その愛人を叱つて云ふ、『「あなたは凡ゆる事に就て、こんなくだらない非近代的なやり方で考へるのです。あなたは足枷をつけ、燕尾服を着て歩いた方がよかつたんです。もう少し當世風にして御覽なさいよ。」「私は人間らしい方がいゝわ。」——「近代的の生活をすばしつこく送るのよ。」と彼女は續けた。「當世では、あなたは理想や空想を自分と一緒に荷車にのせて運ぶわけには行かないわ。あなたが飛行機で旅行する時には、重い荷物を殘して行かなければならないのよ。人間が悠長に生活した時は善良な古風な魂も本當に正しかつたわ。けれども現代ではそれは重苦しいわ。飛行機の中にはそんなものを入れる餘地はなくてよ。」「一人の心を入れる餘地さへないのか」とウォルターは訊いた。……ルシーは頭を振つた。「多分お氣の毒樣にもねえ、」と彼女はうなづいた。「若しあなたがスピードが好きなら、若しも遠くへ行き度かつたら、あなたは荷物を持つてはいけないのよ。……」』と。

オールダス・ハックスリには、『アンティック・ヘイ』を書いた頃は、尚幾らかルシー・タンタマウント式な所があつた。併しそれは確かに減じた。（未完）

老子の母定着

伊福部隆彦

『老子道德經』の第六章に、

『谷神不レ死　是謂二玄牝一　玄牝之門　是謂二天地根一　綿々若レ存　用レ之不レ勤』とある。これを意譯すると、「谷神は永遠に生きてゐる。死ぬるといふことがない。だからこれを玄牝卽ち玄なる母性と言つてもいゝ。この玄牝の門は又天地の根と言つてもいゝ。すべてのものを生み生みつづけ來つて終る時がなく、如何に生むでも、特に努力してさうするのでなく、自然のまゝにさうであるのだから、彼には疲れるといふことがないのである。」となる。

老子を讀んでゐて、強く感じることは、彼のマザー・コムプレクスであります。彼はその道の象徴にあたつて、しばしば性器を使つて居り、しかもそれは多く女性の性器であります。そしてそれは異性感としてよりも、母性感として感じられるやうに表現されてゐることに特に注意すべきであります。

女性々器の崇拜は、古代の宗教形式として今日認められるところでありますが、老子の思想をそこまでもつてゆくのは、すこしゆきすぎでありませう（さういふ學者もありますが）、けれども老子自身が母性に對して深い憧憬愛着をもつてゐたことは疑ふ餘地がありません。

傳說の一によると老子は、母の胎內に實に八十一年の長い間ゐて生れたとありますが、このやうな傳說の中にも、彼の母性崇拜觀念の一つのあらはれが感じられます。

扨て谷神すなはち玄なる母性は天地の根とも言はるべきもので、あらゆるものを生み出してゐます。玄は他の處でも言ひましたやうに無有一體の道たるその玄のことであつて、老子はここではその玄がものを生むから母性と呼んだのであります。

この玄なる母性はあらゆるものを永遠に生みつづけてゐるが、しかも生みつかれるといふことがありません。それは何故かといふに、自己の意志によつてさうしてゐるのでなく、自然のまゝにさうなのであるから、終る時がないといふので、人爲とか意志とか、さういふ行爲のない自然の偉大を說いてゐるのであります。

×

【編輯者附記】「谷神」とは面白い名である。この名は、この觀念は老子の發明か、それとも老子以前からあつたのか、それが知りたい。山間の谿谷を女神格化して見た結果であることは申すまでもない。その谷神は不死である。不死なるが故に谷神はまた「玄牝」と呼ぶことも出來る。「玄」は

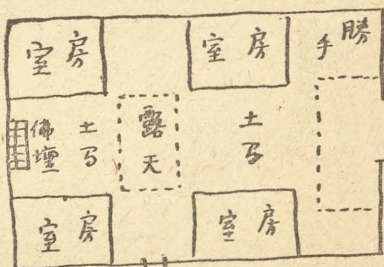
幽玄の玄であるから、死又は生以前の意と解することが出來よう。「牝」は牛扁であるから元來雌牛の意であらう。雌牛は『西遊記』的な象徴法で行くと、エスの意味であらうと思はれるから、玄牝又は谷神はエスの象徴であらう。して見ると、老子はエスの哲學者で、從つてまた東洋思想の女性的傾向を代表する一人と見なすことが出來て、卷頭二論文の趣旨を裏書きすることになる。（完）

支那の民家を觀て

黑澤敬次

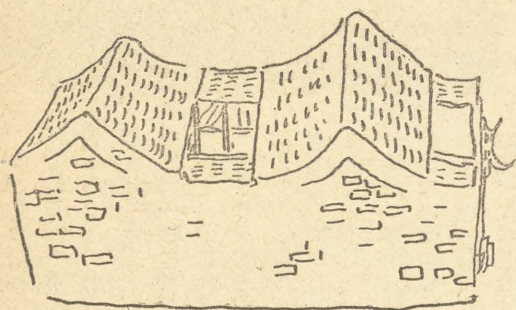
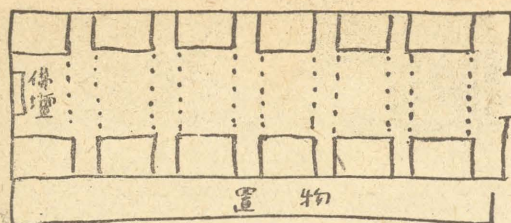
御手紙有難う御座いました。雜誌も一緒に來ました。東京の皆さんの事など考へてなつかしいです。今號は東洋文化心理號ですのに、東洋文化の發祥地に來て居ながら何も書けない自分の教養の貧しさを悲しく思ひます。

第一に揚子江の濁流、難民、子供。子を抱く高麗犬の石像（日本と異り民衆の門の前、公園の入口などに置いてあります。神社が無いから止むを得ぬのですが。）

支那家屋は地方により異るのでせうが、私の居た所ではどんな家でも佛壇が一番家の重要な物となつて正面にかざつてあります。それを中心として左右に房室があり房室には窓がなく木の戸をしめれば中は眞暗です。房室の中には立派な寢臺が置いてあり、その入口の上又は柱等に色々な字を書いた紙が貼つてあります。支那人はやたらに字を書いた紙を貼付けるのが好きな様で、それだけ字が大切なのでせう。そして平常は房室と房室の間の土間で生活して居ります。屋根は左右一組の房室毎にありそした房室が大きな家程奥に深く連結してその間が露天になり光が入ります。その外壁は土煉瓦で高く厚くかこまれて居て、一つの簡單なトーチカになつて居ます。大きな家は上圖の様につづきます。また此の一連の家屋に物置の様なものが附屬したりします。此の中に勝手等もある様です。一番奥の房室が老夫婦、次が若夫婦と言つた様に長幼の順になつて居る様です。

此の様に何の家も千變一律で、便利の爲に部屋の間どりを定める日本人には、支那人の氣持は傳統の強さと言ふか一寸あきれます。そして大體かうした家の前には池があり其處で洗濯もする様ですが、防暑の意味もあると言ふ様な話です。

日本の長屋門と言ふのもどうも支那家屋から來て居る様に

感じます。

支那には全く墓地が多いです。禿山と云ふ禿山はみな土饅頭に被はれて居ります。また寢臺が非常に立派なもので、その家屋にそぐはぬ位であり、また佛壇も大變大切にしてあります。家はすつかり煉瓦塀で蔽はれて、家はその塀の中に塀を外壁として造られてあり、出入口が少いのは盜人よけのためでせう。外からは全く覗けないし、中に庭などもあるのです。支那人は退行願望、胎内空想が盛んのやうです。

道路が一般に非常に狹くて軍公路以外は一輪車の通る畦道しかありません。寺の様なものがありますが、それは宗祠を祭る一族の寺と言つた様な立派なものがあります。その建築様式は支那の民家に似て、更に立派な佛像などのためにつくられた家です。

また田の中に、日本で言へば地藏堂と言つた様なものがあり、その中に男女二神が居ります。何をまつつてあるのかわかりませんが、天地の神の様なものではないでせうか。

支那の家屋には鏡が澤山あります。支那人はそれだけナルチストなのでせうか。支那人は自分等の居た田舍では飯を食べながら隣家へ行つたりして其の家の入口で食べて居たりします、それは自分の家に飯が充分あるのを知らせるためだ相です。支那人は不潔で皮膚病が放置されてそのまゝ骨に達する潰瘍を作つて居るのを見ます。

子供と大人が對等で喧嘩します。幼兒の死んだのは外に棄ててあります。早婚で子供のうちから夫婦が定まつて居ます。十四、五歲の夫が十歲位の妻に對して威張つてゐて、可愛いです。妻は主婦と言ふのがあり、それに妻の實權があり、勞働もしますが、外に妾の様な女も居り、一緒に生活して居ます。てん足は中年以上の女にしか見ません。變な腰つきで歩いて居ます。

支那の老人の顏には如何にも大人らしい落着いた顏が多いです。日本人よりは一般には支那人の方が顏は立派な様です。

×

私たちの居る所はN市から數里離れたところで、一面の草原となつた田と、土饅頭の一杯に群つた禿山とに包まれて居りますけれども、上海あたりと違つて樹木も多く松なども澤山あります。

使用の支那人からかつて田植歌を敎はりましたから、次に御紹介して見ます。

割公割婆割麥栽禾痲婆賤[毛非]梳頭過節痲婆賤貨梳頭過河
（カッコンカッポ　コンマ　ツアイオ　マーポーデーピーアズーデーコーチエ　マーポーデーファオズーデーコーオー）

意味ははつきりわからないのですが、次に出來るだけの説明をします。

割公割婆＝郭公鳥。割麥＝麥刈り。栽禾＝麥種蒔。痲婆＝？郭公鳥の羽毛。賤[毛非]＝けがれた生殖器？。梳頭＝頭をすく。過節＝五月。賤貨＝廉貨。過河＝河川？

「郭公鳥よ、麥刈種蒔の五月になつたならばよごれた生殖器を洗ひなさい、廉價の郭公鳥は河川で身をすすげ」

と言ふのではないかときはめて意味の通らない解釋をするのです。支那人は此のうたをうたうとエヘラエヘラ笑ふので何か猥褻な意味があるらしいのです。大した歌ではありませんが、田植歌と言ふ所に興味を感じたので書きました。

×

フロイド博士が亡くなられたことを雜誌により始めて知りました。此の前病が篤い樣な御話でしたので、何だかいよいよおなくなりになつたかと言ふ樣な感じが致します。八十三歲の大往生と言ふ樣な氣がして、ウイーンで穩に御永眠させたかつたとそれを切に御氣毒に存じます。（上段寫眞は筆者）

支那人と理想の家

土屋秋實

家と母胎や母性とが、人類の無意識に錯綜されてゐることは、精神分析學上の常識となつてゐる。空屋が未亡人や夫なき婦人の象徵となつてゐることは人のよく識る處である。又、若い女性がハンドバッグの美装に浮身をやつすのも、それが母胎や母性及び家等と無意識に錯綜されて、彼女等の處女性を象徵するからである。母胎、家、ハンドバッグ、箪笥等は

現實には異なるが、意識下のパッションとしては同一化せられる。吾々が新築の家に住むのを好むのも單に清潔と云ふ現實的理由のみでなしに、處女性尊重の心理乃至處女性破棄の快感があるからであり、從つて、新築後無住の美しい家屋に長年月住むことを假定してみれば、それが如何に或る種の人々の無意識心理を滿足せしむるかも想像される。

一體東洋人は非常に母胎定着（胎内空想）的な民族であつて、母胎と家との錯綜が甚だしく、又それは民族の母胎としての國家とも錯綜される。

私は最近に、遲ればせながら、林語堂卽ち自稱「幽默太師」の『有閑隨筆』及『續有閑隨筆』（永井直二氏譯）を讀むで非常な興味を感じた。三木淸氏は「林語堂は現代のモンテーニュである」と書いて居る。私はモンテーニュは識らないが、林語堂はローレンスの樣な思想傾向をもつてゐると思つた。しかし林語堂の方が支那人らしい現實感があつて、その巧みな文章にも限りない魅力がある。その續篇の方に「三つの歡び」と言ふ章があり、それは「友との語ひ」「旅するところ」、「家と調度の愉樂」の三節に分れてゐる。何と圓熟した無意識象徵的な歡びであらうか。その第三節の裡に彼は「支那人の理想とする家について、ある人が次の樣にうまく表現してゐる」と言つて、支那人の考へる理想の家を紹介してゐる。甚だ興味深い含蓄ある表現であるから、全文を引用させて貰ひ、大體の分析的解釋を試みてみたい。括弧内が私の解釋である。

「門の中に小徑があつて、小徑は曲つてゐなければならない。小徑の曲り角に木戸があつて、木戸は小さくなければいけない。（門、小徑はワギナ象徵、小徑の曲りは禁制の投出、小さい木戸は所謂「窄き門」タブーとしての子宮口であらうか。）木戸のうしろには臺地があつて、臺地は平らでなければならない。（臺地は子宮。）臺地の兩側の小高い堤に花が咲いてゐる、花は生き生きしてゐなければならない。（堤の花は卵巢、と同時にオルガズムのエクスタシーの表現であらうか。）花の向ふに壁があつて、壁は低くなければならない。（壁は禁制を意味するか。）壁の傍に一本の松があつて、松は老木でなければならない。松の根本に數個の岩があつて、岩には奇峭の趣がなければならない。（老木、奇岩共にペニス象徵であり、松は永遠の生命をも象徵してゐるのであらうか。）岩の向ふに亭があつて、亭は簡素でなければならない。（亭はやはり女性器象徵か。）亭のうしろに竹林があつて、竹林は淺くまばらでなければならない。（一般に竹は臍の緖の象徵らしい聯想が浮ぶが、こゝでは竹林は五蘊盛苦からの解放による快眠、安らかな死の表現か。）竹林の盡きるところに家があつて、家は幽寂でなければならない。（家は吾々の無意識心理における本來の家鄕、母胎の象徵であることは明白である。）家の傍に路があつて、路は岐れてゐなければならない。幾すぢかの道の合するところに橋があつて、橋は渡つて魅力

がなければならない。（橋を渡るのはコイトスの象徴である。幾すぢかの道の合するところに渡るべく魅力ある橋があるのは、人生において否定するも亦肯定するも常に附纒ふ影であり、夢であるところの性的願望の現實的滿足を暗示するか。）橋の袂に樹立があつて、樹立は高くなければならない。（高い樹立はやはりペニス象徴であらうか。）樹蔭に草があつて、草は綠でなければならない。草地の上に堀があつて、堀は狹くなくてはならない。堀の源に泉があつて、泉は滾々と湧いてゐなければならない。（泉、堀等は臍の緒や乳房と錯綜され、それらの象徴をなしてゐると思はれる。綠の草地は口唇性感の昇華的表現である樣だ。この泉から發した水が堀を流れてゆき、それを橋が橫切り、その橋を渡つて魅力あるのは、正に性的快感の美事な昇華である。高い樹が橋際に立ち、その梢が青空を指すのはオルガズムにおける射精、昇天願望等を意味してゐるのであらうか。）泉の上に山があつて、山は深くなければならない。（深い山は死の象徴である。）山の麓に書院があつて、書院は角室でなければならない。（書院は死としての胎內の象徴らしく思はれる。）書院の角に菜園があつて、菜園は廣くなくてはならない。（菜園は母胎。）菜園に一羽の鸛（かうのとり）がゐて、鸛は舞つてゐなければならない。（鸛が舞ふのは性的淘醉感か。）鸛は來客を告げて、來客は野卑であつてはならない。（野卑ならぬは昇華の態度。）客が着くと酒が出て、酒は拒んではならない。杯を重ねるうちに醉がまわつて、醉客は家路を想ふてはならない。（「名月や月をくだいて夜もすがら（蕪村）」

吾々はこの樣な、支那人の理想とする家の設計を讀むで、その美事な性昇華に驚く。かうした風景は支那的と言ふより、寧ろ東洋的であつて、茶道における樂しみもこの中から生れてくるのであらう。更に佛教や道教等に現れた東洋人の無意識心理の昇華はこれと全く同じであつて、その昇華の和かさ、自然さの中に吾々は樂しくくつろぐ事が出來る。そして人類の文化とは吾々の願望の昇華であるとすれば、東洋の文化の佳き特徵は、それが吾々の願望の歸趨點を完全に把握してゐる事である。西洋の文化の樣に、抑壓が強くて、ドギつい罪障感やその贖罪のために願望が最後の歸趨點にまで安らかに到達出來ないのとこれは正によき對照をなす。この故に、東洋の美しさは絕對に滿足せるもの丶永遠の安らかさ、和かさにあり、西洋の美しさは絕對に不滿足なるもの丶永遠の焦躁にある、と吾々は詩的にその特徵を規定し得る。又後者は眞夏の夜をさ迷ひ步く不眠症的夢に、前者は中秋の深夢月空に舞ふ天女の夢にも譬へる事が出來やう。

吾々はかうして、支那人或は東洋人の理想とする家の中に支那人或は東洋人の民族的夢を發見する。それは一切の支那的或は東洋的文化を貫き來つた夢である。（完）

（一四、七、二二）

自然（ゲーテ）

杉　宏　譯

序――フロイドはその『自傳』（大槻氏譯『精神分析總論』の内）で青年時代に「ゲーテの『自然』と題する美事な文章が、或る通俗講演會で朗讀せられたのを聽いたことがあるが、それは卒業試驗の直前であつたので、私は醫學を專攻する決心を固めたのである」と述べてゐる。私はそれでゲーテの『自然』を讀んで見る氣になつたが、今度フロイド博士の亡くなつたのを機會にこれを譯して本誌讀者の參考に供し、また故博士を偲ぶのよすがともしたいと思ひ立つた。文中圈點を附した個所は特に精神分析的な考へ方に一致するところのやうに思つて印して見た次第である。（譯者）

×

自然！　我々はそれに取圍まれ、包まれてゐる。さうして其の中から出る事も其の中に一段と突込んで行く事も出來ない。一片の挨拶も警告もなく自然は踊りの輪の中に我々を引込み、一緒に踊り續けるのだ。さうして遂ひに我々は疲れて來て自然の兩腕から崩折れて仕舞ふ。

自然は永遠に新らしい形體を創造する。其處に今在るものは今迄には無かつたのだ。過去に在つたものは二度とはやつて來ない。總てのものは新らしくて而も常に古いものである。

我々は自然の眞只中に生を享けてゐながら、自然の事は何もわかつてゐない。自然は絶え間なく我々に話しかけてゐながら、其の祕密は洩らさない。我々は絶えず自然に働きかける、だが矢張りこれを支配する事は出來ない。

自然は個性を現す事に一切を置いてゐるやうに思はれる。が一つ一つのものをば意に介しない。自然は常に建設し、常に破壞する。其の仕事場は窺うことが出來ない。

自然は子供の中にのみ住んでゐる。では其の母親は何處にゐるのだらう。自然は唯一の藝術家だ。最も單純な材料から最大のコントラストを生み出すからだ。少しも努力の氣配を見せずに非常に大きな完成を仕遂げるからだ。十二分な確實さを遂げつつ、常に何か柔いもので覆つてゐるからだ。自然のどの作品でもそれぞれの本質を持つてゐる。どの現象にも他とは違つた個別的な概念がある。而も總ては合して一となつてゐる。

自然は芝居を演じてみせる。だが自然はそれを自分で見てゐるかどうかわからない。でも自然はそれを我々の爲に演じて呉れる。其の我々はそれに一役買つてゐるのだ。

自然は生成と活動とを永遠にやり續ける。でも自然は依然として自然である。自然は永遠に變化し一瞬も停る事を知ら

ぬ。舊態依然と言ふ事には自然は與り知らず、靜止する事を呪つて來たのだ。自然は確乎としてゐる。其の步調は正確だし、其の例外は殆んど無いし、其の法則は不變であるからだ。

自然は過去にも考へて來たし、今も考へてゐる。併し人間としてではなく、自然として考へてゐるのだ。自然は總てを包括する獨特な感覺を隱してゐる。だが誰もそれを窺ふ事は出來ない。

人々は總て自然の中にある。さうして自然は總ての人の中に在るのだ。自然は總ての人と親しく遊戲をする。さうして負かされれば負かされるだけ喜んでゐるのだ。自然はこつそりと遊戲をしかけるものだから、やつて仕舞つたあとで多くの人はそれと氣付くのだ。

自然は又最も自然らしくないものである。自然は天才なんだが一面には馬鹿々々しい所もある。自然をあらゆる方面から見ない人は何處も正しく見てゐないのだ。

自然は我が身を愛してゐる。數知れぬ眼と心で何時迄も我が身に固著してゐるのだ。自分を享樂する爲に、我と我が身を切り分けて來たのだ。自分を知らせる爲に、共に樂しむ者達を常に飽かずに生ぜしめて來たのだ。

自然は錯覺を喜ぶものだ。自他の錯覺を破る者達は、最も手強い暴君として罰せられる。信頼し切つて自分に隨つてゐる者は、子供の如く胸に掻き抱くのだ。

自然の子供は數知れぬ。誰にでも自然は到るところ、物惜みはしない。併し特にお氣に入りの者はあるのだ。それには金目を厭はず多くの物を捧げるのである。偉大なるものには保護を與へてゐるのだ。

自然は其の創造物を何も無い所からヒヨツコリ出て來させる。併し自然は彼等が何處から來て何處へ行くかを語りはしない。彼等は只行かなければならないのだ。其の道は自然が知つてゐるのだ。

自然には殆んどぜんまい仕掛等はない。が、決して使ひ耗るやうな事はない。常に活動し、常に多種多樣の趣を呈してゐる。

自然の演ずる芝居は常に新らしい。其の譯は、自然は何時も新らしい觀客を造り出してゐるからだ。生とは自然の最も美くしい考案だ。そして死とは多くのものをして生まれしむる爲の自然の技巧である。

自然は人間を暗黑で包んでゐる。さうして人間を永遠に刺戟し光を求めさせるのだ。自然は人間をして大地に賴らせる。それは中々骨の折れる事であり、おいそれとは行かない事だ。そして幾度も人を奮起させるのだ。

自然は活動が好きだから、色々な欲望を與へてゐる。自然が其の運動の一切をこんなわづかなものでやつてのけるとは驚くべき事だ。一切の欲望は恩惠である。忽ちにして滿足せしめられ、又忽ちにして生起する。一つの欲望が加へられれば、それはつまり快樂の新らしい一つの泉なのだ。併し間も

なく自然は釣合を得るのだが。

自然は常に非常に長い道程に向つて進んでゐる。さうしてあらゆる瞬間に目標に達してゐるのだ。

自然それ自身は虚無である。併しそれは我々にとつてではない。我々には自然は一番重要なものとなつてゐる。自然は一切の自然兒をして己れを加工せしめ、愚かな人々をして己れを審判せしめ、幾千の者をして愚かにも何も見ずに己れの上を素通りさせる。そして總てのものに就て喜びを持ち、總てのもので勘定を合せるのだ。

人は自然の法則に反抗してゐる時でも其の法則に從つてゐる。自然に抗して效果を擧げようと思つても矢張り自然の効果に從つてゐるのだ。

自然は其の生んだ總てのものを愉快なものにしてゐる。と言ふのは自然は、先づすべてのものをなくてはならぬやうに造つてゐるからだ。人間が自然に憧憬してゐると言ふ事には自然は遲鈍だが、人間が自然を飽足りなく思つてゐると言ふ事には自然は氣が早い。

自然は自身物言ふ力も言葉も持たぬが、數多の舌と魂とを創造し、それで感じ、それで話すのだ。

愛こそは自然の王冠である。愛に依つてのみ人は自然に近づくのだ。自然は總てのものをそれぞれ違はせてゐる。だから總てのものは組み合はうと欲してゐるのだ。自然は總てのものを離して一人ぼつちにした。其の爲に總てのものは一緒にならうとするのだ。愛の杯を二三杯飲んでこそ、辛苦に滿ちた一生を自然は損のないものと思ふのだ。

自然は總てである。自然は自らを褒め、自らを罰し、自ら喜び、自ら苦しむのだ。自然は嚴格でもあり寛大でもある。懷しくもあり恐ろしくもある。無力でもあり强力無比でもある。總てのものは常に自然の中に在る。過去・未來……そんな事は自然の知つた事ではない。現在こそ自然の永遠である。自然は親切だ。私は自然の一切の作品に依つて自然を讃美する。自然は賢明で落着いてゐる。人は肉體に就ての說明は自然におまかせする。自然が自ら進んでは呉れない贈物は、自然から無理に奪ひ取りはしないのだ。自然は狡猾だ。併し良い目的の爲にさうなのだ。一番いい事は自然が狡猾と氣付かない事だ。

自然は完全だが而も常に未完成だ。自然は今やつてゐるやうに、常にやる事が出來るのだ。

自然は一つ一つのものにそれぞれの姿で現れてゐる。自然は幾千の名前と差別標に身を隱してゐるが、常に同じものだ。

自然は嘗つて私を此の世に送り込んだが、いづれ又私をあの世に連れ出すだらう。私は自然に自分を任せる。自然は私を意の儘にする事が出來るのだ。でも自然は其の作品を憎みはしないだらう。私は自然に就て話したのではなかつたのだ。否、眞實のことも、誤つてゐることも、一切は自然が語つたのだからである。一切の功罪は自然にある。（完）

心理研究ノート（續）

長谷川誠也

（四十一）大論の對親違背觀

大智度の第四卷に次ぎの説がある。

「餘人（菩薩以外の人のこと）は中陰に在りて住する時、若し男なれば母において欲染の心を生ず。この女人、我と事に從ふ。父において瞋恚を生ず。若し女ならば、父において染欲の心を生ず。この男子、我と事に從ふ、母において瞋恚を生ず。」

エディポス・コムプレクスを説いたものである。同樣の説明は、「瑜伽論」にも「倶舍論」にもある。時代から言へば「大論」の方が古いから、後の二論は、これに倣つたものと老へられるが、恐らくかやうな觀察は餘程古くからあつて、一般思想界に流布してゐたから、後の二論の著者も、「大論」からこれを學ぶ前に知つてゐたらうと思ふ。（拙著『遠近精神分析觀』を參照）

（四十二）お父さんとチャン

内閣情報部發行の「週報」第一五三號（十四年九月二十日）に掲載の「司法保護精神と母性愛」と題する記事中に、實に意味の深い一項目がある。

或勞働者の子で、不良性のものが、多摩少年院に送られ、二ケ年間の感化を受けて善良な子となり、もう放浪癖はなくなつたから安心といふので、生家へ送り還へされた。おやぢの勞働者は、父の威嚴を示しながら、子を迎へたが、子供が、

「お父さん、只今歸りました」

と挨拶をすると、父はその善く變つた態度に、むしろ反感的な態度をとり、

「お父さんぢやない。チャンだ。チャンだとぬかせッ」

と言つたさうだ。それから三日とたゝない中に、この子は再び少年院に逆戻りした。彼は「私が惡かつたのですが、どうしてもお父さんの心持にピッタリ合はせるわけには行かない

のです。（中略）若しもお父さんのいふまゝになつてゐたら私はまたどうなることか。それが寧ろ怖ろしくてたまりません」と述懐したさうだ。

この實話は、親の無理解のために、せつかく善良な少年となつた者を、再び路頭に迷はせるやうな事になる場合もあると言ふ好例として掲載されたものである。全くその通り、親の無教養のために、子供の善良な性質が歪曲されてしまふ例は非常に多い。だから、かういふ例は、教訓の好材料として何遍でも繰返へさるべきものだと思ふ。

ところで、この話には別方面から考察してみるべき部分がある。それは、言語の人心に及ぼす影響のことだ。この父なる勞働者は無教養の人間であつたから、「おとうさん」と言はれるよりも、「チャン」と呼びかけられる方が、子に對する一そう深厚な愛情を感ずるのであつた。彼とても「おとうさん」は良い言葉であるくらゐのことは知つてゐたらうが、さう呼びかけられては、父親としての本能的愛着が起こらないのだ。彼にとりては、前記の外、とツつアん、おとツちやん、おやぢさんなどよりも、チャンの方が遙かに親しみの深い音響をもつてゐるのだ。彼自身が幼少年時代からこの語を用ひ、それに特殊な情味の含蓄があると思つて、その子供にこれを用ひさせて來たのだらう。一體幼少年時代から使用し來つた言葉には、特異なニュアンス、あるひは情緒、情操、聯想などの空氣が附着してゐるものだ。それらを削り落さうと試みたところで、到底なし得るものでない。

この子には母親がなかつたのだが、若し生存してゐたとすれば、おやぢ同樣に、おかあさん、おッかさん、はゝ樣、おふくろなどの言葉で呼びかけられるよりも、おッかあと言はれる方が、親しみを覺えたらうと想像する。彼女は恐らくおツかあと言ふ音響の内に、母親としての自分を發見したであらう。

このおやぢは、おとうさんと言ふ語だけに反感をもつたのではあるまい。この子が少年院で習つた上品な多くの言葉に對しても不滿足を抱いたらう。だから父子の間は遂に和解の途に入り得なかつたのだ。

こゝで問題はかういふことになるのだ。低級な社會の言葉を、一概に粗野、無趣味として排斥することなく、これを利用して、その層の文化的水準を漸次に上進させるには、どう言ふ方法を用ふべきものか。心理學者も、教育家も、社會改良家も、協力してこの研究に努力すべきであらう。生まれ故郷を同じくする者が、郷里の言葉をもつて語り合ふ時に、なんとなく平和な安定した生活にあるやうに感ずる。あの心理を省察すれば、低い社會層の言葉を、どう取扱つてよいかが、おのづから判斷され、またその利用も考案されるであらう。

時評

日本人の弱點と家族主義の功罪

大槻憲二

一、スパイに乘ぜられ易い日本人

最近私は、防諜思想普及會編『躍るスパイと軍機の保護』と題する小冊子を研究會員田中虎男氏から借覽する機會を得たが、その中に日本人がスパイの術中に陷り易い弱點を持つてゐるとて、次のやうに述べてある個所に逢つて一方ならぬ衝撃を受けた次第であつた。

外國のスパイ等は「ゲスト・スマグル・スパイ」と呼ぶ新手のスパイ戰術を用ひて、日本内地は勿論、朝鮮、滿洲、支那の各地にまで、その魔手を延ばしつゝあると云ふ。「この戰術といふのは、主として政界、財界等の諸名士、または官界その他各方面の幹部級の人物を、種々の名目のもとに晩餐會に招待したり、贈物をしたりして目的の人物に巧みに接觸し、そこで行はれる座談での無意識の放言のうちから、諜報上の必要事項を探知する戰術を云ふのである。

「由來、日本人は何氣なしに喋る噂や、又聞きが政治上にどんなに重大で、どんな影響を與へるかといふことを考察する訓練を經てゐない。しかも、未だに外國人に對する無條件的な崇拜思想から脱し得ないために、歐米人に比べてはるかにこの新戰術に引つかゝり易い憾みがある。既にこの手を喰つて國家の重大事を無意識裡に放言してゐる人物が非常に多いとさへ云はれる。

ABHUB

アプフウブ

他の學問がアプフウブ（屑）として棄てたものゝ中から、分析は眞理の黄金を探し出す。

邯鄲の夢物語

不老泉院主

支那で有名な邯鄲夢枕の傳説は、讀者諸君の既に御存知の事であらうと思ふが、古の趙の國の都邯鄲の盧生と云ふ一青年が道上の邸舍の主人の粟飯を炊く間に呂翁の枕を得て眠むると、五十年の榮華を夢み、覺めて後、人生を觀じて鄕里へ歸つて安穩に暮したと云ふ話。一炊の夢、盧生の夢、黄粱夢などゝも云ふ。「枕中記列仙傳」等に詳しく見えてゐると云ふ。

から云ふ風に、人生を現實的に經驗するよりは夢で間に合はせようと云ふ方で、退行願望を充足させる思想や言動は支那の傳説、文

「この戰術が如何に成功してゐるかは、海外にあるソ聯某要人が語つた。次の談話で明かにされた『日本人は個人的に接したり、賓客（ゲスト）としてディナーやパーティに招待しておくと、實に赤裸々に國家の實情や、または僞らぬ意見を吐露する國民である。この點からして、日本くらゐ政府當局が何を考へ、何を計畫し、如何なる決意、實力を持つてゐるかを容易に探知出來る國はない。未だに日本人が外國崇拜の事大思想から脫せず、外人の前に出ると魔術的告白をする。卑屈な社交的儀禮に得々としてゐる習慣のさせる業だ。』と、テスト戰術の効用を禮讃し、日本人を痛罵してゐる。」と。

右のソ聯要人の日本人評は出鱈目で事實に遠いと揚言し得る自信が日本人にあるであらうか。防諜思想普及會でもこれを全的に承認したからこそ、この小冊子の中にこの評言を引用したのであらう。國民一般も日本の最近の外交の拙劣さを見ては、具さにこの評言の出鱈目でないことを知るのである。

果してさうならば、このやうな（敢て云ふ！）民族的缺陷は如何にして生じたのであらうか。

二、日本人の「胸襟を開」かせる方法

この問題に答へるためには、右の評言の中に記述してあるスパイ實現の場面や方法を研究して見るにしくはない。その方法とは食事に招待したり贈物をしたりすることである。さう云はれると、この方法なら、必ずしも外國のスパイばかりでなく、日本人が相手の弱點につけ入りたいと思ふ時に御互に盛んにやつてゐる方法である。日本では商賣の取引でも、政治の懸引でも、或は人生樞要の密談でも、用談でも、大抵は料理屋や待合に於いてなされる。何故さうかと云ふと、さう云ふ條件の下に於いては、日本人は直ぐに甘くなり、御され易くなるからであ

學、故事などの中に無數に見られる。「歸去來辭」の陶淵明は固より、李白も杜甫も白樂天も、みなこの傾向が強い。

表紙に掲げた夢枕佛古蹟の寫眞は研究會員小林一君が北支に出征中、一日邯鄲の都を去る三里の古寺に自動車を自ら驅つて直接撮つて來られた貴重な紀念品である。こゝに讀者諸君に御紹介の機會を得たるを悅ぶ。

佛掌中の悟空

『西遊記』の八卦爐の條に、孫悟空が如來と論爭し、「俺は觔斗雲に駕つて一飛に十萬八千里を往くことが出來る」と豪語したに對して、如來は「それでも天位は得られぬ」とさとしたところ、悟空は自分の通力を主張して已まぬので賭けになり、雲に乘つて飛去つた。やがて前方を見ると、肉色をした五本の柱が立ち並んでゐる。悟空はこれを見ると、天の果まで來たと思ひ、その眞中の柱に「齊天大聖此に到つて一遊す」と書きつけて如來の許に歸つて來た。如來は笑つて「汝はやはり乃公の掌の中から出られない」と云ふ。悟空は氣色ばんで「そんなことはない、天涯の柱に證據を書き殘して來た」といきまく。「それはこれだらう」とさし出される如來の指を

る。さうしてその料理屋や茶亭は、外國のそれのように事務的には出來てゐないで、密室的に、茶室的に、四疊半的に出來てゐる。さう云ふ條件下に於いて、日本人は相手に對して非常に親密な感情を持つやうになる。久しい間の交際によつてゞはなく、このやうな人工的な方法や條件によつてこのやうに不自然に親密になるとは、相互に幼兒的な氣分に退行し、同一化し、家族的な關係を幻覺するやうになることである。卽ち、このやうな錯覺的雰圍氣に於いて直ちに「胸襟を開く」やうになるのである。この事は日本人が家族主義に長養せられ來つたことゝ全然無關係であると云へるであらうか。

三、外人崇拜と秘密告白の心理

次に問題なのは、日本人が「未だに外國人に對する無條件的な崇拜思想から脫し得ない」とせられてゐることである。それは本當であらうか。少くとも防諜思想普及會ではさう認めてゐるのである。もし事實とすれば甚だ遺憾な事であるが、併し我々の立場から問題にすべきは、第一に、崇拜してゐる者に對してはどうして何もかも打明けるやうになるかと云ふことゝ、第二に、その崇拜心を如何にして除去すべきかと云ふことゝである。

第一の問題に對しては、分析者はかく答へる。崇拜する人物にとつて崇拜せられる相手は、その人物の超自我になるのであるが、超自我の前に自我は無力であり、宛も先生の前に出た小學生の如く、質問に對しては自分の知つてゐる限り、或は知つてゐる以上をまでも、喋舌らずにはゐられない强迫的衝動を制御することが出來なくなるのである。そのやうになるのは併し、本人の心理が分裂狀態、又は分裂し易い傾向にあることを豫想せねばならない。何となれば、本人の心理に一時的の分裂が生じ、彼の超自我は自我との合一狀態から遊離して相手に投出

見ると、悟空の記した文字はそこに歷然と現れてゐた、と云ふ話がある。これは有名な話だから誰でも知つてゐるであらうが、誠に意味深長な寓話である。誠に分析を學ぶもの、或は患者を分析するもの等が參考として自戒せねばならぬ話である。フロイドはやつとキリスト教を卒業したゞけで佛教はこれからと云ふところで死んだとか、余の分析は旣にその段階は過ぎたとか、只今は抵抗期だとか、轉嫁期だとか、粗雜に概念的に片付けて得意になつてゐる人々がゐるが、そのくせフロイドの掌中世界を半步も動いてゐない人々が分析者と自稱する人々の中にも見られる。大學を卒業したものは小學校や中學校の知識は全部知り盡してゐる筈だが、實際は小學校の三年程度の數學問題だつて解けないのが普通である。物事を、殊に精神上の事柄を、あまりに官僚的、形式的、概念的に片付けることは餘程愼まねばならぬ。本人は得意になつてゐても、具眼者がこれを客觀する時、屢々吹飯ものである。(三十頁挿圖參照)

繪畫に於ける東西

支那現代の學者としてわが國にも有名な林語堂氏は、繪畫論の中で次のやうに云つてゐ

され（乘移つた）一種の催眠狀態になつてゐることを想定しなければ、馴染みの淺い外國人に對してヘラ／＼と國内の秘密を喋舌りまくると云ふことは考へられないからである。

して見ると、日本人は、そのやうに社會の上層にある人々でさへも、心理構成が軟弱である、つまり幼兒的であると云ふことになるのである。そのやうに根强く幼兒性が殘つてゐるとすれば、日本人はその幼兒性を幼兒時代に特に樂しく暮して來てゐるか、或は成長後にも長く幼兒的取扱を受けて來てゐるか、或はなほ現に受けつゝあるものと認めなければならないのである。もしさうならば、これまた日本の家族制度と何らかの關係がなければならないのである。

日本を訪れた或る西洋人は日本人が幼兒を遇することがあまりに甘く、あれでは子供の將來が思ひやられると云つて嘆じたと云ふ話を上司小劍氏が某誌に紹介してゐたのを見たことを私は記憶してゐるが、私は外人の說を鵜呑みにするわけでは決してないが、さう云ふ批評があると云ふことだけは覺えておきたい。

四、外人崇拜心の三原因

第二は、その外人崇拜心を如何にして除去すべきかの問題である。除去の問題は除去の方法の發見に懸つてゐるが、方法の發見は外人崇拜心發生の原因の探究が先決問題でなければならない。

その原因は、第一に、右に述べて來たやうに、日本人全般の幼兒性であると思ふ。第二は、卷頭論文及び土屋氏の卷頭第二論文に說いてあるやうに、日本人をも含めての、東洋人全般の女性的傾向にあるのではないかと思ふ。第三は、日本人が西洋人全般に對して抱いてゐる劣等感であると思ふ。劣等感なるものは、屢々私が論ずるやうに、優越感の變形したものであつて、その變形の契機は劣等の

る。「支那は繪畫では、靈感を山や流れの貌から抽き出すが、西洋の繪畫では婦人の美の中に求める」と。（『アトリエ』誌昨年十一月號所載。）それはさうだが、この言外の意味は「それ故に支那の繪畫は高尚で西洋の繪畫は下品だ」と云ふのにあるらしい。上品とか下品とか見るのはその人の趣味だから、仕方がない。と云つて、私は林氏說に反對してゐるわけではない。東洋美術の方が上品のやうに思はれる。併しその故にとて、これだけで文化的價値を決定したやうに思つてゐるとすると、それはどうかと思はれる。人間にしても、上品な人格者が必ずしも人類の文化に多く貢獻するとは限らないのである。

林氏は、東西美術の靈感の源が山川と美人との別にあることを主張して、全然無關係なものゝやうに考へてゐるやうだが、精神分析學の研究は山川は殆ど常に美人の象徵に外ならぬことを發見してゐる。それ故に東西美術の差違は比較的に生な靈感と比較的昇華せられた靈感との別に存するに過ぎないことを、我々は知るのである。

男性的と女性的

林氏はなほ續けてから論じてゐる。

意識の抑壓である。始めに無意識的、幼兒的優越感があり、後に劣等の意識が現實經驗から押付けられると、その劣等の意識は無意識的優越感と葛藤して、何とか双方で妥協しようと圖る。その時、分析を知らざる人々の妥協の方法は、劣等意識を劣等感に變化させることに依つて無意識の底に抑壓すると同時に、無意識的優越感を意識面に押出してそれを不自然に誇張するのである。この方法が現實社會に見られる美事なる實例としては、卷頭論文に說いてあるやうに、津田左右吉氏等の東洋否定論の如きがある。このやうにして本人はその快樂原則を保持することが出來るが、その代りに、彼の心理生活は一種の病理性を帶びて、始終イラ〳〵として心理は不斷に自己葛藤性・自己分裂性を帶びて來る。何となれば、抑壓せられたる劣等の意識は不斷に正當なる認識を要求して、背面から意識を脅威し續けるからである。これが劣等感の心理機制である。これがある間は、その人々は劣等感を刺戟する相手に向つては傲慢になるか卑屈になるか何れかである。卽ち相手を不快がらせるか輕侮を買ふか、何れかである。その卑屈な心理狀態に於いては、相手からの質問に對しては何でもかんでも自分の知つてゐる限りを强迫的に吐露して了ふやうになるであらうことは極めて自然である。

このやうに、外人崇拜心理の原因は、私の見るところでは、日本人の幼兒性と、女性的傾向と、劣等感とにあるのである。幼兒性の原因は日本の家族主義制度であると私は解釋する。第二の女性的傾向は、東洋民族の一般的性向であるらしく思はれるから、この性向を偏見なく承認（卽ち意識化）することに依つて、却つてこれの威力を發揮するやうに努めるより他に途はないのである。第三の劣等感解消の途としては、一つには日本人が文化的努力に依つて西洋人を凌ぎ、卽ち優越の意識によつて劣等感を解消するの途と、今一つは劣等の事實を勇敢に（快不快原則に反抗して）承認することに依つて、劣等感を劣等の意識に變へることで

「西洋人は『自由』とか『勝利』とか、平和とか、或は『正義』とか云ふ感情を必ず半裸體か裸體の婦人の肉體をかりて人間化するが、私にはその理由が分らない。このやうな高尙な感情がどうして男性によつて表現せられることが不可能なのか。」と。

併しこの質問は我々これを答へるにさして困難を感じないやうである。西洋人はそれだけ男性的であり、東洋人（殊に支那人）はそれだけ女性的であるからだと。人間は總てその最大の願望を異性によつて供せられる。それ故に、その願望の種類や性質が生のものでなく、ずつと昇華せられたものになつても、それを與へて具れる相手を異性として象徵することは極めて當然なことであらう。

露骨と陰微

右の林氏の說とわが國の谷崎潤一郎氏の意見とを對比して見ると面白いものがある。谷崎氏はかつて雜誌『大調和』昭和二年十月號で、「東洋趣味漫談」の中で次のやうに述べてゐる。

「東洋の藝術には繪畫に限らず、凡ての方面で、進んで人生を肯定し、享樂しようとする分子が少い。おほざつぱに云へば悲みの藝

ある。劣等感を無意識の底から引きづり上げて意識の天日に曝す時は、そこに纏はつてゐる妄想的要素は霧消して了つて、あとには不快なる事實の認識が殘るが、事實の認識は不快なだけで全體の心理生活を病的にすることはないから、例へば優越な相手に對しても別に卑屈な態度に出るやうにはならない。劣等の事實を承認したら優越の相手に對して一層卑屈になるだらうと常識的な人々は云ふかも知れないが、私はそんなことは絶對にないと信ずる。何となれば、劣等の意識は優越者に對して敬意を表するが、それは相手の優越な部分に對してだけであつて、社會生活、國際生活上の個人的、又は國民的權利は、平等であると云ふことを忘れないであらうからだ。それを忘れるやうになるのは、劣等感が無意識裡に欝勃してゐて、心理生活の全體的機構を軟弱にしてゐるからである。

現に、我々とても同じ日本人の間に於いて、何らかの點に於いて優越なる相手、又は上流なる階級者に對して、その限りに於いて敬意を拂ふけれども、相手がもし自分の人格を侮辱するやうな態度や、或は生活權を蹂躪するやうな態度に出たりしたならば、毅然としてこれを許さないであらうと云ふことは何人も（その人が人格として確立してゐる限りは）これを認めるに吝でないであらうからだ。

五、家族主義功罪の全的認識

右に縷々論述し來つたやうに、日本人の弱點、殊に外人のスパイ戰術に陷り易い缺點は、日本人の家族主義にその原因の全部があるとは云はぬが、その大部分又は一部分があると云ふことを承認しなければならないと思ふ。さう云ふ點に於いては、支那人の方が餘程訓練が出來てゐて、容易に他國人に自國の不利を裏切るやうなことがないと云ふ說も聞く。勿論、その反對の實例も澤山あるであらうが、支那人の方が個人主義的に訓練せられてゐて、從つて個人主義の功罪兩面を

術、逃避の藝術、控へ目の藝術であつて、激情的、跳躍的、觀樂的、奮鬪的でない。これが少年の心に訴へるところの乏しい所以であると思ふ。勿論、東洋人だつて激しい感情を知らないのではないが、しかし愼み深いことを美德としてゐたわれ〳〵の祖先は、喜怒哀樂を露骨に表現することを卑しんだのであつた。それ等の感情を表はさうとする場合には、彼等はいつも何事かに假托して隱約の間にこれを述べた。さうしてその方が露骨に云ふよりも一層人を動かすとされ、又實際に動かしもした。」

だから、私が右に論じたやうに、直接の婦人美よりも山川の象徵によつて婦人美を表現したのだ。這般の消息は林氏には分つてゐない。そのわけは分析的に云へばやはり抑壓のためだらう。

病的と昇華的

谷崎氏は續けてかく論ずる。

「ところが今の人間はさう云ふ態度を奧床しいとは感じないで、生ぬるいと感じ、赤裸々な西洋主義を喜ぶ。この二つのうちの孰方が健全な趣味であるかは、正直な子供を連れて來れば直ぐに分る。子供は一も二もなく、

示してゐると云ふことは承認しなければならない。黒澤敬次氏が本號資料欄に報告してゐるところによると、支那人の生活はその家屋の構造に就いて見られるやうに、云はゞ個人主義的家族主義である。これを内面的に見れば、如何にも古代的、封建的の家族主義であるが、これを外面から見ると、その堅固な石壁に依つて外廓を圍んでゐるところに象徴せられてゐるやうに、如何にも排他的であり、防禦的である。支那人の家族主義は家族的個人主義であつてその單位は家族にあり、他人を敵視する傾向が強いやうであり、從つて國家としては軟弱であるが個人としては強いと云ふ感じがするが、日本の家族主義は家族的國家主義であつて、その中に於いて育つて來た日本人は、丁度良家の坊ちやんのやうにとかく内辨慶になり易く、その個人性は軟弱になり、その確立が遲延し勝ちであると云ふことは、科學的に考へて見て如何にも自然である。

私は日本の家族主義を、殊にその國家的家族主義の長所を認識するに吝なものではないが、併し事物には總て何物によらず長短兩面があつて、その長を誇るの餘りにその短を忘れるやうなことがあつてはならないと云ふことを、私は力說したいのだ。我々はあまりにも屢々、日本は家族主義の淳風美俗が行亙り、西洋には個人主義と功利主義で落寞としてゐると云つたやうな簡單な樂觀說、優越說を聞かされるが、それは正に、東洋には精神文化があり西洋には物質文化があると云ふことに依つて、東洋を西洋よりも優越してゐると考へてゐる劣等感の置換へ的思想と全く同じものであり、從つて、東洋精神文化、西洋物質文化論に對する津田左右吉氏の批評（土屋氏論中の引用を參照）をそのまゝこれに適用することに依つて批判し得るであらう。その點に於いては私は全く津田氏の論に同感するものである。

西洋流の味方をする。」

抑壓程度の差もあるが、併し必ずしも健全不健全だけで片付けるわけにも行くまい。一つには昇華程度の差もある。抑壓と昇華とは密接の關係はあるが、昇華度の高いものが一概に文化的に高尚だとばかりは云へない如く、また一概に病的だとばかりも云へない。土臺人間は動物よりも昇華的であるだけに病的なものなのだ。

日支とエスの強度

更に轉じて谷崎氏はかく論ずる。

「同じ控へ目主義でも支那と日本とでは大分違ふと云ふことを考へられる。支那のは形式は控へ目であるが、内容はその枠の外へハミ出すほど充實してゐる。十のものを七にも八にも無理に壓縮したと云ふ感じで、そのために一層彈力がある。だから控へ目であつても、コッテリとした厚みがあつて弱々しいところがない。然るに日本のは十のことを七八分だけ云つて、殘りの二三分を遠慮してしまふのである。だから非常に弱々しく淡々しい。」

これは私が卷頭論文に說いてゐるところと趣旨は同じで、日本人の文化能力に就いては

『殘菊物語』の分析鑑賞

村松梢風原作、溝口健二演出、花柳章太郎主演の松竹京都の右作品を、松竹に勤務する友人笠美雄君の好意的招待により、國際劇場に於ける封切に鑑賞し得たことを、こゝにまづ笠君に感謝しておく。

一代の名優尾上菊五郎の養子として育てられた尾上菊之助の藝はなほ甚だ未熟であつたが、父菊五郎への氣がねから、その弟子達は誰一人面と向つてそれを批評するものはなかつた。たゞ一人、それを直言したものは女中のお德であつた。その眞情に動かされて二人の關係はわりなき仲となり、菊五郎夫人はそれを見咎めてお德を解雇する。菊之助は諦めかねて鬼子母神境內で逢ふ瀨を重ねてゐたが、養父菊五郎の怒りを買つて、遂に菊之助は自分の方から養家を追ん出てしまひ、緣故を賴つて大阪へと下り、芝居を續けてゐたが、評判は依然香しくなかつた。あとを追つて來たお德は道頓堀の朝日座の樂屋口で待受けて菊之助に會ひ、二人の事實上の夫婦生活はそれから始まるが、やがて二人の生活は段々と思はしくなくなり、旅藝人に墮して落寞たる生活を續ける。日一日と荒んで行き、「俺がこんなに落ちぶれたのはお前のせいだ」などゝ云ふ愛想づかし、併し或る意味では本音、をまで吐くやうになる。

ゆくりなく名古屋へ旅興行に出向いてゐた福助（菊之助の幼馴染）の樂屋を訪れたお德は、菊之助のために舞臺に立たせて貰ふことを懇願して容れられ、そこで始めて、彼の藝が非常に進歩してゐることを舊友たちに認められて、菊五郎への詫を入れて貰ふことになつて、菊之助は福助等一行と共に、久しぶりに上京する。その汽車の出發間際に、お德は姿をかくして、菊之助を浮び上らせると共に、自分自身は一人淪落の淵に陷つて行く。その後、菊之助は大阪への旅興行の際に、尋ねるお德のありかを知るが、その時お德は二度と立上れぬ病床に臥してゐた、と云ふのが大體の筋である。

右の筋書を讀んで見たゞけでも分るやうに、この物語の心理學的內容は菊之助の養父菊五

悲觀的の見方であるが、併しこれが事實であるならば仕方がない。我々は事實の正當なる認識から出發しないものは病的であると信じてゐるが、併し悲觀論はとかく病的になり易いと云ふことを自戒しなければならない。日本人は自我とエスとの關係が比較的調和を得てゐるので、今のところを支那を制壓してゐるが、自我力に於いて西洋に及ばず、エスの力に於いて支那及びロシアに及ばぬとしたら、餘程の覺悟がなければ東亞の文化的盟主たることは期し難いことになる。劣等感を優越感に置換へていゝ氣になつてゐる如きは最も非國民的危險思想であると云ふことを私は大聲叱呼しておかねばならない。

月下氷人

唐韋固と云ふ未婚の青年が旅に出て宋城に泊ることになつたが、そこで一人の異樣な人に出遇つた。異人は囊に倚りかゝつて、月下に向つて書物を檢べてゐた。固は不思議に思ひ何をしてゐるかと尋ねた。異人は微笑して「婚姻の事を案じてゐる」と答へた。續いて固は囊中の赤い繩の用途を尋ねた。異人これに答へて「これは男と女との足を繫ぐ繩ぢや。わしが書物を檢べて、これなら夫婦にしても

郎に對するエディポス的反抗心と、養子としての僻み（劣等感）と、その僻みに基くお德への同一化とが菊之助側の內容であり、お德側の內容は菊之助に對するエディポス的思慕と、墮落への誘惑願望と、一度墮落させたものを再び浮び上らせようとする母性的戀愛態度（出産願望）と、罪障感のために自分を犧牲にして悲慘の境地に沈淪して行くマゾヒスティックな墮落願望（女性的な死の本能）とであると云ふことが出來よう。

さて、これ等の心理學的內容がどの程度にまで作品に出てゐるかと云ふと、頗る煮え切らないもので、これは恐らく原作の不備に基くのであらうが、演出家も明治的雰圍氣や主人公の甘美な氣分を出すことにのみ專念してゐて（尤もそれが氏の得意の點でもあるのだが）、さう云ふ方面にはあまり努力を拂つてゐないやうである。併し內容的には不得要領でだらしなく、いゝ加減なところで胡麻化し、氣分だけを重んずると云つたやうなのが、何種類の藝術と云はず、日本藝術の一般的特徵なのだから、敢てこの作だけを咎め立てするわけには行かない。では、どう云ふ點がだらしなく不得要領かと云ふと、例へば、菊之助の菊五郞に對する反抗心の如きである。彼が養父の威壓に對して屈せず、決然として名門をおん出た勇氣に對しては敬意を表するが、さうしてこの氣魄あればこそ後年に物に成り得たのであらうが、その追ん出た動機の中には養子としての僻みや、女中コムプレックスや、墮落願望や、ひねくれたナルチスムス（優越感の病理としての忠直卿コムプレックス）やなどが存したことを、今少し痛烈に指摘してあつたら、あの作品の文學的價値はもつと高まつたであらうに、と云ふのだ。要するに作者はあまりに主人公に同一化し過ぎ、甘やかし過ぎてゐる。その墮落と淪落とをさへ甘美に見ようとしてゐる。たゞ、さきに引用したやうに「俺がこんなに落ちぶれたのはお前のせいだ」と云ふやうな言葉を吐かせてゐるのは大出來だが、たゞ如何にお德に於いて菊之助を落ちぶれさせようと云ふ意圖があつたかと云ふことは作品上には全然描寫してないので、あの言葉もたゞ菊之助の荒漠たる氣分を表現するための材料として用ゐられてゐるに過ぎないやうな感じを與へる。

次にお德であるが、彼女が菊之助を一度び墮落させて後にまた浮び上らせ、自分一人は沈んで行くと云ふ心理は如何にも代表的な女性心理であつて、これは見事に描かれてゐるが、

いゝと思ふ男女の足を、この繩で繫ぐと、その二人がたとひ仇敵であらうと、遠く離れて住んでゐようと、つまりは夫婦になるのだよ」と云つたとの話。これは「續幽怪錄」と云ふ書物に出てゐるらしく、私の引用は松村武雄氏編「支那の神話と傳說」に依つたのである。

月下氷人と云ふ言葉は出雲の神樣と云ふ意味で、わが國では古くから知られてゐたが、由來を知つてゐる人々は多くはあるまい。

右の話で「月下」の意味は分つたが、「氷人」の意味はまだ一向に分らない。『幽怪錄』と云ふ書物に出てゐるところを見ても、この異人が一種の幽靈又は怪物の類であることは想像出來る。從つて「氷人」とは恐らくは一種の死神であらう。して見ると、支那では結婚と云ふことを一種の惡緣、宿命と云ふやうな不吉なものとして考へる傾向が多少存することは明かである。その傾向は勿論日本にだつてなくはないし、性が死の本能に關係ある以上當然であるが、併し日本では「袖觸れ合ふも多少の緣」と云ふ諺もある位だから、ましてや、結婚の事となると總て芽出度づくめのやうに意識的には考へる傾向の方が強いやうだ。

こゝまで讀んで來ると、だから日本人は快

たゞ見事でないのは、彼女の菊之助誘惑の場面である。作者はあまりにお德を美しく描き過ぎた。彼女が菊五郎夫人に餘計なお節介（菊之助の藝術への批判や激勵の役割を買つて出たこと）だと叱られてゐる場面は誠に痛快で、あゝ云ふ調子でお德の缺陷をもう少し分析的に剔抉して見せたら、あの作品の文學的、心理學的價値はもつと高いものになつたであらう。あの程度では菊五郎夫人を憎まれ役に仕立てるための効果を擧げたに過ぎないであらう。

ふやけたやうな、いゝ加減にあしらはれたやうな作品を見ることは、我々のやうな分析學徒には何だか却つて氣持が惡くて、その甘美な氣分とやらに陶醉するやうな心理狀態には一向ならないのである。それは分析者の不幸であり天罰だと云ふなら、それもさうかも知れないと、甘んじて承認しておくが、その代り此方は此方で、馬鹿の天國に悠遊してゐる人々の甘い幸福を輕蔑する資格だけは保留しておくものだと云ふことを判然と斷つておく。とは云ふものゝ觀てゐる間は私も十分に打込んで樂しく見てゐられたのだ。

『ブルグ劇場』の分析鑑賞

右の『殘菊物語』を見て後に、この外國映畫を見ると、これはまた如何にもドイツ的で、その長短兩面を端的に示してゐる。併しこれはドイツ映畫として恐らく近來の傑作の一つであらうから、ドイツ藝術の短所よりも長所の方をより多く感ぜしめたことを私は認める。

十九世紀末のキインに歷史と傳統を誇るブルグ劇場がある。その座頭老名優ミッテラーの失戀に關する心理的葛藤が全篇の內容をなしてゐる。

ミッテラーは藝術家に似合はず、極めて謹嚴であつて、プロムターのゼーデル・マイヤー一人を相手に聖優としての生活を送り、群るファンたちのリビドーを拒否し續けて來たが、或る日出入りの洋服屋の娘のレーニ・シンドラーの純なる姿に老境の殘んの情火を燃え立たせられる。ところがレーニには青年俳優としての愛人ヨゼフ・ライナーがあり、彼女はひたすら愛人の出世を念願してゐるが、なか／＼その機會が來ない。或る日、彼女はミッテラーの宅に服を屆けた時、主人の卓子の上に、キイン劇界の勢力者ゼーバッハ男爵夫人からの宴

活で支那人は陰氣だと一概に片付けてしまふ人々もゐるかも知れないが、併し精神病理學的に見ると、共に關係妄想的であることに於いては變りはない。日本の方は躁狂的關係妄想であり、支那の方は鬱病的關係妄想であると云ふことになるであらう。

マゾ變態の國

「若うして廣東に入るべからず」といはれる位、廣東は享樂廢頽の都だ、蘇州灣から行商人が舟航してくるが、お椀船（遊び船）花艇（藝者屋の船）の情緖に、盲妹（故意に盲ひにされた門付女）の哀調に、阿片の誘惑に、氣もうつろになつて、裸になつて歸る者が多いといはれてゐる。

日本の宮津に就いても同じやうなことが云はれ「縞の財布が空になる」と歌はれたものだが、併し日本には「盲妹」と云ふやうなものは、流石になかつたやうに思ふ。高々『朝顏日記』の盲女のエロティシズムを舞臺上で享樂したくらゐのものであらう。それを支那では故意に盲女を拵えてエロティシズムの對象にしてゐるのだから呆れたものだ。殊にその盲女を「盲妹」と呼んでゐるところに、彼等の近親姦願望も仄見えて、日本人にはいや

會への招待狀が置いてあるのを發見して、出來心からふとそれを盜み、ライナーへの招待狀であるかのやうに裝ふて投函する。ライナーは男爵夫人からの思ひがけぬ招待を光榮としてその宅に出入し、夫人との間に一種のエディポス的リビドー關係を生じようとしてゐる。と、その反面にはまたレーニとミッテラーとの間にも同樣なリビドー關係が生じようとしてゐる。ミッテラーは老境の情火に興奮して、レーニに結婚の申込みをしたが、彼女の心はライナーに強く纏綿してゐてミッテラーの方には移りさうにないことを知り絕望する。その戀敵が、藝術の上では自分の後進であり、且つ自分の老境を蹂躪しさうな活氣旺んな青年俳優ライナーであることを知り、ライナーがゼーバッハ夫人との間の根もなき醜聞の餘波を食つてブルグ劇場に出演し得なくなつた事情に絕望して自殺しようとした行ひをたしなめ、頰を打つてその不心得をさとし、それとなく彼とレーニとの會合の機會を作つてやつて、一人淋しく冷たい家に退いて行く、と云ふのが大體の筋である。

その間、『ファウスト』や、『ドン・カルロス』や、ドイツ古典演劇の種々の作品の上演場面を巧みに利用して、劇の筋を進展させ、如何にも面白く詩と現實との交錯をあやなして、心憎いばかりに藝術的雰圍氣を釀成して行く頭のよさには、誠に敬服すべきものがあつた。

云はゞこの作品は、現代の『ファウスト』である。ファウストも、學問にリビドーを昇華するばかりの生活を送つて遂に老境に至り、かつて青年時代にリビドーをなまで生かしておかなかつた後悔の念に堪え難く、惡魔に約束して若返り、リビドー活用の眞道再出發に立向ふのであつた。丁度、そのやうに『ブルグ劇場』の主人公老聖優ミッテラーも、舞臺の上で空しくファウストを演じてゐるばかりが能でないことに氣付いた。それはファウストが學問にリビドーを昇華させてばかりゐる生活の無意味さに苦悶したのと同じである。その時、レーニは彼の眼前にグレーチェン的の純美の魅力を具へて立現れた。ファウストにはグレーチェンをめぐる戀敵はなかつたが、ミッテラーにはこれがあつた。それはライナーであつた。ライナーは云はゞ、若返つた後のファウストであつた。故に、若返つたファウストは、詩の中では、ファウストの分身であるが、現實生活では、ライナーはミッテラーの戀敵であつた。現實的には戀敵ではあるが、心理的には分身であるから、ミッテラーは容易にライナーに同一

な感じが先に立つ。盲女のエロティシズムの心理は去勢せられたものゝ魅力で、これだけ支那の男はマゾヒストだと云ふことを證明してゐる。纏足もまた同じ意味から發達したものであらう。

斷種家の苦悶

「所謂『斷種法』を檢討する民族優生制度專門委員會で內村、三宅、今泉、小野各帝大敎授らそれぞれの權威を集めて議事に入らうとしたとたんに「どうも斷種といふ言葉は響きが強すぎて國民に無用な不安をあたへるから改稱しては」との提言に、三宅委員長以下各敎授連なるほどと熟思熟考した結果、「優生手術」「不妊手術」「優生避妊」「優生不妊」等と出たがいづれも一長一短でまとまらないうちに更に「民族優生」を「國民優生」に改稱したらとの提言あり、結局第一回は中味より言葉漁りに終始して散會したが、傍聽してゐたお役人たち、さすがは學者達だと感嘆してゐた」

都新聞十一月十一日、政府欄に右のやうな記事が出てゐた。私はこれを讀んで失禮ながら先輩諸氏の常識を疑ふと共に、何が氏等をしてこのやうに非常識にしたかを考へること

化することが出來た、彼が自殺しそこなつたライナーの頬を輕打する心理は何と哀れにもまたをかしいことではないであらうか。それは意識的には自殺の不心得を戒める懲らしめの輕打であるが、無意識的には彼の得戀への失戀者からの嫉妬に基く復讐である。かう云ふ微妙な心理描寫をして見せることが、西洋の演出者の優れてゐる點で、これ等はわが國の映畫關係者たちの是非とも學ばねばならない點であると思ふ。

前に云つたやうに、全體の構成が如何にも微妙でありながら而もがつちりしてゐて、如何にも演出者のドイツ的な頭のよさを思はせるが、その代り如何にもドイツ的な融通の利かなさも感ぜしめられる。殊に我々に感ぜられることは、ドイツはどこまで行つても『ファウスト』を卒業することが出來ないのではないであらうかと云ふことである。この映畫の心理學的內容の中心は、ゲーテの『ファウスト』第一部、それも、ファウストの書齋の場の獨白に表れた苦悶と同じく、リビドー昇華限度の問題に過ぎないのだ。併しこの問題を捕へて、夢（願望）としての詩（ファウスト）と現實（ミッテラーの私生活）とを交錯させた藝術の妙味は、何としても賞揚せられねばならないであらう。

に興味を持つた。第一、「優生手術」とは何事です？精神病者の斷種が優生に何の直接關係があるかと一般の人々は誤解するだらう。或は氏等自身が學術語と常識語とを妄想的に混用してゐるのでなからうか。このやうに無關係なことを關係あるかの如くに妄想する——と云ふよりは妄想したがつてゐる（氏等が常に患者に向つて命名してゐる關係妄想を氏等自身が實行して御座る！）ところに、氏等の劣等感と罪障感とを豫想せざるを得ない。何故の劣等感ぞや。何故の罪障感ぞや。それは氏等自身の自己分析に一任しておく方が悧巧なやうだ。妄言多謝。（完）

新刊紹介 『近代の結婚』 ステーケル原著・堀秀彥譯

原著者ステーケルはウインの分析者で、フロイドの高弟であることは、本誌讀者諸君の御存知のところであらうと思ふ。ステーケルの文章はフロイドの文章のやうに難解ではない。如何にも平易で、通俗的ではあるが、別に間違つたことは云つてない。

全篇を十七章に分つて、近代結婚のあらゆる樣相、特徵、問題を論じてゐる。本誌前號は「結婚心理」研究號であつたが、それと照し合はせて並讀したならば得るところは極めて大であらう。

譯者堀氏はどう云ふ人か知らないが、譯文は相當よくこなれてゐる。それに本文中の種々の人名や件名や語彙について一々註釋が章末に與へてあるので、誠に親切な譯書である。譯者は卷末に「あとがき」を加へ、その中で「ステーケルの著者は結婚論として決して完全なものとは云へない。それに精神分析と云ふ魔術的な科學にたより過ぎてゐる。私自身これほど精神分析が絕大な威力をもつものだとは信じてゐない。この書の一番大きな價値は、結婚のあらゆる問題をティピカルな樣式で呈出しやうとした點に在る。そして同時に御說教をしようとしない點に在る。」云々と述べてゐるが、分析を實際に適用して見た經驗のない人が、一册や二册の本を讀んだり譯したりして見た程度では「威力を信じてゐない」と云ふのは至極尤な話で、そんなに簡單に威力を信じられては分析學の方で迷惑をする。一體「完全な」結婚論などゝ云ふ本來ありもしないものを求めてゐるところに、氏の頭が如何になほ舊時代の迷妄に囚はれてゐるかの、自らなる告白がある。人間はもつと〳〵苦み、疑ひ、悶え、勉强して、遂に分析に救はれ、或はそれに依つて人々を救ひ得て、始めて斯學の威力を承認するやうになるのだ。何れにせよ、斯學文献のまた一つ殖えたことは、我等の喜びとするところだ。譯者及び發行者の勞を多とする。（實業之日本社發行、定價一圓三〇錢。）

精神分析學入門講話（十一）

ジグムント・フロイド（K・O・生譯）

さてこれから、我々が永い間お預けにしてゐた主要問題に立向ふことが出來ることになつた。その主要問題とは、別の意向の障碍として異常な現れ方をする種々の意向とは何かと云ふことである。勿論、その意向は種々雜多であるが、併し我々はそこに共通點を發見して見たいと思ふ。これに關する一群の實例を調査して見ると、それ等は直ちに三種に分類せられることが分つて來る。第一類に屬するのは、障碍的傾向が話者自身によく分つてをり、而も云ひ損ひの直前に彼がそれを感じてゐる如き諸々の場合である。例へば、"Vorschwein"と云ふ口滑りの如き、話者自身は「卑猥」との批判を當面の事實に適當だと認めてゐたばかりでなく、後にその通りの言葉で批評しようとの意圖を有したことを認めてゐるのである。第二類に屬する場合は、障碍的傾向が話者自身の心に存してゐたことを本人は同樣に承認するが、併し云ひ損ひの直前にその傾向が活動してゐたとは知らなかつた場合である。彼はそこで云ひ損ひに就いての我等の解釋を容認するが、併し多少面喰つたやうな顏をするのである。この種の實例は他種の行り損ひから擧げる方が、云ひ損ひから擧げるよりは容易なやうである。第三群に於いては、障碍的意圖の解釋は話者自身に依つて猛烈に拒否せられる。彼はそのやうな意向が云ひ損ひの前に彼の心内に動いてゐたと云ふことを抗言するのみならず、抑々そんな考へなど彼にあるべき筈がないと主張するのである。かの「嘔吐」の例を想起して御覽なさい、私が話者の障碍的意向を發見したゝめに彼は隨分失禮な態度でそれをはねつけたのであつた。私はこれ等の場合の解釋に於いて未だ萬人の承認を期待するものでないことは諸君御存知の通りである。それ故に私はかの卓上演説者の反擊などは一向意に介しない、依然自分の解釋を固執するものであるが、併し、諸君としてはかの話者の抗辯に押されて、さう云ふ行り損ひには解釋を下すことを斷念して、分析派以前の純生理的解釋に從つておくのが妥當だと考へてゐられるであらうと私は思ふのである。何が諸君を顰蹙させるかを、私は考へる

ことが出來る。話者自身には思ひも寄らない意向が彼の內に存して居てそれが表現せられ、さうしてそれを私が證據に依つて推定することが出來ると云ふ豫想が私の解釋の中に含まれてゐる。そのやうな奇拔な、そのやうな結果重大な豫想は、どうかと諸君は思はれるのである。それは私にもよく分る、さうしてその限りに於いて尤だと思ふ。併しながら、我々は次の一點は確かであると思ふ。――澤山の實例から行り損ひに關して我々が固めた考へ方を徹底的に進めて見ようと思ふならば、以上の奇妙な假定を容認する外はないのである。もしそれを諸君が出來ないならば、行り損ひの理解は只今の不完全なまゝで再び放棄しなければならないのである。

我々はなほ右の三類を一致させるもの、云ひ損ひの三つの機制に共通するものに就いて、なほ暫く論じ續けて行きたい。幸にして、その共通點は誰の目にもすぐにつく。第一及び第二類に於いては、障碍的傾向は話者自身の承認するところである。第一類に就いてなほ附言しておくべきは、その傾向が云ひ損ひの直前に感ぜられてゐたと云ふことである。併し兩方の場合に於いて、その傾向は抑壓せられてゐるのである。話者はその傾向を話の中に登さないやうにしようと決心してゐたのであるが、云ひ損ひは出て來てしまつたのである。つまり、その時抑壓せられてゐた傾向は彼の意志に反して現はれ、彼の容認した表現を變更し、その中に混入し、或は正にその代りになつて出て來たのである。これがつまり云ひ損ひの機制である。

私の見地から、やはり我等の第三類に於ける過程をも、右に述べた機制に最も完全に一致させることが出來るのである。私としてはこれ等三類は、一つの意向が種々程度の違つた抑壓を受けてゐるために區別が生じてゐるのだと考へればよいのである。第一類に於いては、障碍的意向は現存し、話者の表現の前に氣付かれてゐるのである。その時甫めて抑へようと思つたのであるが、云ひ損ひとなつて裏切り出て來たのである。第二類に於いては、抑壓はもつと遠く遡る。意向は話しの表現の前に旣にも早氣付かれてはゐない。併しそのために何ら抑制せられず、云ひ損ひの原因として參與してゐることは注意すべきである。併し這般の消息に依つて、第三類の過程の解釋は我々にとつて容易になつたのである。行り損ひに於いてはやはりなほ一つの傾向が現はれ得るものであり、それは相當以前から、多分遙か以前から、抑壓せられてあり、氣付かれず、從つて話者自身に依つて直ちに否認せられるものだと云ふことを、私は敢て豫想するものである。併し第三類の問題は姑く問はぬことにしてもよい。他の場合を具さに觀察して御覽なさい。諸君は、何事かを云はうとする現在の意圖の抑壓は云ひ損ひの不可缺の條件であると云ふ結論に到達せざるを得ないのである。

今や我々は、行り損ひの理解に於いて更に一段の進展を示したことを主張し得るのである。行り損ひは心理的行爲であ

つて、そこに我々は意味と意圖とを認識し得るのみならず、二つの相異る意圖の葛藤から生ずることを認識し得るのみならず、なほ更に、一方の意向が實現せられるに就いて多少の差控へを經驗し、そのために他方の意向の障碍と云ふ形でそれ自身を表現しなければならなかつたと云ふことをも知るのである。その意向が他方の障碍となり得るためには、その前に自ら障碍せられなければならないのである。

以上で以て、我々が行り損ひと名付ける現象を完全に説明したことには、勿論まだならないのである。次から次へと問題が生じ來ることを我々は直ちに見るのである。さうして我々が益々理解を進めれば進めるほど、愈々新しい問題が更に生じて來ることを感ずるのである。例へば我々は、何故に行り損ひはもつと簡單に出ないのであらうかと尋ねることが出來る。或る傾向を實現する代りに抑制する意圖が存するならば、さう云ふ傾向が全然出て來ないやうに抑制がうまく行きさうなものではないか。或は、抑壓せられた傾向が完全に出て來るやうに抑制が失敗しさうなものではないかと。行り損ひは、併しながら、妥協的行爲であつて、それは双方の意圖に對して半ば成功、半ば失敗を意味してゐるのである。危險を被つてゐる傾向は全的に抑壓せられることもないし、さりとて全部無傷で通ると云ふこともない。尤も、個々の場合でさう云ふ例もないことはないが……。そのやうな干渉又は妥協の結果が生ずるための特別の條件が存在してゐるに相違ないと云ふことは考へられるが、併しそれ等の條件が如何なる性質のものかと云ふことは殆ど見當がつかない。この我々に見當のつかない事情が、行り損ひを更に深く研究することによつて發見せられ得ると云ふことは、これまた私の信じないところだ。さしづめ必要なのは、精神生活のなほ別の仄暗い分野を探索して見ることであらう。第一に、我々はそこで種々の相似點を發見するので、それに勇氣を得て、行り損ひを更に深く説明するために必要なかの諸々の假定を立てることが出來るやうになるのだ。なほもう一つある。我々は分析上常々些細な顯現を重大視して、それを調査することに骨折つて來たが、これにはやはりそれとしての危險が伴つてゐるわけである。世に結合妄想と名付ける精神病がある。それは些細な顯現を大層大袈裟に考へる病氣である。だから私もそのやうな根柢の上に立てられた結論を飽迄も正しいと頑張る氣は固よりないのだ。そのやうな危險を避けるためには、我々としてはたゞ觀察の根據を擴大し、精神生活の樣々の分野からの類似の印象を繰返して行くより外はないのだ。

こゝらで行り損ひの分析は一先づ打切ることにしよう。併しなほ一つ諸君に警告しておきたいことがある。それは我々が行り損ひの現象を扱つたそのやり方を模範として銘記しておいて頂きたいことである。諸君はこの實例に就いて見て、我等の心理學の意圖の何であるかを知ることが出來るであらう。我々は現象を記述したり分類したりするのみならず、心

内に於ける種々な力の格鬪の標徵として、目的のために互に協力したり反撃したりする諸傾向の顯現として、考へようと欲するのである。我々は精神現象を動的に把握せんと努めるものである。知覺せられたる現象は、我々の考へ方に於いては、右のやうに豫想せられたる諸傾向から來るものとして認めざるを得ないのである。

さう云ふ次第で、我々はもう行り損ひに就いてはこれ以上深入りするつもりはないが、併し我々は廣漠たるこの分野をも一度驅け拔けて行つて見ようと思ふ。さうすると、我々は再び舊知に繞り會ふこともあらうし、また二三の新顏に直面することもあらう。その間本講の始めに擧げた云ひ損ひの三種の分類に從つておくことにする。それと共に、別の分類たる書き損ひ、讀み損ひ、聞き損ひ、忘却（これには對象別によつて、固有名、外國語、計畫、印象などの忘却がある）などの別もあり、その他思ひ違ひ、置忘れ、紛失などがある。間違ひは、我々の考へてゐる限りでは、或るものは忘却に屬し、或るものは思ひ違ひに屬する。

云ひ損ひに就いては既に相當突込んで論じたつもりであるが、なほ二三附け加へておきたいことがある。云ひ損ひには、やゝ面白い、一寸した本能感情的の現象がからまつてゐる。何人も自ら好んで云ひ損ひをやつてゐるものはない。人々はまた自分自身の云ひ損ひは屢々聽き洩すが、他人の云ひ損ひは決して聽洩さない。云ひ損ひはまた或る意味で感染的である。云ひ損ひの話をする時には、とかく自分でも云ひ損ひをやり勝ちなものだ。非常に些細な形式の云ひ損ひで、そこに匿されてゐる心理過程に關して特殊の說明を加へることが出來ない場合にでも、その動機を看破することは敢て困難ではない。例へば、何人かが或る長母音を、その言葉に潛んでゐる障碍的な動機のために短く發音したとすれば、その直後に來る短母音を長く引張ることに依つて前の償ひにしようとして云ひ損ひをする。同じやうに、その人が二重母音を、例へば eu（オイ）又は oi（オイ）を ei（アイ）と不純に發音したとすれば、彼はその次の ei を eu 又は oi と變へることに依つて、埋合せをしようとする。かう云ふ態度の裏面には、話手たる自分が母國語に無頓着だと相手に思はれては困るとの顧慮が働いてゐると思はれる。卽ち、第二の埋合せ的な歪みは、第一の誤りに就いて聽者に注意を與へ、話者自身もそれに氣付いてゐないのではないと云ふことを知らせようとの意圖を有してゐるのである。最も屢々起る、最も單純な、最も些細な、云ひ損ひの場合は、思ひがけない話の部分に現はれる壓縮と前出とである。長い文章に於いて云ひ損ひをする場合には、例へば、意圖せられたる話の志向の最後の言葉を前の方へ持ち出すと云ふ風である。このやうな云ひ損ひは、その文句を早く云つてしまひたいとの何らかの焦燥の印象を與へ、その文章の報告するところ又は話全體に對して、一般に何かの抵抗を生じてゐるのである。これ等はつまり、精神分析的な考へ方と普通の生理學

的な考へ方との區別が立ちかねる中間的な實例である。これ等の場合に於いて、話の意向を障碍する傾向の存在を我々は假定するのである。併しその傾向は存在してゐると云ふことが分るだけで、それが何を意圖してゐるかは分らないのである。その傾向のために生じ來る障碍は、その時に何かの音の影響とか聯想の關係とかに從つて、そのために話の意向から注意が逸れたものとして考へることが出來る。併しこのやうな注意の障碍を以てしても、効果的となつた聯想傾向を以てしても、この心理過程の本質を衝くには足りない。この說明は寧ろ、話の意圖を障碍する意向の存在を暗示するのみである。その意向が如何なる性質のものであるかは、只今のところその効果からばかりは判知することは出來ない。云ひ損ひのもつと美事に出來てゐるあらゆる場合にはそれが可能であるが……。（未完）

精神分析學語彙（四一）

一、不安の夢（Angsttraum）——不安の夢は問題としては、神經症心理學に屬してゐる。不安が夢と結びついて現はれるのは、それを抑壓する檢閲よりも夢の中に充足せられむとする願望の方が强力である場合に於いてゞある。檢閲はその時、夢の願望に依つて克服せられてゐるのであつて、その事は願望の屢々露骨な表現に依つて分るのである。併しながら自我は、そのやうな激しい願望の侵入に對して已れを防禦すべき道を知らない。その道とはたゞ不安を增大させるか眼を醒ますか、二つより外に方法がない。不安の夢はそれ故に、夢の願望充足說に矛盾するものではないのだ。

心臟病、肺病、並びに偶然的な呼吸困難に於いて、屢々不安の夢は生ずる。フロイドの意見によれば、このやうに肉體的原因による不安の發生は、力强く抑壓せられてゐる願望を夢に於いて充足させるために第二次的に利用せられる、と云ふのである。空氣の缺乏から生ずる不安は、このやうに、抑壓せられてゐた願望を夢に於いて充足させる手助けをするのである。

外傷性神經症者の見る夢に於いては、その外傷を生ぜしめた經驗は、まざまざとした不安感情の中に再現せられるのである。この種の不安の夢は、何ら無意識的願望の充足を現はしてはゐない。心理的裝置が不用意の狀態にある時に突如として襲ひ來つた心的外傷を、不安準備狀態の下に於いて再經驗し、その再經驗に依つてその外傷の影響を克服しようとする努力から、そのやうな不安の夢は生ずるのである。（反復强迫症の條參照。）

一、アニマティスムス（Animatismus）——アニミスムス（萬象有靈觀）の前階である。アニマティスムスは我等の身邊の萬象を有靈のものと觀じてはゐるが、その靈が何かの形體を具へてゐるとは考へてゐない時期である。アニマティスムスに於いては無制限な「念慮の全能觀」が支配してゐる。外界に感化を及ぼす技巧を魔術と名付けてゐるが、魔術はつまりこのアニマティスムス的な考へ方に基いてゐるのである。

一、萬象有靈觀、アニミスムス（Animismus）——これは我等に知られてゐる大抵の原始民族の間に行き亙つてゐる著しい自然觀、世界觀である。即ち、世界は無數の善靈、惡靈に充ち滿ちてゐる

と云ふ考へである。これ等の靈は動物や植物に宿つてゐるのみならず、自然の無生的な部分にも宿つてゐて、それに依つて自然現象は動いてゐると考へられてゐるのである。周圍にある自然現象に感化を及ぼすためには、靈どもに對して効果のある技巧(魔術)が用ゐられる。この技巧は魔法を用ゐることに依つて靈どもを、從つてまた自然の出來事を感化しようと努めるのである。この感化の技術は、フロイドに依れば、アニミスムスが生ずる實際的原因の一つである。原始人が自分等の全能感と外界に對する無力感との間の緊張はこの魔術に依つて懸橋せられるのである。併しながら同時にまた、善靈惡靈どもは、原始人たち自身の感情の亢奮の投出であつて、靈を恐れると云ふことは、つまり自分等自身の精神的亢奮に對していろいろと不安を抱いてゐることに外ならないのである。外界には全能的影響力があると妄信してゐるアニミスムスは、その外界の有力な力や靈を承認してゐることの中に、宗教的世界像の前階を包含してゐるわけになる。從つてその世界像の中の神々には既に全能性が賦與せられてあることになる。

アニミスムス的な考へ方はまた、外界を廣く認めることが出來るやうになつた早期幼兒の發展段階中に常に必ず現れるものである。併し幼兒のナルチスムスはなほ極めて旺んであるから、單なる念慮や願望や魔術に依つて外界に影響を及ぼすことが出來ると信じてゐる。吾人は精神發達のこの段階をアニミスムス段階と名付けるのである。この段階の殘滓は保存せられ、やがて迷信となり、更に成人の神經症的な、殊に强迫神經症的な症候となつて重大な役割を果すやうになるのである。

一、**素質**(Anlage, constitution)——は個人の内に遺傳的に豫備的に與へられてをり、やがてそれが一定の發展を遂げ、又は一定の行動もしくは病理的現象の擡頭へと導くものを云ふのである。素質的に與へられてゐるものが顯現し來るためには、一般に或る外的原因が必要である。素質と外的原因との關係は協同關係である。素質の側からと外的原因の側からと、各々どれくらゐの量を持合つて窮極の現象が出來するかと云ふことは、補償合成(Ergänzungsreihe)の關係に依るのである。(未完)

前號正誤表

頁	行	誤	正
五	九	a case	the cases
〃	一〇	this days	these days
〃	二〇	doiny	doing
二六	二二	受ける	授ける
三二	一二	不幸を	不幸の
四六	六	ゐる	ゐる
八一下	二五	二種にな	二種に分
附錄二一	四	阿片華	亞鉛華
表紙四	七	Keni	Kenji
〃	一六	Seiye	Seiya

内外彙報

メニンガーのフロイド論

（序）メニンガー博士（Dr. K. A. Menninger）は米國カンサスに於いて精神病及び神經症の診療所を經營し、且つその診療所報を發行して常に本研究所に寄贈せられてゐることは、每々本誌上に於ける紹介に依つて讀者諸氏の御承知のところと思ふ。このフロイド論は、フロイド長逝の追悼論文として米紙「ネーション」十月七日號に寄稿せられたもので、それが同博士の「診療所報」誌上に轉載せられてあつたのからこゝに譯出した次第である、內容は御覽の通り極めて面白いものである。（記者）

×

一九三九年九月二十三日から四日にかけての深夜に、ジグムント・フロイドはロンドンに於いて、八十四歲の高齡を以て死んだ。十六年來彼が癌腫のために如何に苦み、手術に次ぐに手術を以てし、不斷の執拗なる苦痛は、最近數ヶ月に於いては外科醫術的又は電氣療法的救治を以てしては及び難い程度に達してゐたことを知つてゐた者等にとつては、彼の死は寧ろ大きな救ひでさへもあつたほどである。その苦しい間中、彼が自らとり得た唯一の醫術的對策は時々アスピリンを服用することだけであつたが、この事は彼が如何に豪氣な稟質の人であつたかを雄辯に、併し偶然的に、證據立てゝゐるのである。彼の生涯の最後の數時間內に於いてのみ、如何なるモルヒネも與へられた。そのやうに信じ難いほどの苦痛の上に、亡命の悲哀と多くの親友の喪失とが加はつてゐたに拘らず、その死の數週前に至るまで彼はなほもその患者を診ることを怠らず、その原稿を書き續けてゐたのである。

このやうに不屈の精神が頑強なる生理過程に對して敢然たる敗戰を繼續して行く壯大さは、同時に彼の生涯の事業の主題と勇敢さとを反映してゐるのである。彼の最大の思想は生きんとする意志と死せんとする意志、卽ち生の力と死の力との間に本能的葛藤の思想であつた。彼の壯年期に於いては、實驗的興味と診療的醫學（神經症學）との方面に於いて華々しく豐かな業績を殘し、これ等兩分野に於いて偉大にして永遠の發見を爲した。併しながら彼はこれを以て滿足せず、一層根本的な要素に興味を持ち、病氣と健康との別のみならず、症候と行動との別のみならず、苦痛と悲哀との別をも決定するものを探知せんとしたのである。かくて壯年期以後の三十年間に於いて、彼が後年に於いて生命本能と名付けたところのものの現象を研究した。この本能の最も直接的な顯現は愛と反復への衝動であつた。そのために彼は多くの人々から批難と嘲笑とを浴びた。彼等は僞善と上品がりと好色のために、不幸なる生物的必要の汚らしい、不合理な事件を惹起することによつて性を何とか處置してゐるのであつた。フロイド

がその疲れることなき忍耐とひるむことなき勇氣との結果として、その見解を學界の指導者たちに容認せられた時に、彼はこの生命本能に對して抗爭する惡意ある力を考慮する方に立向つた。人間は 人間自身の最惡の敵であると、彼は云つた。生きむとする本能、生かさしめむとする本能、愛の本能、創造の本能などに不斷に抗爭してゐるものはこれまた一つの本能であつて、これは非有機的冷感鈍感へと還元することがその目的であるのだ。この本能は死の方に向ひ、そこからして我等の憎惡、我等の惡意、我等の苦難、我等の病氣、我等の破滅は生ずるのである、憎惡に關するこの考へ方は、性愛に關する彼の考へ方が以前に惹起したのと同じ批難と嘲罵とを捲起した。現に その考へ方の恐るべき確證はドイツの「第三帝國」の活動として あれほど顯著に現れつゝあるに拘らず……。

天才の死に際してその生涯を論ずることは いさゝか僣上の沙汰である。フロイドは、その人に就いて思ひ付き的な數語で片付けたり、二三の讃辭や批評で濟ませたり、出來るやうな人物ではない。フロイドは普通の人物ではなく、また普通の學者でもなかつた。彼と比較し得る如き何人かを發見しようとしてもそれは困難な程、彼は殆ど獨自の個性であつた。心理學の分野に於いて、未だ彼の身長の部分にまでも達したものは嘗てなかつた。醫學者の間に於いては、その輝かしさに於いて、その獨創力に於いて、その醫術上の影響力に於いて、未だ何人も彼に比肩し得る域に達したものはなかつた。恐らくは 學問の世界に於ける如何なる個人も、フロイドのやうにその生前に、自分の發見に依つて全世界の思想が深刻なる改變を被つたのを 見たものはなかつた。ガリレオ、ダルトン、ラヴアジエ、ダーヴイン、並びにその他の人々はその發見を貢獻することに依つて 人類の思想と生活とに大變化を及ぼしたが、併しその効果の現れたのは徐々たる漸次的浸透によつてゞあつた。何となれば、醫學や心理學、社會學のみならず、文學、美術、人類學、教育學、並びに一般の言葉さへもフロイドの發見の影響を示し、而も正しい用語に於いてそれ等を示してゐる。

フロイドが爲した一切は、一つの單純な發見から由來してゐる。その發見は彼以前の多くの人々が有してゐた知識に基くものであつた。その知識と云ふは、人間生活の表面的顯現の 背後により深い感情と動機と目的とがあり、それを本人は他人に對してのみならず自分自身に對してさへも匿してゐるのだと云ふことである。フロイドは この匿れたるものを確認し引出す方法を發見し、この方法を彼は精神分析法と名付けた。この方法に依つて、彼並びに他の多くの人々は協力して、人間性の無意識過程に就いての知識の尨然たる體系を集積し、この知識の全體をまた精神分析學と名付けた。訓練ある醫師が これを使用することによりその患者の苦惱と不幸とを救ひ また更に性格研究を愈々進めてゐるのは、前者の意味に於ける精神分析であり、文學、科學、哲學の方向に八十度の大轉回をなさしめたのは、後者の意味に於ける精神分析である。

フロイドがアンビバレンツ（相反並存性）の概念を技術的に、從つてまた有効に理解するやうになつたのは、彼の方法論的發見の結果からであつた。よしんば、この術語は 實は彼自身の創成に係るものではないにしても……。生の背後に死のある如く、公言せられたる愛の背後には常に憎惡が潜み、公言せられたる憎惡の背後には常に何らかの愛が存することを 彼は理解することが出來るやうになり、また他の人々をしてしかく 理解せしめるやうになつたのである。人間の心と云ふものは不愉快な眞實を承認することに 如何に頑固に抵抗する

ものであるかと云ふことを、彼は他の如何なる人々よりも明白に知つたのであつた。そのために彼は世人が彼の理論に對して如何に嘲笑し、誤解し、歪曲し、苛酷な、非科學的な非難を浴せかけて來ても、彼はそれを大目に見てゐることが出來たのであつた。世人の自得的、感情を輕減するやうな一切の科學的發見は怨恨と不信とを買ふにきまつてゐるのだと云ふことを彼は自分自身及びその門弟等に說き教へた。それ故に、彼がもし生きてゐたならば、彼の生涯に就いて同時代者たちが何とか相反並存的な批評を下したとしても、彼は一向平氣な顏をしてゐるであらう。例へば『ニウヨーク・タイムズ』のやうな大新聞が一九三九年九月廿五日の社說に於いて彼の死を報告し、彼への甚だしい誤解を曝露し、「彼の大層な自己滿足と彼の生得の知的傲慢」などゝ云ひ、或は「精神病學者たちはなほ彼を非科學的と云つてゐる」などゝとんでもない虛報を撒き散らし、或は彼は「現代の平穩を最も効果的に擾亂した人間だ」などと云つてゐるけれども、そんなことで彼は驚いたり面喰つたりはしないであらう。

フロイドのアメリカに對する感情は固より香しいものではなかつた。彼の最も親しい友達は多くはアメリカ人であつたが、その人々も何故に彼がアメリカに對してさう云ふ偏見を持つてゐるかは理解することが出來なかつた。またその偏見を變へることも出來なかつた。「沒思想的樂天主義と淺薄なる活動慾」とがアメリカ人の特徵だと彼は考へてゐた。彼はアメリカに於いて彼の理論と技法とが人氣のあるのは心得ぬ次第だと考へてゐた。彼の理論が今日最もよく知られ、また最も廣く受容せられてゐるのはアメリカに於いてゞあると云ふことは甚だ皮肉なるパラドクスである。一般人の間に於いても醫學者の間に於いても彼の說はアメリカ人の廣く容認するところである。

ジグムント・フロイドは永年の間、他人を死から避けしめようと勉めて來たが、遂に自らその死に屈してしまつた。彼は他人の偏見とコムプレクスとを剪除するためにその生涯を費したが、彼自らそれ等から脫することは出來なかつた。併しながらその故にとて彼自身の偉大さは少しも削減せられることはない。實際、公平に云つて、彼は大部分の人間よりは遙に少い偏見とコムプレクスとを持つてゐた。丁度、大抵の人間よりは遙に長い生涯を把握してゐた如く……。言葉に盡し難きは、フロイドの人格のえも云はれぬ溫雅さ、優しさ、並びに本質的な甘美さである。何となれば、彼は眞に科學者らしい資質を具へてゐたからだ。さうして彼は一瞬間と雖も自分が生々流轉する現象の一觀察者だと云ふことを忘れてはゐなかつた。彼の銳い眼と偉大な心とのために、彼の觀察は獨自の光輝を放つてゐる。これ人類永遠の福祉である。(以上)(七二頁の寫眞は中央フロイド教授左はその愛孃アナ・フロイド女史、右はジョーンズ博士、米誌週刊タイムズに出たもの。わが國のカレント・オヴ・ザ・ワールド誌に轉載せられたるを同誌より銅版を借用こゝに紹介。同誌の好意を謝す。)

『精神肉體醫學』第三號

一、神經性食慾不進の精神病學的觀察(リンカーン・ラーマン他二氏)
一、慢性皮膚病と特異體質(アッカーマン)
一、本能感情の肉體的表現に對する抑壓の効果の調査法(アイゼンブード)
一、犬及び猫に於ける條件的神經症(ドヲルキン)
一、精神分裂症に於ける自律的機能の問題(ライニゴールド)

一、精神分裂症と甲狀腺異常（ルイス・コーエン）
一、精神分裂症患者に對するインシュリン・ショックの經過（ウォチェル）……一、その他、雜報——

『下痢の心理學的研究』

「精神肉體醫學」誌の發行所であるところの米國ワシントンの「人類學及び心理學國民調査會」の「神經症行動問題委員會」から發行せられてゐる「精神肉體醫學叢書」の第一册として「下痢（結腸の炎症障碍）の心理學的研究が發行せられた。著者はホワイト、コッブ、ジョーンスの三博士である。精神分析的研究法を十分に採り入れられてゐることは申すまでもない。本研究所に二部あるから一部はどなたかにお讓りしてもよろしい。御希望の方は往復ハガキにて申込まれたし。（定價三圓送料十四錢）

『メニンガー診療所報』第六册

一、ジグムント・フロイド（本欄冒頭の譯稿原文）メニンガー。
一、本能感情の葛藤に直接關聯する心臟の間歇的特異收縮（グンテル及メニンガー）
一、精神の分裂と統一（エドワルド・ワイス）
一、半急性分裂症の持久的取扱法（ハンフォード及びオーテン）
一、三九年度同誌編目錄——

國內關係時事

一、『フロイド以後』杉田直樹稿「知性」十一月號。
▼『ウィンザー公の精神分析』高橋鐵——『科學知識』十一月號、
▼『分析療法に對する陰性反應』山村道雄稿『治療學雜誌』六月號。
▼『古代の血』（創作）高橋鐵作——『オール讀物』新年號所載。アイヌ族と大和民族との闘爭を背景とし、戀愛問題を取扱ひ、作者自身の自己分析を寓したるものと云ふ。
▼大槻憲二文筆近業一束——
一、「强迫觀念と强迫行爲」——「人生創造」十一月號。
一、「クレチメル性格學批判」——同誌十二月號。
一、「フロイド博士の生涯」——「公論」十一月號。
一、「フロイドの人物と思想」——「日本評論」十一月號。
一、「フロイド博士」——「科學知識」十一月號。
一、「フロイド博士と佛教」——「眞理」同月號。
一、「繪畫に與へたフロイドの影響」——「アトリエ」同月號。
一、「野球場心理學」——「早大新聞」十一月中。
一、「ムッソリーニの精神分析」——「科學知識」十二月號。
一、「支那人と英語と東亞新文化」——「カレント」新年號。
▼美術學校內仲々會のために大槻氏は十二月十九日夜八重洲園にて「夢と映畫と繪畫」の題下にて講演せられた。
▼本誌前々號（正誌）及び前號（册子）內容に關しては廣告欄を參照ありたい。

本研究所研究會

十月例會は十六日夜、萬世橋畔の例月の會場で催された。食前、大槻氏は心理小說としての「土」に就いて分析的鑑賞談を試みられた。その趣旨は多少敷衍せられて、本誌前號の第三論文となつてゐる。食後、倉橋久雄氏は「日本映畫に於ける家族主義」と題して、日本

の映畫の主題が大部分家族生活をのみ取上げて、それから一歩も出ずまた出ることを恐れてゐるかのやうな感じがあり、宛も器に豆を容れてガラ〳〵振蕩してゐるやうな風で、いつまで經つても埒は明かず、そのために人間は生長しないと云ふ意味の話で、非常に面白い感想であつたが、そのくせ氏は日本の家族主義を讃美する方に傾いてゐるやうにも思はれて何となく判然しないところがあつた。それに續いて、長崎文治も日本の家族主義を是認する意味の說を述べられたが、道德的見地と心理學的見地から論ずるのでは同じ意見の中にも多大の相違があるとて、大槻氏は家族主義の缺陷を擧げる方に向はれた。田中虎男氏や高橋鐵氏も日本人がスパイのトリックにかゝり易いと云ふ實例を擧げて家族主義に疑義を挾まれた。論議はその種の問題に終始して、廣く東洋文化心理に亙る餘地がなかつた。

出席者は右言及諸氏の他に長尾忠、藤田由美、長崎靜枝、山口滋、小林一、塚崎茂明、大場巖、大槻岐美の諸氏であつた。なほ宮田齊、大久保眞太郎、宮崎正路その他の諸氏から缺席挨拶を頂いた。

×

十一月例會は二十日夜、同じ會場にて催された。食前、司會者から、本誌前號「語彙」につき解說があつた。

食後、宮田戊子氏は「藤森成吉の幼兒性と母コムプレクスに就いて」の研究を發表せられ、多大の反響を呼んだ。この論は何れ推敲を經て本誌次號に掲げられる。終つて、諸氏の感想批評などある內に高瀨裕孝氏が常勝寺で見た佛像の眼は母性的の眼であるとの說や、小林一氏が支那で實見せられた兵火の話は人々に感銘を與へた。

久々にて宇都宮から公用のため上京中の餘暇を利用して今夕出席せられた土屋秋實氏は續いて「東洋と西洋の無意識」についての感想を述べられた。これは本號巻頭第二論文として掲げられてゐるから、御味讀を願ひたい。

その次に、大槻氏も本號巻頭論文となつてゐる論旨を述べられたが、結論として日本人が興亜新文化建設の可能性について必ずしも樂觀し得べきでないとの說をなされたに對して倉橋久雄氏はそれは大槻氏の死の本能の强さとエロスの缺如のためならずやとの質問を出されたが、その何の故なるかを理解し得たものは一人もなかつた。倉橋氏が科學的よりも哲學的に傾かんとしつゝある近來の傾向は或る方面の邪道的影響のために非ざるかを警告せられたに對して、倉橋氏は再考を約束せられた。

出席者は右言及諸氏の他に、田中虎男、長尾忠、大場巖、宮崎正路、藤田由美、山口滋、宮田齊、高橋鐵、小杉長平、大槻岐美の諸氏であつた。なほ、塚崎茂明、鈴木正平兩氏から缺席挨拶があつた。

本研究所講習會

十一月例會は六日夜、研究所で催された。本夕は「文明と不滿」の最後の章「餘論」を精讀し討議した。この章は今まで說いて來たところを要約しつゝ云ひ落したところを補つたものである。こゝでは罪惡感の起源を論じてゐる個所が重要なやうに思へた。「本能の力が抑壓を被ると、そのリビドー的部分は症候となり、その攻擊的要素は罪惡感となる」と云つてゐるところは示唆的であると思ふ。この論文の結論は、エロスと死の本能（愛慾と攻擊慾）との矛盾、葛籐、合成などに依つて文明の不幸も幸福も決定せられるのであるから、今後の世界がこの兩本能を如何に處置するかゞ、人類の幸不幸の岐れ道だと云ふにあるのである。

出席者は高橋、大場、倉橋、宮崎、小林、塚崎、大槻夫妻諸氏の他に、高木統他郎氏が初出席せられた。

×

十二月例會は、毎年の例に從ひ、忘年と親睦とを兼ね本郷弓町江知勝料理店に於いて催された。

食前、例によりフロイド全集精讀の勉强を怠らなかつた。文明論は前月會を以て終りを告げたので、本月からは第七卷『トーテムとタブー』に移ることになつた。本夕は大槻氏は この書の成立するに至つた經路を大體次のやうに述べ、自ら序文だけを朗讀して終つた。

「分析は個人の生後の經驗及びその抑壓から現在を理解しその病理を是正せんとするものであるが、それだけで説明しきれないものは素質に歸さうとする。素質は個人の偶然と民族的又は 人類的必然とに別れる。個人的偶然とは、個人が運命的に與へられた本能力や才分の事で、これが豫想せられ容認せられなければ、同じ兄弟の先天的相違への理解が不可能となる。民族的又は人類的必然とは、民族や人類の過去の經驗の集積である。この考へ方は遺傳と云ふ考へ方への 批判となる。

このやうにして「トーテムとタブー」は民族的又は 人類的コムプレクスへの探究を目的とするものであつて、それを參考にして個人分析の不備に具へようとするものである。この方法への 示唆となり刺戟となつたものは、フロイドが序文中で告白してゐる通り、ヴントの民族心理學と、カール・ユングの集合無意識説とである。云はゞフロイドはユングの考へ方をフロイド流に、即ち父殺し（トーテム）と母定着（タブー）とを以て説明し直さうとしたものではないであらうか。これは私一個の箇見に過ぎないが」と。

それから牛鍋をつゝき淺酌を交しつゝ 一ヶ年の勉强のあとを顧みて更に來年の勉强を誓ひ合つた。高橋鐵氏は、『オール讀物』新年號に掲げられた大作「古代の血」を提げて出席せられ、自祝の意味にて か果物一籠を會員一同に寄贈せられた。今はこの忘年會は 樂しさ限りなき我等の年中行事の一つとなつた。

出席者は右言及二氏の他に、田中虎男、大場巖、宮崎正路、小林一、塚崎茂明、小野田幸雄、長尾宏、倉橋久雄、山口滋、高木統他郎、大槻岐美、宮田戊子の諸氏であつた。

研究所だより

▼研究會員梅木米吉氏は郷里鶴岡市より歸られ、千葉市稻毛町に居を定められた。

▼愛媛縣特別誌友篠原政雄氏近信の一節。「小生も先般亡父の跡を繼ぎ當地の郵便局長になりました。田舍の局長なんて悠長なものです。それでも多少共部下を使つて行く上には殊に分析學の知識の有力に働くのを痛感し、有難く思つてをります。」云々。

▼北支出征中の野村泰氏近信一節。「こゝ北支の曠野の空にも雁がねが訪れ、鄕愁の便りをそつと囁いて行きます。それにつけても思はれるのは故鄕の秋です。水淸き小川のせゝらぎ、飽くまで淸く高く廣きコバルトの空、五穀の豐穰を聲を限りに奏でる小鳥の囀り、梢に取殘されたる柿の實の折柄の夕陽に映えて冲天に眞紅の光澤を放てるあたり、鋭い聲に百舌鳥の忙しげに啼いてゐるなど、私の胸は思はず躍るのです。研究所の皆樣にも、銃後日本のため、斯學普及のため、日夜御奮闘の由。欣快に堪えません。私も意氣益々軒昂、〇〇勤務の重任に服してゐます。」云々。

▼長谷川誠也氏には風邪のためにさき頃三十年振りで醫藥に親まれたが、今では全く快癒せられた。

相談解答

叱らず育てた不良の子

問――私は五十を過ぎた一老母ですが 子供の事について御相談申上げます。子供は女一人に男二人でそれぞれの成長のみが 私にとつては唯一の樂みでありました。私は幼時不幸にして 繼母育ちで事毎にいぢめぬかれて成長しました。お小遣ひなども なかなか貰へず、たまに呉れたと思ふとまるで乞食にでも呉れるやうに 投げ與へられたものです。その口惜しさ悲さが私の腦裡に深くきざまれて 一日として忘れる事が出來ないので、自分の子供にはそんな思ひはさせたくないと、せがまれるだけ與へて 不自由はさせないやうにしてゐました。主人はそれには不賛成でいつも 子供の教育については衝突をしてゐましたが、いつの間にか二十歳になる次男が不良の群に入り手のつけられぬ子になつて居りました。警察からは 度々呼び出されその都度主人は私を責るのです、お前が子供を不良にしたのだ、俺は知らないといひますので本當に辛いのは私で、幼少には 繼母にいぢめられ、今は主人と子供にいぢめられて居るみじめさ、次男と共に死をさへ考へた事もあります。然しこの頃では いくらか落着きを見せてゐますが、それを機にと主人は傳手のあるのを幸ひに遠國に働かせようと云ひ、その方の準備を進めてゐますが 親許にあつてさへ放埓な子がこの儘肉親のゐない遠國に就職などしては 今より以上の悪者になりはしないかと案ぜられます。本人は希望してゐますが、主人が何か厄拂ひするやうな態度に子供を島流しにするやうで 同意出來ないものを感じ焦慮してゐます愚かなる母をお導き頂き度う存じます。(野村)

(答)――親の因果が子に報いたわけですね。分析を知らない 人のすることはいつもこの通りです。自分が繼親に いぢめられた人はその反動として子供を甘やかすやうになることは自然ではありますが、當然とは申せません。いつも我々が申しますやうに、子供は合理的な叱責と適切な愛情との兩要素を以て育てなければ 健全な人間にはならないのであります。それは原則的に云つて 砂糖と醬油とを以てしなければ 美味な料理は出來ないのと同じであります。適切合理的な叱責が加へてないから、子供の攻撃慾は素直に發達して健全な超自我となつてゐません。健全な超自我のないものは、社會生活に堪えるべき毅然たる人格が確立してゐませんから、自然不良の仲間のやうなグウたらな社會に這入つて行くより外はありません。御主人の 仰言る通り、子供さんを不良にしたのはまづは大部分あなたの責任だと觀念なさらなければなりません。

お子さんとしても自分の不良化を 決して自分で誇るべきこと丶は思つてゐられず、且つその原因が貴女にあることをうすうす感じてゐるのです。だから、遠國に行くことを自分でも進んで考へてゐられるのです。遠國に行くことの決心はつまり母たる貴女から 離れることを意味してゐるのです。母の側で甘やかされてゐたのでは、いつまでも人間が甘くて仕方がないと云ふことを 仄かに直觀してゐるのでせう。ところが、貴女はこの期に及んでまだ子を旅に出すことを肯じた

いのです。徹底的に子供の性根を腐らして了はなければやまない決心なのですね。それがグゥたらな女の病的な母性愛と云ふものです。斷乎、思ひ切つて子供を手離しなさい。それがせめてもの罪亡しです。可愛い子には旅をさせよです。貴女のやうな根性の腐つた女の病的母性愛を甘やかしそれに媚びることを何か無上の教育的善事であるかのやうに妄信してゐる人もゐると云ふことです。が、さう云ふ思想に誤られないやうに願ひます。

度々妻を裏切る夫

問――私達夫婦は結婚して十四年にもなりますが、夫は大學出身にもかゝはらず遊戯事を好み、讀書にしても講談類のみを耽讀する有様ではじめから私とは非常に性格が違つてゐました。所が數年前内密に悪所通ひをしてゐる事がわかりましたので、私は心をこめて之を諫め、彼もまた再びしないと固く誓つたことがありました。然しその後になつても一向行ひが改まらぬことがわかり、ほと〲情なくなつて一時は別れようかとさへ思ひましたが、夫は又々涙を流して自分の非を悔ひ、之からは絶對にせぬと誓ひましたので、潔よく夫の言葉を信じて、それから數年は平和に過ごしてまゐりました。然るに此頃になり其後も實は内密で同じ事を繰返してゐる事が判明して來ました。夫は元々氣の弱い優しい人間で、女房第一主義の人とも見られ、他人からは品行方正との評判を受けてゐるらしいのです。私は夫に裏のある事を知ると同時にその心を死ぬ程憎まざるを得ません。今は私に殘されたものは、夫への冷笑のみで私の心は最後に來てゐます。別居を考へてゐます。絶對に許せぬ怒りと子供を抱きながら如何にせんと涙の毎日を送つてゐます。こんなに欺され續ける妻も世に多い事と思ひます、何卒御批判御教示を賜はりたく存じます。(京城、志津子)

答――誠にお氣の毒な事情で、貴女の御心境察するに餘りがあります。御主人は大學出であるに拘らず低級な讀書しか出來ず、それから貴女に叱られて「涙を流して自分の非を悔い」たりしてゐるところを見ると、如何にもリビドー昇華能力に乏しく、且つ幼兒的な人で、貴女を全く母代理にしてゐる人であることが明かに察せられます。從つて、第三者から見れば、そこに母子關係的なものが感ぜられますので「女房第一主義」のやうに見え、また實際それに相違ないのでせう。恐らく貴女の許を離れては到底一人立ちの出來ない人であらうと私は想像出來ます。「それなら私を裏切るやうなことをしなければよいではないか」と貴女は私に喰つてかゝりなさることゝ想像しますが、それは理窟の上のことで、母代償たる貴女に依つて御主人が性の十分なる滿足を得がたい、恐らくは多少不能症的になつてゐることは疑ふまでもないことゝ存じます。併し性の亢奮や要求が全然ないわけではなくそれは十分にあるのでそれは貴女のやうな母親的な禁制感のない相手によつて求めるより外はないでせう。それ故に、賤業の女の許に時々息ぬきに行くやうになるのは極めて自然でありますが、それが母代償たる貴女を裏切ることを意味するのは本人の十分に意識し自覺してゐられるところで、それ故に、貴女の叱責に會しては一も二もなく流涕謝罪せられるので、御主人の心境の苦惱にも私は十分に同情出來ます。今は「夫への冷笑のみ」と云はれる貴女の御心底にはこれまた滿腔の同情を禁じ得ませんが、一つには貴女がさう云ふ幼兒的な男性を愛する傾向が本來强かつたのが原因だと云ふことを認められて、御主人の幼兒性を分析矯正することに全力を盡されむことを切に祈つてやみません。(記者)

この夢の表明してゐる願望は、邪意をいだいてゐるのは自分だけではないこと、自分は最も尊敬されてゐる人々に比して毫も批難に値せぬといふことなのである。

第三十三例　他の若い女性。この女性は、自分の兄が申分の多い一女性と結婚したのを深く苦にして居り、それによつて自分の家族的愛情が、方向を變へるだらうと考へてゐるのである。

夢――友達のスザンヌが、彼女の弟が心臟病に罹つたといふ話をした。彼女はそのことを、冷淡な、利己的な様子で話した。自分の兄と自分は、その話を聞き、その可愛想な子供を哀れに思つた。

この夢の本人は、望ましからぬ結婚をした罪のある自分の兄が、心臟（感情生活）に於て處罰されゝばいゝと思つてゐるのである。たゞ彼女は、自分が罪を着ないために、その惡意をスザンヌに歸してゐるに過ぎない。兄弟に下劣な怨恨をいだいてゐるのはスザンヌである。處罰されたのはスザンヌの弟である。

夢はこの現實顚倒の方面に於て、反語的、喜劇的、または極めて無稽な模様を帶びることがある。それは常に恐るべき對象を玩弄化して恐怖を輕減するか、崇高な模範を滑稽化するか、または批難すべき要素を高尚化するかにあるが、夢はそれによつて、顚倒された世界の中で、その平衡と位置を恢復するのである。

第三十四例　宗教教育が深く染み込み、夫を欺きたいといふ誘惑に強く驅られてゐる既婚の女性。

夢――N夫妻が、彌撒が終つてから、慈善の催しに足を向けた。

この夢の本人にとつて、N一家は放埒と、不信仰と、不貞の極端として映じてゐるのだから、夢の願望はかう要約できる。卽ち世界を顚倒して、Nには善行を、自分には放埒をさせよ。この後の方の考へは、嚴重な檢閲のために、積極的には表明されてゐないが、しかし暗示されてゐる。

第三十五例　神の審判の嚴格に關する說敎を聞いたばかりの若い新敎徒の男性。

夢――人が、空色の半ズボン下をつけた身體の大きな好人物を自分に示していつた。「これが神だ。」

この場合、願望はかう表現され得よう。「恐らく神はそれほど恐ろしいものではあるまい。」

また一方願望は、悪いことの少かれといふことだけに限られることがある。夢の本人は、先づ自分の屈托または痛心してゐることを思ひ出すのであるが、それに願望が關與して、緩和、慰藉、希望などをもたらすのである。犯罪者は、自分が逮捕されんとする場合を夢に見ることがあるが、しかしその夢には、逮捕に來た人が自分の罪は輕い過ちだと言ふとか、鄭重な態度で自分に接するとかいふ類のことが加はるのである。

幼兒的な起源を持ち、全く抑壓されてゐるある種の願望は、その個人の見る夢の導調となることがある。この種のものには、犯罪的な競爭の夢、近親姦の夢、同性愛の夢、手淫の夢などがある。

第三十六例　若い男性。

夢――自分には妹が一人あつて、自分はその妹と恐ろしく時代のついた大きな館の中にゐた。自分達は、自分達二人用の皿の上の一つの卵を食べてゐたが、自分はこの一つの皿を二人で分け合ふといふことが、二人が極めて仲がよいことを表すものだと感じた。この仲のよさを粉飾するために、自分達は妹は黄味を、自分は白味を食べることに定めた。

解釋――この夢が近親姦願望と關聯してゐることは明かである。卵（性生活の所産）を分けて食べるといふことは、この仲のよさの性的側面を立證してゐる。大體この夢の本人には妹のあつたことがないのだから、この想像上の妹といふのは、母親に對する別の近親姦願望をかくすために生じたものとしか考へられないのである。母親はこの青年の弟を幾人も生み、そしてこの青年はその生殖を目擊して來たのだから、この青年が自分を父親の位置に置いてゐることは明かである。たゞこの青年は、男性的胎種（白味）を女性的胎種（黄味）から分離し、繁殖を避けながら性的親密を保ちたいとの願望をいだいて、自分を父親の位置に置いてゐるのである。卽ちそれは生殖を伴はぬ近親姦願望を表してゐるのである。

第三十七例　若い女性。

夢——自分は海濱で、海水着姿で帆柱を攀ぢ登つてゐた。一人の映畫俳優が自分と一緒に攀ぢ登つてゐたが、彼は黑い手袋を手にはめてゐた。自分は彼が自分に優るのは、この手袋のためだとの印象を得た。

解釋——この夢は、夢の本人が半ば氣づいてゐる露出願望を表明してゐるのである。しかしこゝに表はれてゐる露出癖は、男性と同じになりたい、卽ち自分の身體を示し、それを他人から眺められる俳優と同じになりたいといふことなのだから、それは特殊の露出癖といはねばならない。男性のした行爲、そして彼女が自分もしたがつてゐる行爲は、こゝでは黑い手袋といふ象徵で姿を顯はしてゐる。それが罪に汚れた手を意味してゐることは、この夢の本人の女性が、六歲の時、手淫露出者の行爲を目擊したことを知れば、容易く理解されるのである。この夢は、自分もその時彼と同じ行爲を行ひ得る身でありたかつたといふ願望の表明である。そこにこの女性の示す同性愛的傾向の說明が見出されるのである。

夢の願望は極めて反語的なことがあるが、それは自分を苦しめるものを歡び迎へることがあるからである。かゝる願望は、多數の人々に於て覺醒時にもあることを考へる必要がある。理想のために死んだり、宗敎に入つたり、人類救濟のために贖罪を行つたりすることを考へる人々は、情慾の興奮を得るために自分が人に打擲されるといふことを想像する女性や、意味のわからぬ自殺のことを考へてゐる人間と同じく、反語的な願望をいだいてゐるのであることに變りはない。人間の倒錯の中で一番廣く行きわたつてゐるマゾヒズムは、制裁的傾向（超自我、社會本能、道德意識）の誇大化と、苦惱の情慾化で說明されるのである。

夢は、檢閱された潛在內容に對する辯明の形で、不愉快な要素を導入することがある。

第三十八例　ある少女の夢。自分のかゝつてゐる齒科醫（この齒科醫を彼女は非常に好いてゐるのである）が、自分の口の中へ一つの器具（性的象徵）を入れ、自分に痛い思ひをさせた。（これは自分は決して快樂の誘惑などに負ける人間では

ないといふ辯解なのである。)

第三十九例　別の夢。男振の極くいゝ强盜が自分の室に入り(性的願望)、自分に非常な恐ろしい思ひをさせた。(辯解、處罰)

かゝる種類の夢は、苦惱を伴はざるを得ぬ緊張した葛藤を含むから、多かれ少かれ夢魘の性質を帶びるのである。

第四十例　若い女優。

夢——海邊の大きなホテルで、自分は自分の座るテーブルを探したが、空いてゐるのが一つもなかつた。自分は自分の子供の頃の侍女を見つけ、彼女に自分は彼女の傍に座るといつた。次に自分は劇場の仲間の女優達と連れ立つて階段を下りてゐたが、下から階段を上つて來た監督が、自分に向つて「貴女は何んといふ拙い下り方をするのだ」といつた。

聯想——この夢の本人は若い女優で、自分の職業の中で神經症的に禁制されてゐるのである。眠る前に彼女は、階段の下り方が淑かだといはれる年寄りの先輩女優の惡口を盛んにいつたのである。子供時代の侍女といふのは、すつかり零落した生活を送つてゐる女で、彼女はその女を愛してゐないのだ。ホテルは彼女に、彼女の子供時代、ある男の子との彼女の友情、少女達との彼女の競爭を想起させるのである。

解釋——自分は子供時代(海邊)から、生活の中に一つの位置を探してゐるのにそれが見つからず、零落した女達(子供時代の侍女)の仲間に入らうとしてゐる。この夢の第二の部分は、その說明を與へてゐるのである。その故は自分が母親の位置(名聲ある女優)に代らうとした時、自分は父親(劇場の監督)の氣に入ることに成功しなかつたからである。

この夢に於ては、無意識が處罰を求めてゐる。(それにこの患者は、自分の配役をすべて神經症的に演じ損つてゐるのである。)夢の本人が下り、男性が上つて來るといふことは、性生活の一つの調子を傳へるものであつて、それは父親と母親の觀念(監督と年とつた先輩女優)と關聯して、抑壓と無意識の罪障感を說明するのである。

第四十一例　自分が同性愛者であることを知らぬ一人の男性。

夢――自分は妻と同伴で、ドュプレーとグルネル間の高架鐵道の下を、セーヌ河の方向に向つて散歩してゐた。時は夜中である。自分は恐かつた。瓦斯燈が、奇妙な黄色の光線の中に煌いてゐた。道路の向側を、二人の怪しげな人物、二人の男性が歩いてゐる。その一人が、自分達の方に向つて道路を横切りはじめた。自分はそれを妻を掠奪せんとする強盜だと考へたが、しかし自分は何んとしても行動が起せない。強盜は遂にやつて來て、叫ぶ妻を捕へ、痛い目にあはせてゐる。自分は彼が妻を自分から掠奪せんとしてゐると感じたが、しかし自分には叫ぶ力も、鬪ふ力もなかつた。

聯想――場所。イヴェール競馬場の近傍。戸外遊戯。惡漢。背後から攻擊される危險。自分の夢は、拳鬪の大選手の夢かも知れない。――攻擊する人間。筋肉の發達した大きな男。この男は、自分の高等學校の同級生で、自分より年上で力が強く、以前は同性愛を實行してゐたが、その後結婚した男に似てゐる。

解釋――この夢は同性愛の夢で、抑壓された願望が、人格の分裂でかくされてゐるのである。妻は、夢の本人の女性的側面を表はしたものである。道路の向側を對稱的に步いてゐる人物は、同じく高等學校の一同級生の二重性生活、同性愛と異性愛を表はしてゐる。夢の本人の同性愛的半面に接近して來たのは、その同性愛的側面である。從つてこの夢は、女性の態度で同性愛的攻擊を受けたいといふ、強い檢閲を受けた願望を表明してゐるのである。苦惱は抑壓の作用である。瓦斯燈のおかしな黄色の光は、夢の本人の變態的性生活の症徴である。その上この夢は、折合の惡い妻を去りたいといふ夢の本人の半ば自認してゐる願望を二次的に示してゐるのである。(彼はそれから六年の後、離婚を定めねばならなかつた。)

この種の反語的願望の類には、神經症の男性に於て極く頻繁に觀察される去勢されたいといふ希望、卽ち女性が不快とするかも知れぬ點に於て女性に代りたいといふ希望、幼兒時代の魅力や、母親の世話と愛撫などを取戻すために、男性的特徴を抛棄したいといふ希望もまた數へられる。

第四十二例　三十歳前後の獨身の男性

夢――自分は手術を受けた。自分は狹い、垂直の煙突を下りさせられた。下では、一人の看護婦が、待つてゐて自分に對して世話の限りを惜まなかつた。

解釋――夢の本人は、強い本能感情的退行を示して居り、殊に母親と共に生活するために、あらゆる地位と結婚に思ひを絕つてゐるのである。この夢は、彼の無意識のかういふ希望を表明してゐる。「自分は、母親のごとき世話（看護婦、子守、乳母）を人から受ける子供として女性の周圍で振舞ふために、去勢（手術）を承諾する。」煙突を下るといふことは、自分が小さくなること、受動的となることを意味するが、しかしそれはまた出產を仄めかしてもゐるのである。我々は降下の方向を顚倒することによつて、そこに母親の胞內への復歸の希望を見ることができる。

第四十三例　サヂズム的表現に惱まされ、マゾヒズム的態度で反應してゐる男性。

夢――自分の義兄が、生殖器のない代りに腹部に一匹の生きた鼠を嵌め込んでゐる。自分はそれを恐怖の念を以つて眺めた。

解釋――義兄は一般に一個の競爭者である。彼は父親とならうとしてゐる。夢の本人は、結婚して子供がないのである。この父親は先づ競爭者を去勢して、恰かも女性に分娩させるかのごとく（夢の本人は、母親が自分の弟を生む時、非常な難產に苦んだことを幼兒時代に知つてゐたのである）、恐るべき母性を課したいといふ願望を表明してゐるのである。更にその上夢の本人は、自分自身が罹つてゐる女性と同一化する傾向を、義兄の上に投出してゐるのである。この後の解釋の證據は、次に擧げる彼が同じ夜見た他の夢によつて與へられる。

第四十四例　自分は女性の生殖器を具へてゐた。

女性が男性になりたいといふ願望を示す夢は數が遙かに多い。しかし夢の表現のそれに與へる有利な外觀にもかゝはらず、我々はその中に往々マゾヒズム的要素があることを識別できるのである。

我々は夢の中で互ひに矛盾した傾向が縺れ合ふことを述べた。夢の中の情況が、その結果二つの矛盾した傾向の交叉點となることが頻繁に生ずるのである。

第四十五例　若い男性。この男性はそのコムプレクスの結果、完全に積極的な男性的特徴とは甚だしく緣遠くなり、彼が一種の母親と看做し、あらゆる發意をその側に求める一人の女性と關係を結んでゐるのであるが、しかし彼は自分に自分が男性であることを感じさせるような女性に逢ふと、往々その女性を征服したい願望を感ずるのである。

夢――何か神祕的な祭典の進行してゐる公園で、尼僧のごとき白い服の一人の女性が自分の方へ歩いて來て、その唇を自分に差し出した。しかしその瞬間に自分の愛人のそこにゐたことが、自分をして彼女から顏を背けさせた。

聯想――白衣の女。彼女は自分が以前を褥を共にし、誰よりも自分の氣に入つたある女性と同じく、やゝ頑丈な、肉附のいゝ女性であつた。自分の母親もまたそれと似て肥つた女性であつた。儀式は何か神聖なものであつた。

解釋――この矛盾した諸要素を以つてしては、どの女性が神聖な愛、卽ち母親の愛を表象し、どの女性が世俗的な愛、卽ち眞に性的な愛を表象してゐるのか、それを知るのは極めて困難である。一方では、尼僧が接吻に唇を供し、その尼僧が彼を性的に最も動かした女性に似てゐる。他方では、彼女は神聖な特徴を持ち、彼の母親に似てゐる。更に我々は、彼が現在性的關係を持してゐる愛人もまた、多くの點で母親的であることを知つてゐる。從つてこの夢は、幼兒的な愛を男性的な愛のために斷念するといふ願望を表明してゐるとすることはできないが。しかしその反對だとすることもまた不可能である。唯一の可能な飜譯は次のものである。「女性に關しては、人は幼兒的な寵愛と男性的な征服との間を逡巡し得る。」この夢は二つの願望の交叉點であることに止り、決定に達してゐないのである。

第四十六例　强度な父親コムプレクスを持つ冷感症の女性。

夢――敎會で自分の主任司祭が、司敎冠を冠つて、自分に話しかけるために、自分が自分のスエーターを編み終るのを辛

抱強く待つてゐた。自分の靴下と肌着で一バイの自分の戸棚はすぐ傍にあり、開かれてゐた。司祭は祭壇の傍にゐて、自分の方を向いたが、しかし彌撒を唱へたのは一人の女性であつた。

聯想――司祭。彼は間もなく司教となるのである。自分は、この司祭が自分に對して示す全くプラトニックな心盡しに非常に感動してゐる。彼の注意は、自分を心樂くさせる。

――スエーター。これは事實は自分が夫のために編み上げたばかりのスエーターであるが、しかしその袖口が、自分が娘の最初の聖體拜受のために作つてやつた下着と同じなのである。

――肌着戸棚。自分の眼に殊に映つたのは靴下である。それは脱ぎたてで足の形が殘つてゐる時のように、膨れてゐた。

――彌撒を唱へた女性。女性にとつては不可能なこと。

解釋――夢の本人は、男性、ハツキリいへば男性的特徴（冠）のあらゆる屬性を具へた父親イマゴオが、衆人の前で自分に名聲を與へるといふ願望を表明してゐるのである。

教會は、父親との關係の尊敬すべき、神聖を性質を象徴してゐるのである。しかしながら開かれた戸棚は、神聖な性質と一つの對照をなしてゐる。それは裸にされた女性の性を象徴してゐる。殊に靴下は、夢の本人が自分の下肢と、それが男性の間に惹起する興味とに滿足してゐることを知る時、特に情慾的意義を帶びて來るのである。けれどもまたこの夢の本人は、純潔（最初の聖體拜受）の純白な象徴を夢に見て居るが、それは恰かも彼女が自分を男性化して、父親に對する愛の純潔を守らんとしてゐるのを意味するかのごとく、同時にまた男性的特徴（夫の衣服）の象徴なのである。この男性的態度の明白な顚末は、彌撒を唱へる女性の中に現はれてゐる。最後に性的倒錯は、彼女が男性に自分を辛抱強く待たせたこと、卽ち彼女が男性の相手に待つことを强ひて欺いたといふ事實の中に明白に表現されてゐる。（夫婦間の性的關係に於て、この夢の本人は、夫が餘りに早過ぎて、彼女を待たぬことから不滿足が多いのである。）要するにこの夢は、父親に對する愛を維持すると共に、性的な相手を去勢するといふ二つのことを一時に目指してゐるのである。

次に擧げるのは、ある男性の愛憎並存性の同性愛の夢である。

第四十七例　自分の義弟が、ピストルを放つて自分を追ひかける。自分もまた同じ方法で身を防いだ。

解釋――夢の本人が、自分の義弟に對して特に激しい同性愛的慾望をいだいてゐることを知れば、ピストルを放つといふことの性的象徴は自ら明かとなる。

第四十八例　別の夜、この同じ男性が自分の義弟についてまた別の夢を見たのである。

夢――自分と義弟は格鬪をはじめたが、しかし毆るのがうまく行かない。

解釋――毆るのがうまく行かぬといふ事實は、この夢の愛憎並存的性質、格鬪か愛撫かを示してゐるのである。實際に於て、義弟に對する同性愛的欲望を禁壓した後、この夢の本人は、義弟に對して特に激しい憎惡を表示しはじめたのである。

時によると、夢は一つの問題を提出し、對立する解決の十字路を示すだけに止ることがあるが、しかし一定の選擇が示されぬ場合は極く珍らしい。

第四十九例　性生活に對して强烈な抵抗を示して來た女性。

夢――自分はミューズ溪谷へ休暇旅行をしてゐて、とても大きな室の中にゐた。自分は子供を二人連れてゐたが、一人は少女であつたが、別の一人は男の子であつたか、女の子であつたか？　一人の馬術師が、室の中で馬を歩き廻らせようとする。自分は彼に間違ひが起るといけないこと、こゝには子供がゐることを注意した。自分は一種の障壁を室の入口に下したが、それでも馬は室に入つて來た。この大きな動物は室の中を跳ね廻り、自分の背後を通つて窓の方へ行つた。自分は馬が窓硝子を壞すのを恐れたが、馬は窓硝子には何もしなかつた。次いでやはりこの同じ室で、自分は座つて、出立の準備をしてゐる。自分は黒ビロードの、自分に甚だ似合ふ美しい服を着てゐる。自分の傍には、ジュラから來た女友達がゐる。自分

はかういふ考へを表明した。「また出立だ」――悲しみと共に、この美しいミューズの溪谷を思ひながら。

聯想――二人の子供。自分が幼兒の時、自分はよく弟だか、妹だかを連れて來ると脅かされた。

――ミューズ。幼兒時代の滯在。非常に美しいあるもの。

――馬。力、亂暴、恐怖。

――黑ビロードの服。自分はある日それを着て見たが、その時それは非常な成功を博し、自分は大變媚びられたのである。

――ジュラの女友達。男性を恐れない女性である。

解釋――夢の本人が去るのを悲んでゐるミューズ溪谷の滯在は、幼兒時代に停滯してゐたいといふ願望を示すものである。それは彼女が、自分に弟か妹かゞ與へられるといふことが問題になつた時、男性に對して恐怖をいだいたからである。しかしこの夢は、そのほかに男性（馬）といふものが、恐らく彼女自身が男の子か女の子かを持つといふ場合を除けば、恐ろしいものでないといふことを示してゐる。その上彼女は成功を博し、自分の女友達と同じ行爲をすることができる 。（黑色の服、女友達がそこにゐること。）一番最後には、この勵しを力として、彼女は自分が幼兒時代を本能感情的に離れることを承諾してゐるのである。

第五十例　弟を持つたばかりの十三歲の少女。

夢――自分は赤坊を見に行つた。赤坊はとても汚らしかつた。ババと同じように茶色の痣があるが、それはもつと黃色く、もつと汚い。ママは自分にいつた。「心配しなくてもいゝのよ。鼻が大きくなれば、もつとずつと立派になるのよ。」

解釋――この夢は、この少女の關心を將來惹き得るのは、生れた子供のたゞ性的側面だけなのにもかゝはらず、乳呑兒としてのその子供の存在が、彼女にとつて不快なのだといふことを明示してゐる。この性的關心に就ては、彼女は父親と母親の觀念を介入させてゐる。生れた子供の性的價値（鼻の伸長）を豫見してゐるのは、女性としての母親であるが、それは結局この夢の本人が、母親と同じぐらゐな女性になれば、現在ではまだ彼女に不安を感じさせることに、興味を示すようにな

るといふことに歸するのである。加ふるに赤痣についての父親との比較は、彼女が男性的性生活の觀念を、明確に父親の觀念に歸してゐることを示すものである。

これら種々な要素は、次のごとく要約し得るであらう。「この弟の存在は不愉快である。しかしこの子供は、自分の父親と母親を接近させた性生活の故に、將來自分の興味を惹き得ることにならう。」

夢の中で、最も緊張度の激しい(情緒及び感動の立場からいつて)部分は、願望の成就を表象し、精神的緊張度を表現してゐる部分である。それは夢に伴ふすべての要素に、一種の幅射を與へるのである。

上に擧げた第四十九例についていへば、最高頂を構成してゐるのは、馬が室に入つて來たこと(性的行爲の象徴)と、窓硝子が壞されること(處女性喪失)の恐怖である。

夢に於ける願望の滿足は、一つの反射として說明されるといふ者がある。欲求の表象に對して、滿足の表象が結合されるといふのである。しかしながら事實に於てはこの想像上の滿足は、無意識的興奮を中和する役をするのであつて、この無意識的興奮は、その活塞がなければ、精神症患者に於て生ずるごとく、行動に、無統制な、非社會的な行動に到達するのである。夢は、餘りにも強く抑へられてゐる傾向の爆發を避けるために、一つの淸算の仕事を果してゐるのである。それは妥協の可能な限りに於て、本能(深層無意識)の一次的憧憬と、敎育または社會的習慣(フロイドの云ふ前意識)の二次的傾向との間に、一つの妥協をもとめてゐるのである。均衡の破壞は、すべて覺醒に終るのである。

編輯後記

謹賀新年　編輯部員

興亞の文化建設の課題を頭上に重苦しく感じてゐる我等日本人として東洋文化心理と云ふ大問題を捕へての研究に最善を盡して見ましたが、讀者諸氏に多少でも裨益するところあらば幸と存じます。分析者として固よりナルチスティシュな樂天的なことは云へません。併し樂天的なことを云ひ得るものもしありとせば、それはナルチスムスを分析解消してゐる筈の分析者以外にはなかるべき筈です。

×

土屋氏の久しぶりの執筆を感謝します。而も非常に出來のよい論文であつて、氏の健康の回復と才能の進展とを同慶いたしませう。氏は元來思辨的な頭腦の所有者で、そこに長短兩面があります。事實の分析觀察を怠らず、具體的基礎に立つて思辨の殿堂を築いて行かれたら莊麗な論稿を愈々多く作られるでありませう。

山口氏の「西遊記」論はこの寓話的小說への分析解釋として固より多少は公式的に流れることは已むを得ませんが、それにしてもこの寓話の分析的意義を闡明せられた歷史的功績は沒すべからざるものがありませう。

奧本氏の論文は涅槃コムプレクスを人類の母コムプレクスからでなく父コムプレクスから解釋し得べき可能性を暗示せんとした點に獨創性があります。まだその暗示が明示として成功してゐるかどうかは疑問でありますが、今後の論策を期待します。

×

本號も前號正誌の餘波を受けてフロイド博士追悼記事が散見してをりますが、杉宏氏譯の「ゲーテの自然」論は特に適切なる寄與として感謝します。氏は山口高校出身の方であります。

伊福部隆彥氏の始めての御寄稿を感謝します。氏は「人生道場」の主宰者であります。

小野田幸雄氏がエスペラントでの論旨紹介は本誌の國際性を高めることになりました。

×

本號から定價を六十錢にしましたが、諸物價高騰の折柄やむを得ない次第で、何分あしからず御諒承下さい。今までいろ／＼細工

して舊定價維持に努力して來ましたが、遂に已むを得ない仕儀に立至りました。

併し直接購讀の方で今までにお拂込みの方々には、その誌代の盡きるまで舊定價のまゝで差支へないことにいたします故、その旨お含みのほど願上げます。

×

その後の新特別誌友諸氏を左に御紹介申上げ、御支援を謝します。今度は珍しく少う御座いました。

▼朝　鮮……朴　松　勳氏
▼瀧野川區……井　田　實氏
▼麹町區……豊田碓二郎氏
▼北支那……竹　下　茂氏
（安藤武雄氏紹介）
▼名古屋市……平　井　哲氏
▼兵庫縣……太田梶太氏
▼滿洲國……森　洋氏
▼長野縣……長江不知男氏
▼大連市……岡林盛光氏
▼荒川區……上野一夫氏
（長尾忠氏紹介）
▼函館市……江尻　正男氏

×

大槻氏の新著『續・戀愛性慾の心理とその分析處置法』は近く多分紙が手に入りさうですから、愈々新刊に着手いたしました。前著『戀愛性慾の心理』と同樣御愛讀下さい。

『槪論』第六版は紙が手に入りましたから、この方も必ず近刊いたしますが、『續・戀愛』の方を先に出したいと思つてをります。

★

次號正誌は『日本女性心理』研究號といたします。女性心理と云ふものはなか〳〵深遠なもので、これを馬鹿にして馬鹿に出來ないことはないが、これを深く研究して見たらまた限りなく深いものでありませう。本誌本號に於いて、東洋文化はいゝ意味でも惡い意味でも女性的でありエス的であると云ふことになりましたが、然らば日本女性の心理は如何と云ふことが、東洋新文化建設のためにもまた重大な問題となつて來るわけであります。樋口一葉、細川ガラシヤその他個々人の分析研究も試みますが、我等は必ずしも日本女性にのみ局限せず、廣く女性心理研究に亙りたく思ひ、西洋の關係文獻でも二三飜譯せんとし、藤田由美氏、杉宏氏等に高囑してあります。御期待、御愛讀の程願上げます。

昭和十四年十二月二十五日印刷
昭和十五年一月一日發行
（月刊）定價六十錢
（外地定價）六十五錢

東京市本鄕區駒込動坂町三二七
編輯兼發行人　大槻憲二
東京市板橋區板橋町三ノ六四
印刷所　帝都印刷株式會社

定價一部　六十錢（送料共）
半年分　一圓八十錢（送料共）
一年分　三圓六十錢（送料共）

御註文規定

・本誌の御註文は一切前金に御願ひ致します。
・御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
・切手代用の場合は一割增に願ひます
・本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

東京市本鄕區駒込動坂町三二七
發行所　東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂・大東館・北隆館・（大阪）福音社

月刊誌
正誌・冊子・隔月刊
正誌五十錢(送共)

精神分析

直接購讀者に限り
半年六冊一圓五十錢
一年十二冊三圓(送料共)

昭和十四年五月　オナニーの研究　第七卷第五號

東京精神分析學研究所
本鄕區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番

合本單册『精神分析』(特輯題目及び定價)一覽表

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七・振替東京七八八一七番

第一巻・上

創刊號(昭和八年 五月)「エディポス研究號」※
第二號(同 六月)「フロイド記念號」
第三號(同 七月)「教育研究號」※
第四號(同 八月)「夢の研究號」(第一)※
(合本としては品切)

第一巻・下

第五號(同 九月)「兒童心理研究號(第一)」※
第六號(同 十月)「社會思想・犯罪心理研究號」
第七號(同 十一月)「戰爭心理研究號」
第八號(同 十二月)「夢の研究號」(第二)
(合本としては品切)

第二巻・上

第一號(同 九年 一月)「心理療法研究號」
第二號(同 二月)「女性心理研究號」※
第三號(同 三月)「傳説研究號」
第四號(同 四月)「文學研究號」
(合本としては品切)

第二巻・下

第五號(同 五月)「ドストイエフスキー研究」
(六月休刊・以下隔月刊行)
第六號(同 七・八月)「戀愛心理研究號」※
第七號(同 九・十月)「性慾心理研究號」※
第八號(同 十一・十二月)「夫婦生活研究號」※
(合本としては品切)

第三巻

第一號(同 十年一・二月)「兒童心理研究號」(第二)※
第二號(同 三・四月)「宗教心理研究號」※
第三號(同 五・六月)「自殺・情死心理研究號」
第四號(同 七・八月)「同性愛と異性愛」
第五號(同 九・十月)「家庭問題と親子關係」
第六號(同 十一・十二月)「常態及び變態の性心理」
(合本としては品切)

第四巻

第一號(同十一年一・二月)「性格改造研究號」
第二號(同 三・四月)「母性と妖婦研究號」
第三號(同 五・六月)「夢と幻覺研究號」
第四號(同 七・八月)「兒童分析と教育研究號」
第五號(同 九・十月)「愛慾葛藤の諸問題」
第六號(同 十一・十二月)「道徳の分析」
金 三 圓(送料十五錢)

第五巻

第一號(同十二年一・二月)「思春期の研究」
第二號(同 三・四月)「不良少年少女の心理」
第三號(同 五・六月)「生理と心理」
第四號(同 七・八月)「男性と女性」
第五號(同 九・十月)「男女性格分析」
第六號(同 十一・十二月)「幼兒心理研究」
金 三 圓(送料十五錢)

※印は單册としては品切、その他は在庫す。單册代價送料共各五十錢

「精神分析」合本各巻一部三圓五十錢・送料共

第六巻（昭和十三年度）

第一號（一、二月號）夢と象徵（正誌）
第二號（三月號）文藝と繪畫（正誌）
第三號（四月號）東洋醫學と分析（冊子）
第四號（五月號）處女性の問題（正誌）
第五號（六月號）斷種法と優生學（冊子）
第六號（七月號）貞操の心理（正誌）
第七號（八月號）受分析者の心得（冊子）
第八號（九月號）自己愛の研究（正誌）
第九號（十月號）分析學邦文獻（冊子）
第十號（十一月號）神經症研究（正誌）
第十一號（十二月號）分析學の勸め（冊子）

第七巻（昭和十四年度）

第一號（一月號）金錢心理（正誌）
第二號（二月號）自尊心の再建（冊子）
第三號（三月號）心理經濟（正誌）
第四號（四月號）精神衞生（冊子）
第五號（五月號）自慰の處置（正誌）
第六號（六月號）全體主義（冊子）
第七號（七月號）愛情と憎惡（正誌）
第八號（八月號）國民精神保健運動（冊子）
第九號（九月號）精神病への理解（正誌）
第十號（十月號）ユダヤ問題觀（冊子）
第十一號（十一月號）結婚の諸問題（正誌）
第十二號（十二月號）知識階級の覺悟（冊子）

單冊正誌五十錢・冊子十錢・各送料共

特別誌友規約

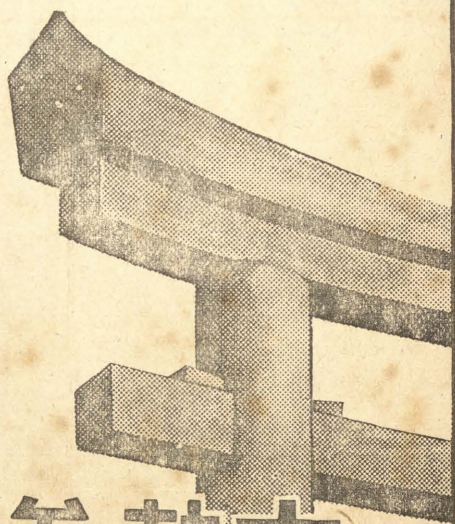
一、本研究所在外研究會員を特別誌友と稱す。

一、特別誌友は本誌の豫約購讀者として半年分（一圓五十錢）又は一年分（三圓）前納の義務を有す。

一、特別誌友は偶數月發行「冊子精神分析」の無代配布を受く。

一、特別誌友はその研究、感想、報告を、編輯部の了解を得て本誌上に發表することを得るのみならず、司會者の承諾を得て研究會、講習會に出席することを得。

一、希望者は購讀料金と共に、住所、姓名は勿論、年齢、職業その他を報告ありたし。（且つ何月號より送本すべきかを明記せらるべきこと。）

昭和十三年六月十日第三種郵便物認可
昭和十四年十二月廿五日印刷納本
昭和十五年一月一日發行
毎月一回一日發行
精神分析 一月號
定價六十錢・外地定價六十五錢

VIII. Jahrgang, Heft 1-2. Jan.—Feb., 1940. Erscheint zweimonatlich.

Tokio Zeitschrift für Psychoanalyse

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse“

(Hefttitel: Die orientalische Kultur)

INHALT

Preis des Einzelhefetes, 50 sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag
327. Dozakacho. Hongoku Tokio Nippon